
九条菜月
Natsuki Kujo
華国神記
妖霧に惑いし者



華国神記

妖霧に惑いし者

九条菜月
Natsuki Kujo



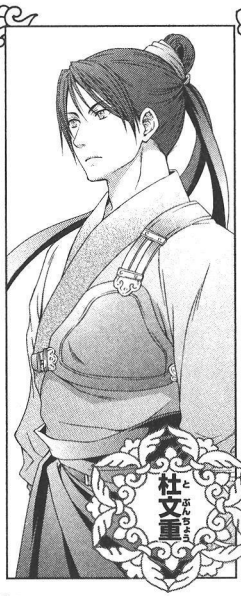
口絵・挿画　由貴海里

目次

序章……9
第一章……19
第二章……46
第三章……79
第四章……91
第五章……109
第六章……128
第七章……146
第八章……163
第九章……174
第十章……186
終章……214
あとがき……222

登場人物紹介



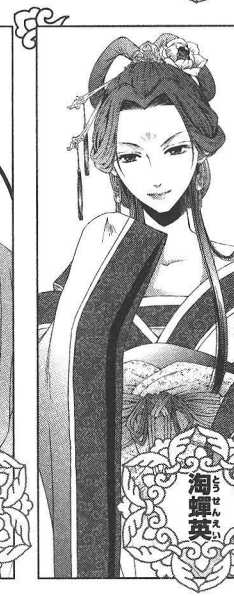

杜文重


姫子慮


韓楊秀


郭洪来


呂翰栄


淘嫣英



李沸儀
現皇帝

愛妾

黎貴妃
皇帝の寵姫

親子

親子

李博焚
太子

腹違いの兄弟

祥安

支援

韓楊秀（27歳）
禁軍右飛龍将軍

親友

鄭玄楽（27歳）
春蘭から真名を奪った男

花興奏（57歳）
中書令（中書省の最高責任者）
太子派の筆頭

幼馴染み

真名を奪う

追っている

上司

部下

腹違いの兄弟

伯父

姪

花翠蓮（15歳）

花玉翠（14歳）
花家の美人姉妹

鄭仲望（24歳）
元禁軍の気術兵。
現在は中書省書物補修係

李春蘭
（300歳／主人公）
小さな邑の元守り神。
真名を奪われ人間に戻る

家主

居候

雇い主

家僕

呂翰栄（？歳）
謎の男

高友寧（13歳）

孫啓璋（13歳）
鄭家につかえる少年たち

姬子慮（25歳）
龍乎虎慈軍隊長

仲間

杜文重（23歳）
子慮の副官

龍乎

淘蟬英
妓楼〈黄海楼〉の女楼主

郭洪来（20歳）
気術士

仲間

兎天（？歳）
鬼面で顔を覆う組織の二番手

猩猩緋



人物相関図

華国神記

妖霧に惑いし者



濃い霧が立ち込める山奥だった。

巨大な木々から伸びた枝や葉が日光を遮り、昼間にもかかわらず、周囲は夕闇のような仄暗さに埋もれている。

梢を揺らす風もなく、虫の音すら聞こえない静寂。異様なまでに静まり返った中、まるで場違いなほど荒い息をつきながら斜面を駆け下りる男がいた。

男は曹といった。

歳の頃は三十過ぎ。身に纏っているのは薄汚れた短服のみで、髪は短く、結いあげるほどの長さはない。先ほどまで、背に食糧の詰められた麻袋を背負っていたが、体勢を崩した拍子に地面へと放り投げてしまった。武器も食糧もない手ぶらの状態だったが、曹の頭にあるのは逃げることのみだった。

逃げろ、逃げろと、本能が曹を急かし続けている。曹はそれに従う以外の選択肢を持たなかった。ただひたすら、息が続く限り斜面を下り続けた。

曹はこの山に連れて来られる以前、恵まれた体格と腕っ節の強さを活かし、妓楼が並ぶ界隈で日雇いの用心棒として銭を稼いでいた。だが、ある時ほんの出来心から、雇われ先の妓女に手を出した。下位の女だから大丈夫だろうという甘い考えはすぐに打ち砕かれた。

働き口を失ったのみならず、花街への出入りまで禁止されてしまった曹は、しかたなく強請りや集りで糊口を凌いでいた。龍乎に捕まったのは、運が悪かったとしかいいようがない。いい稼ぎ場だと思った場所に、曹のような無頼漢を捕らえるための罠が張られていたのだ。

曹は罪人として捕縛された。すぐに獄舎に送られるものと思いきや、他の罪人たちと共に連れて来られたのは都から離れた山奥であった。

そこで労働を強いられた。曹らの仕事は、岩盤から石を切り出し、荷馬車で麓の邑まで運ぶことだった。

単調だが、力と根気のいる作業である。少しでも手を止めようものなら、役人たちの罵声と共に、その手に握られた鞭が情け容赦なく振るわれた。

山に入ってからは、鎖や木枷で体を拘束されるわけでもなく、逃げようと思えばいつでも逃げることができた。

しかし、右も左もわからぬ山奥での単独行動は、自由という魅力的な言葉を前にしても躊躇われる。ひとたび迷ってしまえば、それは〝死〟を意味するからだ。また、役人たちに捕まったら、見せしめとして殺されてしまう恐れもあった。

そもそも、たとえここから脱走したところで、どこにも行く当てのない曹が、真っ当な暮らしを送れるはずがない。再びかつてのようなその日暮らしの生活に身を落とすだろうことは、自分でもよくわかっていた。

だが、曹に転機が訪れた。

他の罪人たちの中には、一人ではむりでも複数ならば、と考える者がいたのだ。

曹に話を持ちかけてきた男は応といった。

歳は曹の方が二、三歳ほど若いように思えた。体格のいい曹とは反対の、貧弱で小狡そうな顔立ちの男だった。

花街で働いていた時ならば、たとえ声をかけられたところで見向きもしなかっただろう。むしろ、貧弱というだけで侮蔑していたかもしれない。

応に連れられて行った先には、何人かの男たちがいた。曹を入れれば、全員で七人。年齢は二十から三十過ぎの、腕に自信がありそうな者たちが揃っていた。どうやら、応は無闇矢鱈に声をかけたわけで

はなかったらしい。

「数日分の食糧を奪って、麓の邑まで行くんだ。邑に駐屯している役人から金を奪って、地方に逃げれば絶対に捕まりっこねぇ」というのが、応の主張であった。

役人たちが追って来るのでは、という危惧の声があがったが、麓まで逃げ切ることができれば平気だという。

罪人たちを監視している役人はそれほど多くない。逃げた者を追い掛けるために割ける人数はわずかであり、それもいつまでも追い続けることはないらしい。

残りの罪人たちが、見張りの人数が減ったことをきっかけに、〝自分たちも……〟と考えるのを防ぐためなのだそうだ。

それに、逃亡した罪人は死亡扱いとなるため、手配書が地方に回ることもないという。罪人に逃げられたことが明るみになれば、役人たちも重い罪に問われる。それを厭う役人たちが、〝逃亡〟ではなく〝死亡〟と報告し、欠けた人数はまた罪人などから補充するのだ。

山奥での作業のため、妖に襲われた、崖から落ちた等、理由づけに困ることはない。今まで姿を消した者たちも、連れ戻されない限りみなそのように処理されたのだそうだ。

己の境遇には都合のよいそれを、なぜか曹は不快に思った。そんな簡単に一人の人間を戸籍から抹殺してしまえることに。なによりも、お前はその程度のちっぽけな存在だと言われているようで。

だからこそ、曹は脱走することを選んだ。偉ぶった役人たちに刑期が終わるまで扱き使われるよりも、死んだことにして人生を一からやり直す方がましだと思ったのだ。

集まった男たちも、思いはみな同じのようで、全員が躊躇うことなく首を縦に振った。

決行は、月のない深夜。

曹たちは、見張りの役人を集団で襲い抵抗を封じたあと、倉庫代わりとしている洞窟から持てるだけの食糧を運び出した。

入念な計画もあって、物事はなんの支障もなく驚くほどすんなりと進んで行く。

逃走経路に選んだのは、麓の邑まで続く山道だ。闇雲に獣道を逃げ回るよりも、荷馬車が通れるように整備された道を進んだ方がいい、と応は言った。確かにそれならば夜道でも迷うことはない。

斜面の続く山道を、深夜に馬で追い掛けて来る愚か者はいないだろう。たいして行かずに落馬するのがおちだ。追っ手がかかっても、相手はこちらと同じ徒歩。すぐに追いつかれることはない。

そう予想していても、すでに追っ手が迫っているのではないかという恐れから、一行は急かされるように黙々と歩き続けた。

誰かが早足になる度に応が注意を促す。体力を使い果たし、途中で脱落者が出ることを危惧したようだ。誰もが駆け出したい気持ちを抑え、遅くはないが早くもない一定の速度を保った。

どれほど歩いただろうか。やがて夜目でもわかるくらい濃い霧が立ち込めはじめた。

曹たちは、それを喜んだ。闇に加え霧まで出てきたとなれば、役人たちは遭難を危惧して追跡を控えるかもしれない。最悪、死亡したことにすればいいだけの罪人たちを、命を賭してまで追い掛けようとは思わないだろう。

危機感が薄れ、黙々と歩くだけだった中に、一言二言と、徐々に会話が増えはじめた。話題は主にこれからのことである。地方に逃げたあとはどうするのか、当てがある奴はいるのか——いっそ、猩猩緋に身を投じてみるか。

獄舎に繋がれている時には、考えもしなかった未来。山道を進む足にも自然と力が籠もり、時折、笑い声まであがるようになった。

「俺は一度、邑に帰りてぇなぁ」

曹の隣から、懐かしむような声があがった。名前は確か段といったか。

彼は、近隣の邑から人足として集められた。罪人の曹と違ってまとまった賃金も出る。

だが、ここに来る前に前払い分として渡されたそれは、当初に提示された額よりも遥かに乏しいものだったらしい。それでもここへ来たのは、足りない分は後払いの際に上乗せするという言葉があったからだそうだ。

どう考えても、人足の数を確保するための出鱈目だろう。ここに来てそれに気付いた段も、「騙された」と、悔しげに語っていた。

おそらく正規の賃金の一部を、役人たちが自分の懐に入れているのだ。憂さ晴らしに人足たちを小突き回す小役人らが、馬鹿正直に賃金を払うとは思えなかった。

だからといって、それを理由に仕事を辞めて邑に戻ることも難しい。曹が来る前に、正規の賃金が払われないのならば仕事を辞めて邑に戻りたいと主張した男がいたそうだ。

しかし、役人たちはそれを認めなかった。それどころか、見せしめのように嬲り者にし、結果、その男は命を落とした。以来、表立って不満を口にする者はいなくなったという。

必要な資材の調達が終わらない限り、罪人たちは元より邑人たちも解放されることはないだろう。無事に終わったとして、残りの賃金も果たしてもらえるかどうか。

たとえ集団で訴えたところで、容赦のない暴力で黙らせられることは目に見えていた。想像以上に過酷な労働と不条理な役人たちの対応に、段は思い切って応の誘いに頷いたのだという。

「邑に帰っても、役人にばれたらすぐ連れ戻されちまうぞ」

「わかってるさ。心配してるだろうから、ちょっと顔を出したいだけなんだ。ほとぼりが冷めるまでは

他所で働くよ」

段はやるせなさそうに応じた。

曹に家族はいない。気付いた時には浮浪児として妓楼界隈をうろついていた。おそらく、妓女の誰かが母親なのだろう。

それを知りたいとは思わなかったし、知る必要もなかった。知ったところで、なにも変わりはしないのだから。

——家族なんぞ、いた方が面倒だ。

だから、故郷を恋しがる段の気持ちはわからなかった。ただ、そういう者もいるのだな、と思うだけだ。

「働き口があればいいがなぁ」

「そうだな」

前方から聞こえてきた声に、曹は深く頷いた。華安でも働き口は少なかった。反乱や一揆が頻発しているという地方で、他所者を雇ってくれるところがあるとは思えない。

それに、短髪は罪人の証である。巾を巻いて誤魔化すにも限界がある。髪が伸びるまではまともな職につけないだろう。髪が残っている段が羨ましかった。

「てめぇは、その極悪人面をなんとかしねぇ限り、どこも雇ってくんねぇだろうよ！」

前方から挑発的な台詞が飛んできた。だが、その声音に悪意はない。単純にからかっているだけのようだ。

それがわかっているのだろう、応じる声にも気軽さがあった。

「んだと！　てめぇだって、似たようなもんじゃねぇか！」

「はっ、一緒にすんなっ！」

「怒鳴るな！　見つかりてぇのか！」

逃亡中とは思えぬほど賑やかな雰囲気である。役人たちの目がある場所では日常会話すら憚られた。言葉を交わせるのは、ねぐらとしている掘っ立て小

屋に入った時くらいだ。それも、できるだけ声を抑えなければならない。

重度の束縛から解放された安堵からか、追っ手に対する緊張感を除いても、誰もがこれまでにはない陽気さだった。

いや、むしろ今が本来の姿なのだろう。あの場にいる者たちは、監視の役人たちですら例外なく荒んだ目付きをしていた。

あの場が異様であり、曹は自由を得てはじめて、自分たちの感覚が麻痺し切っていたことを実感したのだった。

しかし、場違いなほど平和な空気は、突如として破られることになる。

「――おい、ちょっと待ってくれ。後ろの奴が遅れてるようだ。逸れたんじゃないか？」

暗闇からあがった声に、曹は思わず歩みを止めた。ただでさえ視界の利かない闇と霧のせいで、周囲を見回してもどこに誰がいるのか把握できない。時折、自分の背格好と同じくらいの黒い塊が動いているのを視界に捉えるくらいだ。

「誰だ？」

応の声が闇に響いた。

一人欠けたことに気付いた男は、「後ろの奴だ」と困惑するように答える。殿を歩いていたのは誰だっただろうか――思い出そうとしたが、食糧を奪ったあとは逃げるように移動したせいでよく覚えていない。

「逸れても道に迷いさえしなけりゃ、麓の邑で合流できるだろうよ。それより、さっさと行こうぜ」

別の場所から、不機嫌そうな声があがった。立ち止まっていることに焦りを感じているらしい。他の者も同様で、待つことはできないという意見が口々にのぼる。

「わかってる。だが、麓の邑にいる役人を襲うには、人数が揃ってる必要があるんだ。今は一人でも惜しい」

応の言葉には一理あった。しかし、いなくなってしまった一人を、この視界の利かない中から捜し出すのは至難の業である。

応はなんとか消えた者を捜そうと主張していたが、同調する者は一人もいなかった。共に協力し合い脱走した間柄ではあるが、優先するのは己の命である。逸れた一人を、時間を割いてまでわざわざ捜すほどの仲間意識はない。

一行は、再び麓の邑を目指して歩きはじめた。先ほどまでと違って、軽口の応酬はない。

曹も集団から逸れてはいけないと、視界が不自由な中でも仲間たちの姿を見失わないように神経を尖らせた。

異変が起こったのは、その直後のことだった。

「ぎゃぁあああっ！」

耳に突き刺さるような絶叫が響く。「おい、どうした！」、「なんだ？」と、仲間たちの混乱した声も続くが、なにが起こっているのか確認するすべはない。

せめて灯りを点すことができればいいのだが、追っ手を警戒している今、遠目から位置を知られてしまうものを使用することは憚られた。

「ひぃ、た、助け、ぎゃあああああっ！」

また、悲鳴があがる。

追っ手ではない、別のなにかに襲われているのだと曹は確信した。そして、脳裏をよぎったのは〝妖〟の文字。

人足として働いている間も、時折、気まぐれに思い出しては背筋を震わせた覚えがある。山の奥に棲むという、異形の存在。実際に目にしたことはなかったが、その恐ろしさは子供の頃から嫌というほど耳にしていた。

妖も姿形は千差万別で、人を襲うものも襲わないものもいるというが、曹の中では一緒くたにされ、〝酷く恐ろしいもの〟として認識されていた。

「逃げろ！　早く森に向かって走れ！」

切羽詰まった応の声が響いた。

弾かれるように、曹は走り出す。もしも、相手が妖だとすれば、こちらよりも遥かに夜目が利くはずだ。障害物の少ない道ではあっという間に追いつかれてしまう。だから、応も危険を承知で「森に」と叫んだのだろう。

曹は必死に走った。

道などない斜面を転がるようにして駆け下り、木々の根に幾度となく足を取られながら、少しでも遠くへと逃げる。

背後から、悲鳴とも怒声ともつかぬ叫び声が響き、恐怖がいっそう膨れ上がる。気を抜くと、わけもわからぬ言葉を喚き散らしてしまいそうだ。

曹の心を占めるのは、強い後悔の念だった。

応の誘いに頷かなければ、こんなことにはならなかった。人足の仕事はきついが、少なくとも役人たちに逆らわない限り、命を失うようなことはなかった。

いや、それをいうならば、雇われ先の妓女に手を出したことがそもそもの間違いだった。下っ端の女ならば平気だろうと、簡単に考えた自分が馬鹿だった。どんな妓女でも〝商品〟には変わりはないのだ。金も払わずに商品に手を出され、不愉快にならない店主はいない。

それ以前に、生まれがもっとまともであったら。裕福でなくとも、地方の邑でも、真っ当に働けば暮らしていけるようなところに生まれていたら、こんな目には――。

曹の脳裏に、走馬灯のように様々な出来事がよぎっていく。気付けば双眸から涙が溢れ、汗と共に頬を伝っていた。

死にたくない、死にたくない。

曹は迫りくる恐怖に脅えながら、必死に両足を動かした。しかし、とうとう木の根に足を取られ、勢いよく前につんのめってしまった。

「うわぁあああっ！」

ぐきり、と右足が嫌な音を立てる。同時に激痛が稲妻のように脳天まで走った。湿り気を帯びた土に顔面を突っ込み、曹は一瞬ではあったが恐怖を凌駕するほどの痛みに苦悶する。

「ううう、ぐうっ」

それでも、曹は前へ進もうとした。少しでも遠くへ逃げるために。

死にたくなかった。

終わりたくなかった。

ここで死んでしまったら、自分はなんのために生まれ、なんのために今まで生きてきたのかわからなくなってしまう。そんな無意味な死は嫌だ。

だが、前に手を伸ばし掛けた状態で、曹は体を硬直させた。背後から人のものではない、荒い息遣いが聞こえる。

確実になにかがそこにいる気配。

きしきし、と関節が軋むような音に、曹は呼吸を忘れるほどの恐ろしさを味わった。

――振り返ったら終わりだ。

その思いとは裏腹に、曹は見えない糸に操られるかのように、ゆっくりと顔を背後に向けた。

闇の中に光る紅。

ひぃ、と曹の口から引き攣ったような悲鳴が漏れた。全身が恐怖に震える。それでも逃げなければという思いから、曹は痛む足を鞭打って立ち上がろうとした。しかし、四肢はぴくりともしない。

足や腕に力を込めているにもかかわらず、曹の意思に反して指先一つ動かすことが叶わなかった。強い力で全身を押さえ込まれているような感覚で、息すらままならない。

「あっ、あっ……」

悲鳴にすらならない引き攣り声がのどから漏れる。

全身に絡みつくなにかを感じたと同時に、曹の意識は深い闇に沈んだのだった。



華国の都、華安。

宮中に程近い、代々、名のある官吏を輩出してきた名家ばかりが並ぶ一画。その中に鄭家の屋敷はあった。

「……今日もまた芋粥か」

椀に盛られた芋粥を一瞥し、李春蘭は誰にともなく呟いた。

記憶が正しければ、ここ数日の主食は芋粥だけ。稀に中庭の畑で取れた青菜がつく。畑で栽培している野菜は自宅用ではなく、近所の屋敷に売っているのだという。家僕たちの涙ぐましい努力の一端が垣間見える。

「文句言うなら食うな！」

春蘭の独り言に反応したのは、鄭家で家僕として働いている孫啓璋だった。

歳は十三。気の強そうな眉が印象的な少年である。質素な短服を着た啓璋は、竈の火の始末をしながら春蘭に反発した。

「文句ではない。事実を言ったまでだ」

実際、出されたものが、極端に薄められた粥だけだったとしても春蘭に不満はない。食べられるだけありがたいと思うからだ。

「私は平気だが、ぬしらはもう少しちゃんとしたものを食べねば大きくなれないぞ」

年齢の割に小柄な啓璋は、身長がなかなか伸びないことを気にしている。

春蘭の鋭い指摘に、ぎくっと背を強張らせた啓璋は引き攣った顔で、「こ、これからだ。これから伸びるんだ……！」と自分に言い聞かせるように呟き

始めた。

それを横目で眺め、春蘭は椀に口をつける。慣れ親しんでしまった芋粥を味わいながら咀嚼していると、外で薪割りをしていた高友寧が汗を拭きつつ厨房に戻ってきた。

友寧もまた、啓璋と同じ鄭家の家僕である。気性の激しい啓璋とは違い、こちらはのんびりとした性格で声を荒らげることは滅多にない。表情も常ににこにことして穏やかだ。

年齢、背格好共に同じ二人は、兄弟のように仲がよかった。

「あ、春蘭。おはよう」

「うむ。朝から薪割りとは精が出るな」

「この間、割ったのがなくなったからね。ところで、どうして啓璋は落ち込んでるの？」

火の消えた竈の前にしゃがみ込み、暗い雰囲気を漂わせている啓璋に、友寧は不思議そうに首を傾げた。

「こればかりはのう。神頼みも効かぬことゆえ、私にはどうしようも……」

「そこまで切羽詰まってねぇよ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る啓璋に、友寧は「ああ、身長のことで春蘭にからかわれたんだね」と、納得するように頷く。

啓璋と違い、友寧はさほど自身の背丈に危機感を覚えていないらしい。

「春蘭は、今日もまた出掛けるの？」

「そのつもりだ」

春蘭が頷くと、友寧は甕の水で手を洗いながら、困ったように苦笑した。

「お金のことなら、気にしなくてもいいのに。春蘭の分くらい平気だよ？」

「そういうわけにはいかぬ」

春蘭は人の形をとっているが、中身は三百年という長きにわたり、とある地方の邑を守護してきた守り神だ。

だが、人間の男に〝真名〟を奪われ、守り神としての力を失ってしまった。

そのまま隷属させられるところを、人であった時の姿へと戻ることで免れた。そして真名を奪った男、鄭玄楽を捜すために華安へとやってきたのである。

守り神となる前、占師としての訓練を受けていた春蘭は、占いの結果により鄭家へ向かった。しかし、ようやく辿り着いた先で告げられたのは、憎き相手が四年前に戦死したという事実であった。

だが、玄楽が数日前に春蘭の真名を奪ったのも事実。占いの結果が変わらないこともあり、ならばと、春蘭はしばらくの間、鄭家へ居候を決め込むことにしたのである。

そこで問題になったのが春蘭の食い扶持だった。むろん、春蘭自身も無償で世話になる気はない。生活に必要な分の金銭は払うつもりだったが、幼い外見が仇となり、未だに金銭を稼ぐには至っていなかった。

しかし、数日を鄭家ですごすうちに、はじめは排他的であった少年たちの態度が、春蘭に害はないと感じたのか徐々に軟化した。今では春蘭が外出する度に「お金のことなら気にしなくてもいい」と言ってくるほどである。

彼らの申し出はありがたいが、素直に好意に甘えるのは春蘭の矜持が許さなかった。なによりも、鄭家の台所事情はお世辞にもよいとは言い難く、二人の少年がせっせと働いてようやく暮らしていける状態である。

そもそも、主人がしっかり働けば問題はないのだが……と、春蘭は鄭家の主を思い出し、小さく溜息をついた。

「それに、先日、雇ってもらえそうなところを見つけたのだ」

「え、本当に？」

友寧が驚くのもむりはない。春蘭の体は十二歳の時のものだ。

年齢よりも小柄だったせいで、外見だけならば十歳ほどにしか見えない。そんな子供を雇ってくれる場所があるとは信じられないのだろう。

「本当だ。というわけで、今日はいつもより帰りが遅くなるかもしれぬ」

「夕の刻までに帰ってきてくれればいいけど……危ないところじゃないよね？」

「ああ。楊秀の知り合いが経営している店だ。問題はなかろう」

主人の友人であり、少年たちの剣の師でもある者の名を出せば、友寧は安心して頬を緩めた。

「なら、大丈夫そうだね」

「うむ」

頷いて、春蘭は手に持っていた椀と箸を置いた。

「ところで仲望の姿が見えぬが、まだ寝ているのか？」

朝と言うにはいささか遅い刻限である。いつもならば、中庭に面した回廊か、日当たりのよい房でごろごろしているはずの家主の姿が見当たらないことに春蘭は気付いた。

官吏として登用はされているが、彼が真面目に出仕したのは、春蘭が鄭家に来てからたった一度だけだ。それも上司から呼び出されたから、という理由だった。自発的に出仕するとは思えない。

「旦那様なら、出掛けたぞ」

どこか面白くなさそうな口調で告げた啓璋に、春蘭は小首を傾げた。まさか、本当に仕事をしに行ったのだろうか。だとすれば、今日は雨か——槍でも降るかもしれない。

「仕事か？」

「龍乎の詰所に行かれたんだ」

「……仲望がなにかしでかしたのか？」

「違う！」

顔を真っ赤にして怒鳴る啓璋に、思わず春蘭は手で耳を塞いだ。そんなに大声を出していたら疲れるだろうに、と内心で嘆息する。

「旦那様に、頼み事があるみたいだったよ」
代わりに答えた友寧の言葉に、春蘭は「そうか」と頷いた。居候先の主人が捕らえられたとなれば春蘭も困ることになるが、どうやら心配は杞憂だったようだ。
「仲望に頼み事か……のう、それは本当に頼み事なのか？」
ただの怠け者にしか見えない仲望に、わざわざ頼みに来るとは何事だろうか。単純な労働ならばそこいらの通行人の方がよほど使えるだろう。
「でも、そう言ってたし。ねぇ？」
「ああ。っていうか、お前、旦那様を馬鹿にしてないか？」
不機嫌全開の啓璋に、春蘭は「そこまで恩知らずではないぞ」と、微笑みながら告げた。鄭家に居候できたのも、仲望が許可してくれたからだ。いささかぐうたらな性格ではあるが、人として嫌いなわけではない。
「仲望がいたら声をかけていこうかと思ったのだが、いないのならばしかたないな」
席を立ち、春蘭は服の皺を伸ばした。今日の出で立ちは、裾の短い薄紫色の上衣に、桃色の腰布。下には上衣と同じ色の下衣を穿いていた。
とある縁から知り合いになった姉妹たちより贈られた襦裙の中で、もっとも落ち着いた色合いのものだ。他の服は町娘が着るにはあまりに煌びやかで、大路を歩くには目立ちすぎる。
朱色の腰紐を結び直し、その先に結ばれた金色の玉をひと撫でした。
「では、行ってくる」
まだ不機嫌そうな啓璋と、少し心配顔の友寧に見送られ、春蘭は鄭家をあとにしたのだった。

朝方、小雨が地表を撫でていったせいか、すっきりとした空気が辺りに漂っていた。

華安一広い龍神大路に出た春蘭は、運よく目的地へと向かう荷馬車を見つけることができた。御者に頼めば、荷台でよければ乗せてくれると言う。徒歩で目的地に向かうよりは、多少の揺れがあっても荷馬車の方が遥かに楽だ。

その途中のことである。

道幅は狭いが、それでも俥がすれ違えるほどの道で、春蘭は奇妙な一行に目を止めた。

人数は二十人ほどだろうか。大半は、薄汚れた短服を着用した男たちで、両腕には木製の頑丈な手枷がつけられている。髪は短く刈り上げられ、全員がどことなく荒んだ目付きで辺りを睨んでいた。

その周囲を固めるのは、武具をつけた役人風の男たちだ。こちらは三人ほどしかいないが、手には槍を、腰には剣を佩いている。そして、少し離れたところには、立派な栗毛の馬に跨っている者たちが二人、厳しい眼差しを周囲に向けていた。

二列に並んだ男たちの手枷には縄が通され、前方を行く者の腰に結びつけられている。数珠繋ぎに歩いている姿は異様で、遠目にも目立っていた。

「ふむ……」

おかしな集団だった。荷台からじっと眺めていると、一緒に荷馬車に乗り込んでいた下働きの老人が御者へ話しかける声が聞こえた。

「また、罪人たちが連れてかれるみてぇだ」

「最近よく見るよな。何回目だ？」

「片手では足りんだろうよ」

なるほど、あれは罪人たちの集団か。納得した春蘭は、再び独自の雰囲気を漂わせている一団へと視線を向ける。

周囲を観察すれば、通りにいる者たちも足や手を止めて、不快感も露に一行をじろじろと眺め回していた。

「なんでも、皇帝様が新しい宮殿を建てるために資材が必要らしいぞ」

「宮殿？　俺は後宮の望楼だと聞いたぞ」

「どっちでも金がかかんのは変わんねぇさ。あいつらも気の毒になぁ。山に連れてかれて、死ぬまで扱き使われるんだ」

「爺さん、罪人に同情してどうすんだよ」

御者の呆れたような声が響く。しかし、応じる老人の声にはやるせなさが滲んでいた。

「もうだいぶ経つが、山に送られた罪人が戻って来たって話は聞かねぇ。それなのに、補充とばかりに罪人が追加されてるじゃねぇか。きっと、働かされすぎて死ぬか、妖に食われるかしたんだろうよ。罪人だろうがなんだろうが、そんな死に方は気の毒だなぁ……」

「俺は罪を犯した奴の自業自得だと思うがねぇ」

「それはお前さん、このご時世だ。生きるためにしかたなく、って奴も大勢いるだろうよ」

「確かになぁ」

徐々に罪人たちの集団が遠ざかっていく。その姿が見えなくなる頃には、御者と老人の話題も別なものへと変わっていた。

荷馬車はゆっくりとした速度で道を進む。馬を走らせるよりは遅いが、それでも春蘭は思ったよりも早く目的の場所へと辿り着いた。

「……ふぅ。かなり揺れたな」

ふらふらとした足取りで、春蘭は荷台から降り立つ。御者に礼を述べれば、「気をつけて行けよ」と労わられた。荷台に乗っていた老人も、穏やかな表情で手を振ってくれる。

それに春蘭は目礼を返し、目的の地へと足を踏み入れた。

華安において唯一、夜間の外出が許可されている場所――それが、名立たる妓楼が軒を連ねる花街である。

まだ日の高い時間、人の通りも少なく閑散としている。ここが一気に華やぐのは、夕の刻限をすぎてからだ。

花街の大門から真っ直ぐ伸びる華観大路。その両

脇には、立派な楼閣が立ち並んでいる。それでも、大門付近にある妓楼は歴史も浅く、敷居も低いのだという。

春蘭は大路の奥に進む。そこに店を構えられるのは、花街でも、歴史、品格ともに上位であると認められた妓楼なのだそうだ。

さらに、その中でも、一、二を争うと言われているのが、黄海楼である。

先日、華安を騒がせた妖、攫猿が命を断たれた場所でもあった。数日振りに訪れるそこは、先日の騒動などなかったかのように静かだった。

風格のある門構えに、楼閣の屋根は鮮やかな朱塗りの瓦で覆われ、その角には、伝説上の獣を模った走獣が一体ずつ並べられている。細かな彫刻が施された格子窓や、金で塗られた柱など、すみずみにまで贅が尽くされていた。

夜になれば大きな赤い行灯が表門に掲げられ、煌びやかな衣裳に身を包んだ妓女たちの艶姿が花を添える。昼間である今は、幾分、迫力が削げ落ちているように見えた。

「さて、雇ってもらえるとよいのだが……」

ぽつりと呟いた春蘭は、大の大人でも一度は躊躇いそうなほど豪奢な表門をくぐった。細かな砂利が敷かれた小路の向こうには、表門よりは一回り小さな門がある。複数の門は、外界との離別を表しているのだそうだ。

確かに、ここは妓楼という、浮世から離れた世界。すべてを忘れ、享楽に耽ることのできる場所だ。まあ、そこにはけっして少なくない金銭が絡んでくるのだが。

春蘭が第二の門をくぐろうとした時、野太い声がそれを遮った。

「餓鬼がなんの用だ」

顔をあげれば、筋骨隆々とした強面の男が春蘭を睨むように立っていた。年齢は三十を過ぎた辺りだろうか。動きやすそうな短服を着て、手には長い朱

塗りの棒を持っている。
「楼主に会いに来た。通してもらえぬか？」
「なんだ、ここで働くつもりか？」
「うむ」
眉を寄せ、じっとこちらを見詰める男を疑問に思いながら春蘭は頷いた。すると、大きな手が春蘭の頭を慰めるように撫でる。
「こんなにちっせぇのに……親はどうした？　仲介屋はいんのか？」
「ちゅうかいや？　いや、私は先日、ここで少々世話になったのだが」
「なんだ、面通しは済んでんのか。でもなぁ、普通は親か仲介屋が付き添ってくんだろ。一人だなんて、お前……」
男は急に目頭を押さえた。よくわからないが、なにかを堪えているようだ。
「通ってもよいのか？」
「あ、ああ。中に入れば誰かしらいるだろ。適当に捕まえて、連れてってもらいな。間違っても一人で上に行くんじゃねぇぞ」
「わかった」
「……がんばれよ。耐えてりゃ、いつか自由になれっからよ」
なぜか涙目の男に首を傾げながらも、春蘭は奥へと足を進める。男の言った通り、春蘭はすぐに店の者を捕まえることができた。
四十過ぎの小柄な男は、はじめは訝しげな視線を向けてきたが、攫猿の件で世話になった者だと告げれば、思い出したように手を叩いた。
「楼主に会わせてもらいたい」という申し出も、嫌な顔一つなく了承される。おそらく、春蘭の背後に韓楊秀――禁軍、右飛龍将軍の影を見ているのだろう。案内さえしてもらえればなんの異論もない春蘭は、黙って男のあとをついて行った。
黄海楼を空から見れば、横長の形をしている。その中央には、攫猿を退治した広々とした中庭があり、

各階の欄干から美しい眺めを堪能することができた。春蘭が通されたのは、中庭に面した北側の最上階にある房であった。

日当たりのよい室内には龍が描かれた衝立が置かれ、磨き上げられた板間には、七絃琴を弾く十二、三の少女がいた。涼やかな琴の音が、室内に流れている。

それを、渦巻きの形に編んだ円座と呼ばれる敷物に座った妙齢の女が、瞼を閉じうっとりとした様子で聞き入っていた。

女性の、艶やかな黒髪は複雑な形に結い上げられ、煌びやかな髪飾りで装飾されている。一種の芸術品のような出来栄えだ。紫色を基調とした派手な襦裙は、肩から胸元まで大きく開け、絹のように滑らかな肌が覗いていた。

中庭に面する欄干にもたれ、片手に持つ煙管を優雅な所作で吹かしている。

春蘭をここまで案内した男は、房の手前で立ち止まった。演奏が終わるのを待つのだろう。春蘭は室内に視線を向けながら、しばし琴の音に聞き入った。

「――もう、いいよ」

低く甘やかな声があがり、琴の音が止んだ。

琴から顔をあげた少女は、不安そうな視線を女に向ける。

「上達したじゃないか。これなら、お客様の前で弾いても恥ずかしくはないね」

「ほ、本当ですか？」

「もちろんだよ。ただ、緊張しすぎはだめだよ。音に硬さが出る。それができるようになったら、晴れてお披露目だね」

はい、と少女は嬉しそうに頷いた。自分の背とそう変わらない七絃琴を抱えた少女は、男と春蘭に気付くとわずかに目を瞠り、慌てたように房を出て行った。

「それで、韓の旦那のとこのお嬢ちゃんは、うちにいったいなんの用なんだい？」

煙管を脇に置き、春蘭へと視線を向けた女性は艶やかに微笑んだ。彼女の名は淘蟬英。黄海楼の女楼主である。

「頼みがある」

蟬英の前に座った春蘭は、早々に話を切り出した。春蘭をここまで案内してくれた男の姿はない。気を回して退出したのだろう。よく教育が行き届いているようだ。

「ここで私を雇ってくれぬか」

蟬英の値踏みするような視線が、春蘭の全身に注がれた。それはすぐに呆れたような表情に取って代わる。

「からかうのも大概におしよ。よりによって韓の旦那の知り合いを、うちで雇えるもんかい。第一、あんたは裕福なとこの娘なんだろう？　家出でもしたいのかい？」

「私は裕福な家の娘ではないぞ。今は鄭家に居候中の身だ」

「鄭……ああ、もう一人いた兄さんの方か。それでも、確か官吏様だっていうじゃないか。どうしてもというなら、保護者を連れておいで」

説得しても埒が明かないと思ったのだろう。蟬英は不機嫌そうな顔付きで、春蘭を睨みつけた。

「それにね、お嬢ちゃん。なにを勘違いしているかわかんないけど、うちは黙って笑ってりゃ金が貰えるところじゃあないんだよ。ここにいる子たちはみんな、借金の形に売られてきたのさ。年季が明けるまで、ここから出ることすら叶わない。華やかなだけの地獄だよ」

妓楼がどのような場所なのか。それくらい、春蘭もわかっている。

春蘭が守護する邑でも、貧しさから娘を売る親がいた。手放したくて売るわけではない。むしろ、飢えに苦しむよりはと、あえて娘を仲介人に渡す親もいた。

二度と会うことは叶わなくとも、せめて娘が幸せ

でありますように、と彼らは春蘭に祈りを捧げにきた。

「ふむ。わかっているつもりではいるが……そもそも私は妓女として雇ってもらいたいわけではない。私はここで占師として雇ってほしいのだ」

占いの師である母親は、結婚するまで妓楼で占師として働いていたという。

その際、客寄せのために、妓楼が占師を雇うことは珍しくはないと聞いた。妓女を待つ間の暇潰しに、または贔屓の妓女に乞われて、客は占師に占いを求める。

端から当たるとは思ってもいない、金持ちにのみ許された一種の遊びのようなそれ。春蘭の母親は、その中でもよく当たると評判の占師だったらしい。

その話を聞いてから長い年月がすぎているため、もしかしたら、妓楼で占師を雇うことはなくなってしまったのかもしれない。そもそも、春蘭が得意とする占術は廃れて等しいと知った。

だが、万が一、という可能性もある。

正攻法では春蘭を雇ってくれるような店がないということは、この数日で思い知らされた。食い扶持を稼ぐためにも、ここで引き下がるわけにはいかなかった。

「……占師だって？」

困惑するような蟬英の声に、春蘭は小さく頷いた。

「最近の妓楼は、占師を雇わぬのか？」

「そりゃまぁ、店によっちゃ雇うとこもあるけどねぇ」

「ここは雇っていないようだな」

「置いとく利点がないからね」

今、主流となっている占筮は、自然災害など国の存亡にかかわる出来事を占うものであり、個人の先行きを気軽に楽しめるものではない。それよりは、先ほどの少女のように、琴や笛を練習した方が確実に客引きになるだろう。

「利点があれば雇ってもらえるのか？」

「商売だからねぇ。売り上げがあがるっていうんなら、考えないこともないよ」

だが、そう告げる蟬英の顔には、しかたなく子供の戯言に付き合ってやっているという表情が張りついていた。むっとするが、それもむりのないことだと嘆息する。

春蘭の外見は、どう見ても十が精々。そんな子供に、知識と経験が物を言う占師として雇ってほしいと言われて本気にする者などいないだろう。

「返事は私の腕を見てからでよい」

利益を重視する相手ならば話は早い。春蘭が雇用に値する存在だとわからせればいいのだ。

用意するのは水を張った平たい盆。

春蘭は、そこに持参した水神盤を浮かべた。

「さて、なにを占おうか？」

「なんでもいいのかい？」

占筮ではない占術道具を物珍しそうに眺める相手に、春蘭はなんの気負いもなく頷いた。

「じゃあ……失くし物を探してもらおうか」

「失せ物探しは得意だ」

水神盤の扱いに慣れた頃に習うのが、失せ物探しである。母がわざと隠した物を、水神盤片手によく探したものだ。

見つからない限り夕飯にはありつけないため、必死で邑中を駆け回った記憶がある。

「愛用している簪が、ここ二日ほど見つからないんだよ。手持ちの中でも形の古い物だけど、妙に愛着があってね」

「ふむ。それは、どんな形で、なにでできているのだ？」

「黒塗りの簪で、端に牡丹を模した小さな飾りがついてるよ。確か、黒塗りの部分は木で、牡丹は珊瑚だったかねぇ」

「わかった」

水神盤の上に片手を翳せば、水に浮かんでいたそれが春蘭の〝気〟を受けて、くるくると旋回し始め

た。

水神盤の表面には、中心に埋め込まれた玉を囲むようにして細かな溝が彫られている。そこを水が浸食し、現れた文様と、八つの角がそれぞれ指し示す方角によって吉凶を占うことができるのだ。

失せ物探しは、吉凶を読み取る必要がないため、それだけを生業にしていた占師も少なくはなかった。

しかし、浮かび上がった文様の解釈は難しく、それ故に後継者が育たぬまま廃れてしまったのだと聞く。

「……もう黄海楼にはないな。方角は、ここより北。さほど遠くはないな。すでに誰かの持ち物となっているようだ。残念だが、何者かに持ち出されて、質屋にでも売られてしまったのではないか？」

楼主の私物を盗むなど、大胆不敵な行為ではあるが、生活が苦しかったり、周囲に誰もいなかったりしたら、つい出来心で手を出してしまうかもしれない。

「この辺りに詳しい者をつけてもらえれば、簪の在り処まで案内するが？」

あとは今の持ち主から、簪を購入した店を聞き、その店に売りにきた相手の人相を聞けばいい。そうやって辿っていけば、手間はかかるだろうがいずれ簪を盗んだ者に突き当たるだろう。

「その必要はないよ」

「なぜ？　愛着があったのだろう？」

「それは、身請けされた娘に、あたしが餞別としてくれてやったものだからさ」

あっけらかんとした態度で告げる相手に、春蘭は自分が試されたのだということに気付いた。

「当たったか？」

「当てずっぽうにしては、まあまあ正確だね」

「まだ信じぬか」

「たまたまということもある。ふむ……ちょっと待ってな」

呼ばれたのは、先ほど琴を弾いていた少女と、春

蘭をここまで案内してくれた男である。なぜ、ここに呼ばれたのかわからぬ二人は、困惑を隠せない様子だ。

「この二人は、趙奉義、魏祥琳という。さて、二人の未来を占ってもらおうか」

趙奉義は、四十代前半の小柄な男である。糸のように細い目で忙しなく周囲を見回し、どこか落ち着かない印象だった。この男は古株の一人で、黄海楼の経理に携わっているそうだ。

一方、魏祥琳は十二、三の、まだあどけなさがたっぷりと残る少女である。服装は春蘭と似たような襦裙で、妓女というよりはその見習いなのだろう。やや垂れ気味の目元が、愛嬌のある顔立ちに見せていた。

「未来というのは、いささか漠然としすぎやしないか？」

むろん、未来を占うことは可能である。しかし、失せ物探しと違って、春蘭の占いが正しいという証拠を示すものがない。たとえそれが数日後を占えということだったとしても、すぐに結果が出るものでもなかった。

「いいんだよ。さぁ、占っておくれ」

なにか企むような笑みを浮かべる蟬英に首を傾げつつ、春蘭は水神盤に手を翳した。

占うのは、趙奉義という男の未来。

未だ主旨が摑めないのか、奉義は訝しげな表情を顔に張りつかせている。

じわり、と盆に張られた水が水神盤の溝を浸食する。八つの角がそれぞれの方角を指し、奉義の未来を春蘭に告げる。

「――ふむ」

春蘭は結果を視て、小さく息を吐いた。

これは、わかった上でここにこの男を呼んだのだとすれば、黄海楼の楼主は思った以上に意地の悪い人物だ。

「ぬしの未来……それも、近しい未来に罪人として

黄海楼を追い出されることになる」

面と向かって告げられた言葉に、奉義は唖然としていた。だが、見る見るその顔から血の気が失せていく。

「じょ、冗談にもほどがございます……」

春蘭を楊秀の家の者と思っているのか、奉義の態度は丁寧なものである。しかし、春蘭を見詰める眼差しには、不気味なものを前にしたような〝畏れ〟があった。

「冗談ではない。この八つの角にはそれぞれに意味があり、指し示す方角により象徴するものが異なる。ぬしの場合は、金銭の問題を抱えているという結果が出た。それが原因で、ここを追われることになるだろう」

ごくり、と生唾を呑み込んだ奉義は、引き攣った笑みを浮かべながらも、主人である蟬英に顔を向けた。

「蟬英様、これはどういった類の戯言ですか？　私にはまだ仕事が残っておりますゆえ、そろそろ持ち場に戻りたいのですが……」

「その必要はない」

妖艶な笑みを浮かべた蟬英だったが、その瞳は少しも笑っていなかった。

「あたしが気付いていないとでも思ったかい？　まさか、先代から仕えていたお前が使い込みをするだなんてねぇ……信じたくはなかったけど、どうやら本当だったらしいね」

「そ、そんな！　私は、使い込みなど！」

「調べればわかることだよ。隠し切れるもんじゃないからねぇ」

奉義の顔色は、もはや蒼白というよりはどす黒さを帯びていた。額には脂汗が滲み、視線は忙しなく周囲を彷徨っている。

「お前たち。奉義を部屋に押し込んで、逃げないようにしっかり見張っときな！」

蟬英の呼び声に、予め廊下に控えていた男たち

が房に入り、有無を言わさず奉義を引き摺っていく。奉義はそれでも、必死に何事か喚き続けていた。

喧騒が去ったあと、蟬英は煙管を煙草盆の縁で叩き灰を落とすと、再び火皿に刻み煙草を入れ火を点けた。ゆっくりとそれを喫しながら、気だるげに口を開いた。

「また当たっちまったねぇ」

「あの男が使い込みをしていたことに気付いておったのだろう？　それをわざわざ私に視させるとは、いささか意地が悪いのではないか？」

「有能な占師かどうか、真偽のほどを見極めるために使わせてもらっただけさ」

せめて、最後くらい役に立ってもらわないとねぇ、と蟬英は、極悪人も裸足で逃げ出しそうなほどあくどい笑みを浮かべる。

「これで私の腕はわかってもらえたと思うが……この娘も占うのか？」

春蘭は、あまりのことに未だ混乱の極致にある少女に視線を向けた。大口を開けて惚けている様は間抜けだが、それはそれで可愛らしい。春蘭に見られていることに気付いたのか、祥琳は慌てて口を閉じ居住まいを正した。

「そっちは、なんの思惑もないよ。一人だけ呼んだら、あいつもなにか勘付くと思ってね。ついでだ、占ってくれるかい？」

「かまわぬ」

水神盤を浮かべ直した春蘭は、緊張に体を強張らせている祥琳を見詰めた。

「……私は占師として、どのような結果が出ようとも、それをぬしに告げなければならない。それでもよいか？」

「は、はい」

視た未来がけっして幸福なものではなかったとしても、それを聞いたことにより、定められた運命が変わることもある。占師は未来を視るだけでなく、降りかかる災難から身を守る術を助言することも可

能だ。しかし、中にはどう足掻いても変えられぬ未来がある。

——守り神となる前の、自分がそうであったように。

「私は、自分が妓女としてやっていけるかどうか知りたいです」

膝の上で握られた手は、力を込めているせいか真っ白になっている。しかし、真横に引き結ばれた唇からは意志の強さが垣間見えた。

「そうか」

にっこりと微笑み、春蘭は盤上に手を掲げた。

小刻みに回転をはじめるそれに、春蘭はじっと視線をそそぐ。浮かんだ文様と、八つの角が指し示す方角に春蘭は眉を寄せた。

「……ぬしの未来はそう悪いものではない。ただ、一つ越えねばならぬ問題がある」

複雑な文様、そのとある一点でぴたりと浸食が止められている。そして、そこに一番近しい角が指し示す方角は——。

「〝疫〟だ」

祥琳だけではない。話を聞いていた蟬英もまた、同じように息を呑んだ。

「命を落とすかどうかは定かではない。そこから未来が続く可能性も出ている。おそらくは、五分五分か」

玉の部分を押せば、水神盤は一度水面に沈んだあと、再び浮き上がってきた。現れた文様は、先ほどのものと寸分も違わない。

「疫は避けられぬようだな……奇妙な病が流行るようになったら気をつけるとよい。あとは腕のよい医師を捜しておくことだ」

「ちょいといいかい？」

蟬英の声に春蘭は顔をあげた。使い込みを行った部下に向けられた顔よりも、さらに厳しい視線が春蘭にそそがれる。

「世の中にはね、言っていいことと悪いことがある

んだ。たとえ冗談でも、そういうことは口にするんじゃないよ」

「冗談ではない」

なによりも信を置いている己の腕に難癖をつけられた気がして、春蘭は眉間に皺を寄せながら反論した。

「事実だ」

疫とは、ただの病ではない。死者が出るほどの、伝染病のことを示す言葉だ。

春蘭自身、母親から疫について学んでいたが、実際に占いの結果として水神盤に現れたのは初めてのことである。

それでも、見間違えることはない。

〝災厄〟――それを表す文様は、あまりにも禍々しい。

「世間知らずとは思っていたけど、知らないんじゃなくて常識の範疇からずれてるみたいだね。国運を左右するほどの災厄を占うのは、宮廷お抱えの占師たちだ。一般の占師には禁じられてるよ」

「なぜだ？」

「混乱を招くからさ。〝疫が流行る〟と、卦に出た場合、国は対策を練ったうえで発表するのさ。その方が、ただ疫が流行るぞと吹聴するよりも、よっぽど混乱は少ないだろう？」

確かに、と春蘭は頷いた。

三百年前は、疫の流行にかんする対応は邑ごとに行われていた。だからこそ、邑には最低でも一人の占師が置かれ、その占には絶大な信頼が寄せられていたのだ。

「ならば、朝廷はすでに対策を練っているのだろうか？」

「対策ねぇ……。あの残虐非道な皇帝様のことだ、疫が出たらその付近一帯を住民ごと焼き払うだけで済ませそうだよ」

嘲るような声に、祥琳の小さな体が大きく揺れた。過激な内容に脅えたのだろう。それを横目で眺めな

がら、春蘭はずっと疑問に思っていたことを口にした。

「ところで、華安に守り神はいないのか？」

「守り神……？　確か、建国と同時に龍天山に祀られたと聞いたけど。それと疫になんの関係があるんだい？」

「守り神が健在ならば、そもそも疫など流行りはしない」

神気により守られる場所に、疫が蔓延することはない。たとえ広まったとしても、拡大せずすぐに収まるはずだ。

疫が流行るのは、守り神の力が薄れた証拠。守り神に限界が訪れているのか、それとも守り神の力をもってしても抑えることができないほど国が荒廃しているのか。

国の荒廃は、大地を流れる地脈の乱れに繋がる。そうなってしまえば、どれほど神気の強い守り神だろうと、本来の力を発揮することは難しい。疫は瞬く間に華安を――そして、国を呑み込むだろう。

「なんだい。あんたも子供だねぇ、って子供なのか。神様なんてものに縋ったところで、どうしようもないさ」

「……ぬしは、神を信じぬのか？」

守り神である自身を貶されたような気がして、春蘭は眉を寄せながら蟬英を睨んだ。

「さあてね。妖なんてものがいるんだから、神様がいても驚きはしないよ。実際、花街にも神様を祀る社があるし、年に二度、供物を捧げる風習もある。でもねぇ、そんな不確かなもんに縋って生きてたら、あたしらのような人間は生きていけないのさ」

蟬英の言葉に、春蘭は視線を床に落とした。

神はいる。

ただ、すべての物事において万能ではないというだけなのだ。災厄を防ぐことはできても、一人の少女を貧困から救うことはできないように。

「とりあえず、物騒な言葉は口にしないでおくれ

よ」

　蟬英の態度は、春蘭の占を軽視しているようであった。二度の占を当てているにもかかわらず、規模が違うというだけでまともに取り合ってもらえない。なぜだ、と春蘭は心の中で呟いた。

「祥琳。ご苦労だったね。もう下がっていいよ」

　急に名を呼ばれた少女は、びくっと肩を揺らした。その瞳が不安げに揺れていることに気付いたのか、蟬英は屈託のない笑みを浮かべた。

「心配しなくても、病気になったとしても追い出したりしないよ。うちは他所と違って、お抱えの妓女は大切にするんだ。それと、ここでのことは口外しないでおくれよ。誰も信じないとは思うが、嫌な噂が立つかもしれないからねぇ」

「は、はい。わかりました」

　頬を朱に染めた祥琳は深く叩頭したあと――多少のぎこちなさはあるが――優雅な所作で房をあとにした。

　改めて春蘭に向き直った蟬英は、朱に塗られた唇で弧を描いてみせた。

「不満げな顔だねぇ」

「当たり前だ。占の腕を馬鹿にされて、不満を抱かぬ占師はおらぬ」

「馬鹿になんてしてないさ。あんたの腕はなかなかなものだと思うよ。疫のことを抜かせば、二回とも当ててきたからね」

「では、なぜ信じぬ」

「まともに言葉を交わしたのは今日がはじめてだ。そんな相手のなにを信じろというんだい？　確かに、二回とも占いは当たったよ。だからといって、次も当たるという保証はどこにもないじゃないか。悪いが、あたしはこう見えて慎重派なんだよ」

　だが、春蘭にはなぜ蟬英がそこまで占の結果を認めないのかわからない。

　占師が占を外すことがあってはならない。一度でも違えてしまえば、もはや占師を名乗ることはでき

ないのだ——春蘭は、師である母親からそう教えられた。

占は邑を守る術である。その両肩に何千何百という人々の命がかかっているのだ。だからこそ、占師は邑人たちから絶大な信頼を得ていた。誰もが占を信じ、その結果に従って行動したものだ。

だからこそ、蟬英の態度は春蘭にとって納得のいかないものであった。

「私は占を外すことはせぬ。一度でも外せば、占師とは名乗れぬのだ」

「おかしなことを言う子だね。だったら、宮廷のお抱えの占師様方は、占師を名乗れないじゃないか」

「その者たちは占を外すのか？」

「当たる時もあれば外れる時もある。占とはそういうもんだよ」

春蘭は唖然とした。国運を占う立場にある者たちが、占を外すことがあるのだという。なによりも春蘭を驚愕させたのは、それが当然だと蟬英が受け止めていることだ。

春蘭が世俗を離れてから三百年。占師の在り方はここまで変わってしまったのか。

「第一、占はそんなに重視されちゃいないんだよ。未来をいちいち気にしてたら、好きに暮らせなくなっちまうじゃないか」

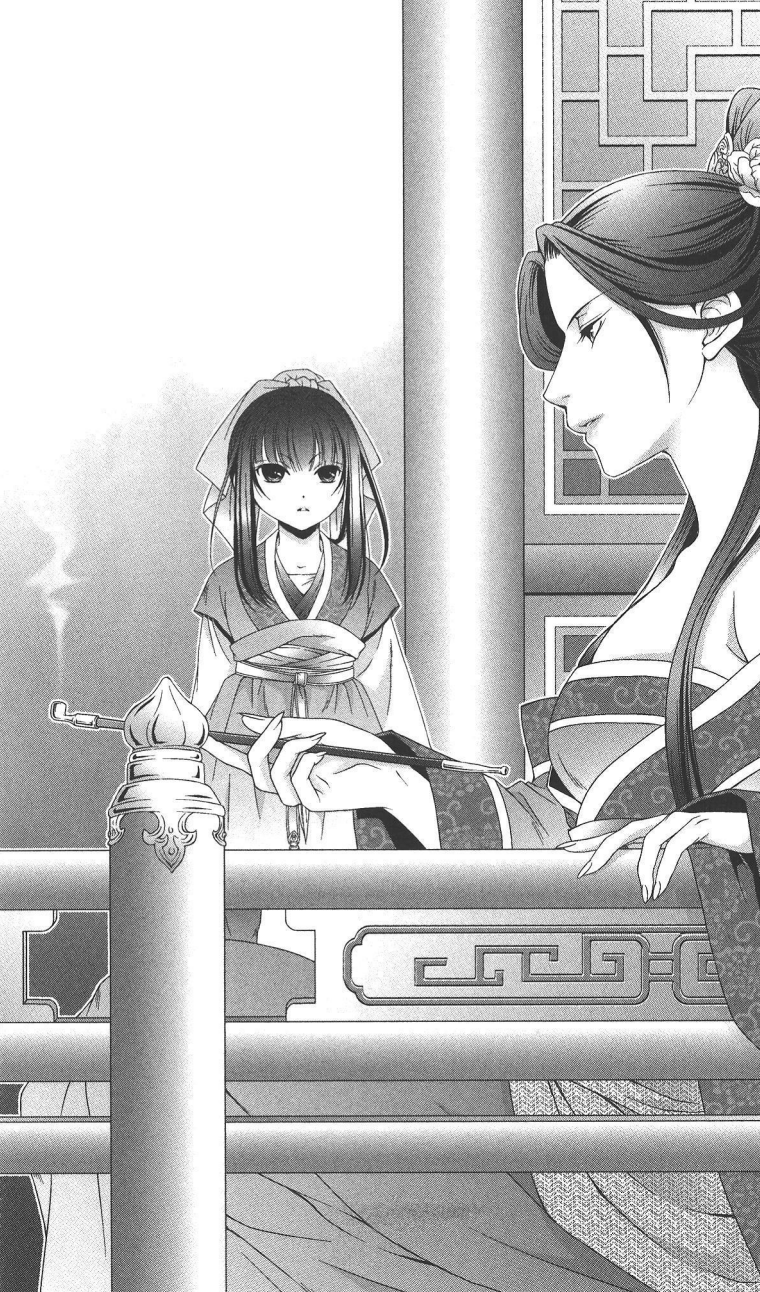
「だが、防ぐことのできる不幸もある」

「防いだ先に幸せが待っているならまだしも、また不幸の神様が待ち構えているかもしれないよ。それもすべて防いでくれるっていうのかい？」

揶揄するような口調に、春蘭は唇を噛んだ。確かに、新たに敷かれた道の先が幸福であるという保証はない。それはあくまでも、目前に迫った障害を避けるための助言でしかないのだ。

「世の中には、なにも知らない方が幸せなこともあるんだよ」

「……それでは、占師の存在する意味がないではないか」



――ああ、だからここまで廃れてしまったのだろうか。

春蘭の得意とする水神盤を使った占いは、今や文献に記述があるだけの失われた占術である。誰もが扱うことのできるものではなく、適性や占い方法の難しさから成り手自体も少なかった。

それがここまで廃れてしまった原因かと、春蘭は思っていたが、蟬英の話を聞いていると違うのではないかという思いが湧いた。

「おかしなことを言うね。意味がなくちゃ存在しちゃいけないのかい？」

「必要とされなければ意味がないだろう」

「必要の度合いが違うんだよ。必ずしもなければならないというわけじゃあない。占師が存在しなくても、人間は生きていけるよ。あたしらのような妓女がいなくても平気なようにね」

そもそも、蟬英と春蘭とでは占師に対する認識が違うのだ、双方共に互いの考えを理解できないのも当然といえば当然だろう。

そう考えることで、春蘭は納得のいかない己の気持ちを押さえ込んだ。

「つまり、娯楽なのさ。占師も妓女もね」

一人前の占師になるためには、血が滲むような努力が必要だった。

春蘭は早くから師となってくれる相手がいたが、一人で占師を目指すとなればかなりの年月を必要とするだろう。その途中で、いったい幾人の者たちが脱落していったことか。

だが、大勢の人々の暮らしを背負うのだ、当然のことであると春蘭は考えていた。それを〝娯楽〟と切って捨てられることに対して、誇りを傷付けられたかのような衝撃を味わった。

自分は人々を楽しませるためだけに占師を目指したわけではない。今と昔とでは、占師に求められるものが違うのだとしても、憤らずにはいられなかった。

「言っただろう？　うちに占師を置いておく利点はないってね。確かに物珍しさはあるが、黄海楼は花街でも老舗中の老舗なんだ。そんなものでわざわざ客寄せしなくてもいいのさ。それに、下手な相手を雇って、黄海楼の品位を落とすわけにはいかないからねぇ」

「……では、私は占師として雇ってはもらえぬのか？」

黄海楼がだめならば別の妓楼、というわけにはいかない。攫猿の一件で世話になった際、妓女たちの扱われ方を見て、ここなら大丈夫だろうと判断したのだ。

それに春蘭は楊秀の知り合いである。無下に扱うこともないだろうという打算もあった。

「まあねぇ、当たるとなればそれなりの客寄せにはなるだろうし、雇ってやれないこともない。ただ、さっきみたいなのは困るよ」

「さっき？」

「疫のことさ。いきなりそんなことを言われてご覧、どんな楽しい気持ちも一瞬で興醒めだよ」

「真実を告げてはならぬというのか？」

それは占師としての信条に反する、と春蘭は眉を曇らせた。

たとえどれだけ残酷な卦が出ても、真実以外は告げてはならない。そう教えられてきた春蘭にとって、蟬英の出した条件は承諾しかねた。

「ここに来る客は、そんなものを求めちゃいないのさ。未来を知りたいのなら、占師として店を出しているとこに行きゃいいだけだ」

「だが……」

「簡単なことだよ。そんなものを占わなければいい。さっきみたいな失せ物探しや、単純な吉凶、恋占いなんかもいいねぇ。そんな他愛もない物事を占えばいいのさ」

確かに、それならば疫のような災厄が結果として現れることもないだろう。客の意に添わない結果だ

ったとしても、しょせん占いだと笑って済ませられる範囲かもしれない。

「それならば、雇ってもらえるのか？」

「面白くないって顔だね」

「当然だ」

「じゃあ、断るかい？」

「いや。わがままを言うつもりはない」

あくまでも春蘭の目的は、玄楽から真名を取り戻すことである。

そのためには鄭家に留まらなければならず、世話になるからにはまとまった金銭を払わなければならなかった。たとえ仲望や友寧たちが必要ないと言っても、それは春蘭の矜持が許さない。

別に働き口を見つけられない以上、わがままを言っていられる状況ではないことくらい春蘭も痛いほどわかっていた。

蟬英は春蘭を一瞥したあと、瞼を閉じて思案するように考え込みはじめた。片手に持つ煙管から、一筋の煙が立ち上る。

「……客寄せにはなる。ただ、外見がねぇ……いや、いっそのこと……」

ぶつぶつと呟いていた蟬英だったが、なにか閃くものがあったのか、急に双眸を見開いたかと思うと、にやりと笑みを浮かべた。今にも舌舐めずりしそうな表情である。

「いいね。金の匂いがするよ」

「そうか？」

「攫猿の件もいい客寄せになったけど……ふふふっ、今回も期待できそうだねぇ」

なにを想像しているのか不明だが、なんとか雇ってもらえそうな流れに、春蘭は安堵の息をついた。得られる賃金は、雀の涙ほどかもしれない。それでも、自分一人分の食い扶持くらいは稼げるだろう。これで気後れすることなく、鄭家に居座ることができる。もっとも、気後れしたことなど一度としてないが。

「ただし、条件がある。さっきも言ったように、客が不快になるような占は絶対に禁止だよ。それだけは守っておくれ。あとは世話になってる人にきっちり話をつけておくんだよ。揉めるのはごめんだからね」

「了承した。では、これから世話になる。それと、私の名は李春蘭だ。春蘭と呼んでくれ」

「わかったよ。ああ、でも占師としての名は別の方がいいねぇ。春蘭、春の蘭……秋菊というのはどうだい？」

春蘭秋菊とは、吉兆図として用いられることが多い。春の蘭は風雅にして高潔であり、秋の菊は多彩で美しい姿をしていることから、優劣をつけ難いという意味もある。

――秋菊。

懐かしい響きに、春蘭は思わず目を見開いた。

「嫌かい？」

「そういうわけではない……ただ、懐かしい名に少し驚いた」

〝――春蘭〟

忘れたと思っていたのに、長い年月を経ても思い出すことのできる優しげな声。占師としては厳しい人だったが、母親としては優しい人だった。

「それでよい」

「じゃあ、詳しいことは後日、報せを送るよ。色々と手配しなきゃあならないからねぇ」

「手配？」

「ふふふっ。それはあとのお楽しみだよ」

満面の笑みを浮かべる蟬英に疑問を感じながらも、これで意気揚々と凱旋できることに、春蘭も顔を綻ばせたのだった。

ただ、占師に対する世間の認識の変わりように、複雑な気持ちにならざるを得なかった。



――思えば、今日は朝から最悪だった。

鄭仲望は、頭痛を堪えるように瞼を閉じた。頭を動かした拍子に、長く伸ばした前髪が頬にかかる。本来、外出の際はきっちり結わなければ無作法とされる髪は、一本の朱色の紐で緩く括られただけで背に流されていた。服装も枯れ草色の質素な袍で、普段、屋敷でくつろぐ格好のままである。

そんな仲望は、龍神大路の大門のすぐ傍にある龍乎の詰所にいた。

龍乎とは、華安の街を警備する衛士の総称である。十二の部隊から構成され、それぞれの管轄する地域の治安を守っている。通りですれ違うことはあっても、何事もなく暮らしていれば、まずかかわりあいになることはない相手だ。

文字通りなにもせずに日々を送っていたはずなのに、なぜ自分はここに連れて来られたのだろうか、と仲望はやるせない溜息をついた。どう考えても、嫌な感じしかしない。

「てめぇ、俺様を目の前にして、なに溜息なんてついてんだ！　喧嘩売ってんのか！　買うぞ！」

「勘弁してくれ……」

土間には、古びた卓と椅子があった。それ以外には小窓があるだけで、調度品と呼べるものはなに一つない。

卓の端にこびりついた赤黒い色や、壁に見られる塗り直しの痕を眺めた仲望は、独房に入れられるよりはましだろうか、と達観するような気持ちになった。もっとも、独房に入れられるような心当たりはないのだが。

溜息をついて、仲望は卓に肘をつきながら目の前の人物を見た。

歳は、仲望より一つ上の二十五歳。精悍な顔付きと、やや吊り上がった目尻が、我が強く負けず嫌いな性格をよく表している。短服の上から胸甲と背甲を結ぶ形の鎧甲を身につけ、腕や足にも防具を嵌めていた。華安で暮らす者ならば、一目で龍乎兵とわかる出で立ちである。

男の名は姫子慮。

龍乎虎慈軍隊長であり、自称、仲望の好敵手だ。仲望にとっては、できる限り会いたくない人物の上位に君臨する相手である。

「……とりあえず、どうして俺はここに連れて来られたんだ？」

無駄と知りつつも、仲望は子慮に訊ねた。

鄭家に虎慈軍の兵士たちが訪ねてきたのは、日の出を報せる一の鐘が鳴ってからそれほど経たぬ頃のことだ。曲がりなりにも仲望は鄭家の当主であるため、彼らの物腰は丁寧だが、有無を言わせぬ強引さで屋敷から連れ出されてしまった。そんなところはこの隊長に似ている。

理由を訊ねても「隊長から聞いてください」の一点張りで、詰所に着いたあとは数ある土間の一つに放り込まれた。それから昼を告げる二の鐘が鳴るまでこの状態である。

ようやく子慮が姿を見せたと思えば、「山に行くぞ。準備しろよ！」と、まったく理解できない言葉を告げられ、さすがに気の長い仲望でも苛立ちを覚えずにはいられなかった。

これで不機嫌にならないのは、言葉がわからない赤子くらいなものだろう。

「あん？　聞いてねぇのか？」

「隊長から聞けとしか言われてない」

「なんだよ。面倒くせぇから説明しとけって言ったのによ」

絶対に言ってないだろうな、と確信して、仲望は

胡乱な視線を子慮に向けた。対する子慮は、頭を掻きながら渋々といった様子で口を開く。
「あー、と。あれだ、あれ。山に行くんだよ」
「それはもう聞いた」
「なんだ、聞いてんじゃねぇか」
「だから、なぜ山に行くんだ。理由を言ってくれ」
会話するだけなのに、どうしてここまで疲れなければいけないのだろうか、と仲望は思わず天を仰いだ。誰でもいいから、この状況から救ってくれないだろうか。
「人捜しに決まってんだろ」
「なぜ？」
「いなくなったからだ」
「……もういい。お前の副官はどうした？」
いつも子慮のお守を引き受けている副官の姿がない。常識人である彼ならば、自分の質問に的確な答えを返してくれるだろう。多少、待つことになったとしても、その方がよほど有意義だ。
「そーいや、見ねぇな。便所か？」
「――んなわけないでしょう！」
戸口を見やれば、そこには怒りに顔を赤く染めた副官、杜文重の姿があった。
年齢は子慮や仲望よりも一、二歳若い。小柄でこれといって腕っ節が強いようには見えないが、彼も龍乎に所属する衛士である。服装は子慮と同じく、短服の上に龍乎仕様の防具を身につけていた。
文重は、温厚な容貌を鬼のように歪め、上司である子慮を睨みつけた。
「どうして仲望さんを詰所に呼んだりしたんですか！」
正確には強引に連れて来られたのだが、わざわざ訂正するのも面倒なので、仲望は口を噤んだまま二人のやりとりを眺めていた。
「そっちの方が早いだろ」
「馬鹿ですか？　馬鹿なんですね？　今回は、こちらがお願いする立場なんですよっ。普通は、こっち

から手土産持参でお屋敷を訪ねなきゃいけないんです！　ただでさえ隊長の心証は悪いのに、これ以上悪くしてどうするんですか！」

「面倒臭い」

「なに偉そうに答えてるんですか！」

怒鳴る文重と、それを右から左に聞き流している子慮を眺めながら、仲望は思った。

帰ってもいいだろうか、と。

文重の説教が終わったのは、それからしばらく経ってのことだった。

しかし、あまりの恐ろしさに夢に見そうなくらい鬼気迫る形相で叱られたにもかかわらず、子慮に反省の様子は見られない。むしろ、なぜ自分が怒られなければならないのかすら理解していない様子である。

「……申しわけないです」

疲れたように肩を落として謝罪する文重に、さすがの仲望も憐憫の情を覚えずにいられなかった。自分ならば、一日と持たずに職場放棄しているに違いない。想像しただけで、胃が痛くなりそうだ。

「それで、どうしてここに連れて来られたのか、説明してほしいんだけど」

「そ、それすら聞いてなかったんですか……！」

再び眉を吊り上げた文重が、子慮を睨みつける。さっさと屋敷に帰りたい仲望は、文重がまた説教しだす前に口を挟んだ。

「説教はあとで好きなだけやってくれ。それより、朝飯も食べていないんだ。用があるなら、さっさと済ませてほしい」

「ああっ。そうでしたね」

ごほん、と咳払いした文重は姿勢を改め、仲望に向き直った。

「実は先日、華安の南、馬で一日ほどの距離にある邑から、石の切り出しのために山に入っている人足

と、作業を監視していた役人たちが全員いなくなってしまった、と報せが入ったんです。それで、なにがあったのか調べるようにと、うちにお達しがありまして」

うち、というのは虎慈軍のことだろう。だが、龍乎の本来の職務は、華安の治安を守ることにある。今聞いた内容だと別の部署の管轄だ。場合によっては、禁軍の預かりになるだろう。

仲望の疑問に気付いたのか、文重は曖昧な表情を浮かべた。

「簡単に言えば、先に下調べして、なにがあったのか確認して来い、ってことです」

「体よく、雑務を押しつけられたわけか」

官吏たちの中には無駄な矜持を持つ者が多く、調査等の地味な仕事はもっともらしい理由をつけて龍乎に回すことが多い。おそらく、今回もその流れなのだろう。

「あいつら無駄に威張りくさりやがって！　華安を守ってんのは俺たちだってんだ！　わかってんのか仲望！」

「はいはい。隊長は黙ってましょうね。話が遅々として進みませんから」

文重は笑顔を浮かべているが、瞳が笑っていない。妙な威圧感に子慮が押し黙ると、文重はもう一度口を開いた。

「今に始まったことじゃありませんから、別にいいんですよ。誰かがやんなきゃいけないわけですし。ただ問題なのは、その人足たちが働いていたのが〝山堺〟の近くなんです」

――山堺。

それは、人里離れた山奥に存在する霊域である。活性化した地脈が歪み、乱れ、一時として正常を保つことはない。故に、山堺の気は人や獣を狂わせる。唯一、妖と呼ばれる異形の存在だけが、そこで生息することができた。

山堺に迷い込んだ多くは、地脈の乱れに耐え切れ

ず狂い、衰弱死するか、その前に妖の餌になるかのどちらかだ。よほどの奇跡でも起こらない限り、無事に下山できる者はいないだろう。

「捜索中にうっかり山堺に迷い込んだなんて、洒落にもならないじゃないですか。だから、仲望さんに同行してもらおうと思ったんです」

人の好さそうな笑みを浮かべる文重だが、なぜか仲望は、脅迫でもされているかのような気持ちになった。

元々、面倒事に巻き込まれるのだろうという予感はあった。しかし、これは予想していたよりも大事のようだ。

「……」

「黙秘してもだめですよ。仲望さんの右目は、地脈に流れる〝気〟を視ることができるってわかってるんですから」

文重の言葉に、仲望は右目を髪の上からそっと押さえた。

四年前の西奴の役。

当時、禁軍に所属していた仲望は、戦の最中、地脈の乱れに巻き込まれ、右目に異変をきたした。大地を巡る〝気〟を、直接目で視認できるようになってしまったのだ。

その事実は、一部の者にしか知られていない。文重はおそらく子慮から聞いたのだろう。なぜ、そういうことは忘れずに覚えているのだ、と仲望は子慮を恨んだ。

「ちょっと山に登るだけですから。警護も万全ですし、賃金だってちゃんと出ます」

「……足が不自由な俺に登山ができるわけがない」

「移動にはいい馬を用意します。それに、いざとなれば隊長が背負いますよ」

仲望と子慮の顔が同時に引き攣った。だが、ここで引き下がったら、虎慈軍と共に楽しくもない登山に同行しなければならなくなる。そんな面倒なことはごめんだ、と仲望は珍しく真面目な表情を浮かべ

た。

「悪いけど、他を当たって……」

「他にそんな物珍しい芸当ができる人がいるわけないじゃないですか。俺たちなんて、押しつけられたにもかかわらず、通常の職務も果たすようにと命令されてるんですよ？　当然、虎慈軍の衛士たちは休みなし。こっちとしては、さっさと行ってさっさと調べて帰ってきたいんです。よくわからない山堺の境界を、いちいち気にしながら捜索していたら終わるものも終わりません。それに、こっちには迷子の常習者だっているんです。未だに自分の管轄内すら一人で歩けないんですよ？　そんな相手を野放しにしたらどうなるか。考えるだけで気が滅入りそうになりますよ。少しでも面倒事を減らすためにも、協力してくれますよね？」

口を挟む暇すらなかった。今に始まったことではない、と言いながら、文重も静かなる怒りを募らせていたらしい。ここで断ろうものなら、さらなる追撃が待ち構えていそうだった。

一方、〝迷子の常習者〟と評された子慮は、会話を理解しているのかいないのか、詰まらなそうに窓の外を眺めている。自分が問題児扱いされていることに気付いていないのかもしれない。

「ちなみに、かかる旅費はすべてこちら持ちです」

逃げ場は完全に塞がれてしまったようだ。仕事があるから、という言い訳も文重には通用しないだろう。今の職を拝命したあと、仲望は数えるほどしか出仕していないとばれているのだから。

「あ、出立は明日ですから」

もはや、異論を唱えることすら面倒だった。

春蘭が鄭家に戻ったのは、日が傾きはじめた頃だった。

帰りも運よく龍神大路まで向かう荷馬車を見つけ、予定よりも早い帰宅となった春蘭だったが、屋敷に

入るなりいつもとは違う空気に首を傾げた。
「……なんだ？」
回廊の奥からは、ばたばたと走り回る音が引っ切りなしに響いている。不思議に思った春蘭が奥に顔を出せば、啓璋と友寧がなにやら大きな荷物をまとめているところであった。
「夜逃げか」
「違う！」
春蘭の独り言に、すぐさま啓璋の否定が入る。だが、慌ただしく荷造りしている様は、どう控え目に見ても夜逃げのそれにしか思えない。
「旦那様が明日から遠くに行かれるんだよ」
「……左遷か」
「なんでそうなる！　ちゃんと帰って来るに決まってんだろ！」
閑職に回された仲望は、これ幸いと屋敷でぐうたらしている。見かねた上司によってついに地方に左遷されたのか、と思ったのだが、どうやらそうではないようだ。
「龍乎の人に頼まれたと言っていたから、お仕事だと思うよ」
友寧の説明に、春蘭は「なるほど」と頷いた。しかし、どのような仕事なのかは二人とも知らないようだ。
「危ないものじゃなきゃいいけど……」
心なしか友寧の表情は暗い。
万が一、主が遠い所で危険な目に遭ったら、と不安を感じているようだ。普段から外に出掛けないだけに、不在ともなればあれこれ考えてしまうのだろう。
「大丈夫だって。龍乎の人たちも一緒なんだからさ」
「うん……。そうだよね」
啓璋は元気づけるように友寧の背を叩いた。仲望が二人に詳細を伝えなかったことは気になるが、単に説明が面倒だっただけかもしれない。

「そういえば、二人に訊きたいことがあるのだがよいか？」

忙しそうな二人の手を止めることになるが、春蘭にはどうしても確認しておきたいことがあった。

「宮廷にはお抱えの占師がいると聞いたが、それはどういったものなのだ？」

「なんだ、宮廷占師に興味があんのか？」

「興味というほどではない。ただ、国にとってどのような存在なのだろうと思っただけだ」

春蘭が気にしているのは、占師たちが占った結果にどれほどの重きが置かれているかである。蟬英との会話では、それなりの対処が取られるだろうことはわかった。無視されるようであれば、そもそも宮廷に占師はいらない。

「確か、礼部の管轄だったよな？」

「うん。あ、春蘭は礼部って知ってる？」

首を横に振る。宮廷にかんする知識はまったくといっていいほどない。

「外交、科挙、国家祭祀、あと……儀礼かな？　そういったものを司る部署で、宮廷占師もそこの所属になるんだよ。決められた日に占をして、その結果を報告してるんだって。人数はどれくらいなんだろうね？」

「二十人くらいはいるんじゃないか？」

「そんなにいるかな？」

どうやら、友寧たちも詳しくは知らないようだ。だが、おおよそのことがわかればいい。

「占師たちの発言は、重要視されているのか？」

「あー、当たり外れがあるみたいだしなぁ」

「二年前の飢饉も北の一部だけで、それも国の援助でなんとかなったしね」

「飢饉？」

春蘭の疑問に友寧は頷いた。

「宮廷占師が、大規模な飢饉が起こるって皇帝陛下に上訴したんだよ。でも、実際に飢饉に見舞われたのは、ごく一部だけだったんだ。備蓄用に商人たち

から食糧を買い集めたせいもあって、宮廷占師たちに対する風当たりは強かったって言うよ」
「迷惑な話だよな。俺たちもさ、値が上がりそうな食材を、むりして多めに買い込んだってのに」
「でも、嫌なことは当たるより外れたほうがいいよ」
友寧の言葉に春蘭は目を伏せた。やはり占師に対する信頼度は低いようだ。
「それ以来、礼部からはなんの発表もないよね」
「災厄なんて、そう簡単に起こるもんじゃねぇだろ」
春蘭の脳裏を、〝疫〟という言葉がよぎる。水神盤に浮かんだ文様は、間違いなく疫の流行を表していた。あれほどまでにはっきりと読み取れたそれを、占術方法は違うとしても、宮廷占師たちが見逃すものだろうか。
それとも、未だ発表されていないだけで、宮廷内部ではすでに対策を練る段階に入っているのだろうか。宮廷占師たちに対する信頼度が落ちてきているとはいえ、疫などという不吉な言葉を無視するとは考え難いが……。
「よくわかった。忙しいところを邪魔してすまなかったな」
「気にしないで」
一瞬、手伝いを申し出ようかと思った。しかし、今までの経験を踏まえれば邪魔になる可能性の方が高い。ここは大人しくしているか、と春蘭は結論を出した。
「ところで、仲望がどこにいるか知らぬか？」
「いつもの房にいらっしゃるよ。あ、でも今は楊秀様が来てるけど……」
「邪魔はせぬ。一言、報告するだけだ」
再び忙しそうに手を動かし始めた少年たちをおいて、春蘭は回廊を進んだ。
屋敷の南側に位置する房は日当たりがよく、鄭家の主は一日の大半をそこで過ごしている。ひょいと

覗けば、仲望とその友人である韓楊秀が何事か話し合っている最中であった。

「会話の途中ですまぬが、少しよいか？」

仲望が頷くのを待って、春蘭は室内に足を踏み入れる。床に胡坐をかく仲望の手前に座れば、脇から大きな手が春蘭の頭に伸びた。

「――相変わらず小さいな。ちゃんと食っているのか？」

頭を撫ぜながら、全身を観察するように眺める相手に、春蘭は深い溜息をついた。

均整の取れた体付きは、一目で武術を嗜んでいることがわかる。精悍な顔付きに一分の隙もない様子は、終始ぼんやりとしている仲望の友人とは思えないほどだ。

禁軍、右飛龍将軍という要職に就く楊秀は、隠遁のような生活を送る友人を心配してか、暇をみては鄭家へとやってくる。

「そんな簡単に背が伸びておれば、いつかぬしらを抜かしてしまうぞ」

「健康に育つのはいいが、あまりに大きすぎる嫁も困るな。なあ、仲望？」

「俺に同意を求めないでくれ……」

うんざりとする仲望に、春蘭も同等の眼差しを楊秀に向けた。思い込みが激しい性格なのか、楊秀はいくら当人たちが否定しても、春蘭を仲望の嫁と認識して譲らない。

むしろ、鄭家に嫁に来てくれる貴重な存在だからと、あれこれ世話を焼こうとする始末。真名を取り戻せば邑に戻らなければならない身なのだと主張しているが、未だに信じてはもらえない。最近では、否定することすら億劫になってきてしまった。

「とにかく、一朝一夕で背は伸びぬ」

「わかってはいるが、こうも小さいままだと少し心配でな」

「縮まぬ限り問題はなかろう。ところで、仲望。話があるのだが」

明日から屋敷を不在にするとなれば、今のうちに黄海楼のことを話すしかない。蟬英に、仲望から了承を得て来いと言われている手前、話しそびれるのは避けたい。

「なんだい？」

「攫猿の件で世話になった妓楼があっただろう。そこでな、雇ってもらえることになった。これで、私の食い扶持は心配ないぞ」

胸を張って告げた時だった。

どさり、と重たいものが落下する音がした。何事かと振り返れば、そこには顔を真っ青にした啓璋と友寧の姿があった。二人の足下には、彼らが持っていた荷物が散らばっている。

「ぎ、妓楼……！」

「なにもそこまで……！」

驚愕に顔を歪めた啓璋に対し、友寧は今にも泣き出しそうな表情を浮かべている。なにかまずいことでも言ったのだろうか。春蘭は己の台詞を反芻するが、特に引っ掛かる箇所があるようには思えなかった。

「雇用先になにか問題でもあるのか？」

「お、大ありだ！　お前はもっと自分を大事にしろよ！」

「そうだよ！　妓楼なんてっ、妓楼なんてっ！」

春蘭の両腕を双方から摑み、少年たちは必死の形相で迫ってくる。なぜ、こんなことになってしまったのか意味がわからない。助けを求めるように仲望を見れば、彼もまた友人に詰め寄られているところだった。

「仲望、見損なったぞ！　お前が不甲斐ないばかりに、こんな小さな嫁にまで苦労をかけて！　今すぐ黄海楼に行って取り消して来い！」

「くる、く、苦し」

楊秀が両手で仲望の襟首を摑んでいるため、首が締まっているようだ。しきりに楊秀の腕を叩くが、締めつけが弱まる気配はない。

「いや、取り消してもらっては困るぞ」
「……私が甘かったのだな。尻を蹴ってでも、この怠惰な男に仕事をさせるべきだったのだっ。そうすれば、こんな事態にはっ。すまない、春蘭！」
眉間に皺を寄せ、仲望の首をぐいぐい締めながら楊秀は苦悩の声を漏らす。仲望の手の動きが弱まってきた。
そろそろ意識がなくなってしまうのではないか、と感じた春蘭は、いつもならば血相を変えて楊秀を止めに入る少年たちの代わりに声をかけた。
「のう、楊秀。とりあえず、腕を緩めぬと仲望が死ぬぞ」
「くっ、こんな時にまで夫の心配を！　まさに嫁の鑑だ！」
「嫁になったつもりも、鑑になったつもりもないのだが……」
男泣きをはじめる楊秀に、春蘭は未だなぜこんな事態になったのかわからずに困惑する。そこでようやく、酸欠から解放された仲望が、少し困ったような、どこか呆れたような様子で口を開いた。
「……そもそも、黄海楼の楼主が楊秀の知り合いの子を、妓女見習いとして雇うわけないと思うんだけど」
仲望の言葉に、誰もがぴたりと動きを止めた。そして、一斉にその視線が春蘭へと向けられる。
「私は占師として雇ってもらったのだが……」
啓璋と友寧は安堵するように座り込み、楊秀は、いやそれでも妓楼で働くこと自体、悪い影響が云々、と独り言のように呟いている。
春蘭は、疲れたように襟元を直している仲望を見上げた。
「蝉英に、世話になっている者から了承を得て来いと言われたのだが、黄海楼で働いてもよいか？」
「……まあ、あそこなら危ないこともないし。春蘭がいいなら、反対はしないよ」
勘違いによる悶着はあったが、とりあえず了承を

得られたことに春蘭は満足したのだった。

――なぜ、酒盛りが始まったのだろうか。

春蘭は目の前で繰り広げられる酒宴に首を傾げた。華安を離れるのであれば、ろくなものを食べられないだろう、という楊秀の何気ない一言がきっかけだったように思う。楊秀は友寧たちに銭を渡し、夕食は精のつくものを頼むと告げると、自身はどこからか大量の酒を購入してきたのだった。

啓璋と友寧はせっせと料理を作り、夕食はこれまでにないほど豪華なものとなった。久し振りの芋粥以外の食事に、啓璋たちは嬉しそうに箸を伸ばしている。

楊秀は精をつけるためと言っていたが、鄭家の食生活から考えれば、道中の方がよほど美味いものを食べられるのではないだろうか。そう考えれば、日頃から楊秀の援助を断り続けている少年たちに、少しでも美味いものを食べさせてやろうという遠回しの親切心なのかもしれなかった。

もっとも、その当人は早々に酒精に酔い、ご機嫌で仲望に絡んでいるのだが。

「楊秀は酒に弱いのか？」

「弱くはないと思うぞ。もう、かなりの量を召し上がってるし」

確かに、啓璋の言う通り、楊秀の背後には空になった酒壺が幾つも転がっていた。

一方、絡み酒の被害に遭っている仲望といえば、どんどん酒を注ぐ楊秀のおかげでそれなりの量を飲んでいるはずだが、酔っている風には見えなかった。いつも通りの面倒臭そうな表情で、淡々と杯を口に運んでいる。

それを、酒壺を補充している友寧が心配そうな眼差しで眺めていた。おそらく、明日のことを考えているのだろう。

春蘭はいつもよりも膨れた腹に満足しながら、楊

秀から仲望へと視線を移した。
「仲望は強そうだな」
「鄭家のお血筋は酒に強いんだ。旦那様もすごいけど、玄楽様は底無しだったなぁ」
玄楽、と春蘭は呟いた。自然と眉が寄る。できれば、口になどしたくもない名である。しかし、春蘭の事情を知らない啓璋は、むしろ得意げに語り出した。
「旦那様と楊秀様、玄楽様の三人で飲み比べしたことがあってさ。楊秀様は早々に脱落したけど、お二人は火華っていうすごく強い酒を何壺も空にしたんだ。普通の奴だったら、一壺だって飲み切れねぇやつをだぞ？　すげぇだろ！」
嬉々として語る啓璋に、春蘭は感情の籠もらない声で「そうか」と応じた。
真名を奪った憎むべき相手である。しかし、その不届き者にかんする情報が少ないのも事実。ここは怒りに蓋をして、玄楽の情報を集めるべきだろうか、と春蘭は思案した。敵に勝つためには、まず敵の情報を得ることが肝心である。
「のう、啓璋。つかぬことを訊くが、鄭玄楽とはどういう人物だったのだ？」
「は？　玄楽様？」
すでに食事を終えた春蘭に対し、啓璋は卓に並んだ料理をせっせと口に運んでいる。見れば、友寧も仲望を心配しながらも手と口だけはしっかり動かしていた。
「っていうか、玄楽様が誰か知ってるのか？」
「……四年前の戦で亡くなった、仲望の腹違いの兄だろう？」
鄭玄楽は生きているが、今の春蘭にはそれを証明する手立てがない。いくら声高に主張したところで意味はなかった。
「仲望から聞いている」
「旦那様が？」
見開かれた目に、春蘭は内心で訝しく思いながら

も頷いた。
「他に誰から聞くというのだ」
「あ、そ、そうだよな」
　啓璋はぎこちない態度で、楊秀に酒を勧められ、嫌々ながら杯を飲み乾している仲望を、ちらちらと横目で窺っている。
「どうかしたのか？」
「いや……四年前から、旦那様は玄楽様のことをなに一つ話さなくなったんだ。だから、旦那様から聞いたって言われて少し驚いた」
　正確には、むりやり聞き出した、といった方が正しいが、仲望の口から告げられたことには間違いない。
「あまり詳しくは聞いていない。だから、どのような人物か気になったのだ」
「じゃあ、俺が教えてやるよ。玄楽様はすごい人だったんだ。武術だけじゃなく学問にも秀でていて、文官にって望まれたこともあったほどなんだ。鄭家が代々武官を輩出してきた名家だったから、あまり迷わずに禁軍へ所属されたみたいだったけど」
　春蘭の記憶にある玄楽は、旅人のように薄汚れた格好をしていたが、服の上からでもわかるほど鍛え抜かれた体軀をしていた。あれで文官だといわれても、納得できなかっただろう。
「使用人たちにも分け隔てなく接してくれて、俺や友寧にもすごく優しかったんだ。ただ、いつも周りに色んな人がいて、とっても忙しい人だったからな。言葉を交わしたのは、数えるほどしかなかったと思う」
「四年前というと、ぬしは九歳か」
「ああ。ここに来たのは八歳の時だったから、一年とちょっとしか一緒にいられなかったんだけどさ」
「友寧もか？」
「いや、友寧の方が俺より遅かったと思う。あいつがここに来て半年も経たないうちに、四年前の戦は起こったんだ」

今とは違い、当時は他の家僕や侍女、家令といった使用人たちが働いていたのだろう。屋敷に連れて来られたばかりの啓璋が、接点を持っていなかったとしても不思議ではない。

「あん時のことは、ほんとに思い出したくない。忘れようとしても無駄だってわかってるけどさ、できればきれいさっぱり忘れたいくらいだ」

四年前のことを語る啓璋の顔付きは険しい。玄楽の死と、仲望の負傷の報告を受けた使用人たちは、家僕の少年たちを残して我先にと屋敷から去ってしまったのだ。しかも、屋敷にあった金目の物を根こそぎ奪って。

当時の生々しい記憶は、未だに啓璋たちの心に大きな傷を残しているのだろう。

「話が逸れちまったな。とにかく、玄楽様は偉大な人だったんだよ。他の使用人たちも、立派だって噂しまくってたしな」

啓璋自身、玄楽のことを尊敬していたのか、故人を語る口調にも熱が入っている。しかし、「偉大」とか「立派だ」とばかり強調されても、どういう人物なのかいまいちよく理解ができない。

それに、人としてどれだけできた人物であっても、守り神から真名を奪った大罪人であることに変わりはないのだ。

「ふむ……そうか」

「楊秀様なら、もっとよくご存じだと思うぞ。なんたって、玄楽様の親友だったんだからな」

「わかった。ところで、そろそろ楊秀を止めないと、仲望が酔い潰されるぞ」

杯に注ぐだけでは飽き足らず、酒壺を直接仲望の口に押し当てはじめた楊秀を一瞥し、主人思いの啓璋は顔を真っ青にして立ち上がった。友寧はすでに楊秀の腕に取りついて、必死に引き剝がそうとしている。

仲望も抵抗はしているのだが、酒が回っているのかいまいち力が入らないようだ。あの様子では、二

日酔いは間違いない。

「……しかし、不愉快だな」

啓璋の言葉は、そのまま鄭家で働いていた使用人たちの認識なのだろう。つまり、玄楽は鄭家では善人を装っていたことになる。

憎む相手を絶賛されて、気分のいい者はいない。久し振りの満腹感に満足していた春蘭の機嫌は、見た目にはわからないが急激に降下しつつあった。

「止めてください、楊秀様！」

啓璋と友寧が、楊秀の手から酒壺を奪おうと奮闘している。しかし、体格も腕力も人一倍ずば抜けている楊秀にとって、それは猫がじゃれつく程度のものだろう。妨害にすらならない。案の定、気にも留めずに仲望へ絡み続ける。

楊秀は玄楽をどのように見ていたのだろうか。親友という親密な立場ならば、啓璋とは違う一面を見る機会もあったはずだ。

そして、弟である仲望は――。

初めは真名さえ取り戻すことができれば、玄楽個人などどうでもよかった。人となりを知ったところで意味はない。そう思って、なにも訊かずにいた。

だが、ここにきて春蘭に焦りが生じた。

春蘭の守護する邑は、洪水被害が多発する地域にある。実際、春蘭は守り神として幾度となく水害から邑を守っていた。特に、雨季は洪水が起こりやすい。雨によって緩んだ地盤は土砂崩れを引き起こすこともあり、規模によっては一つの邑が跡形もなくなくなってしまうこともあるほどだ。

玄楽は春蘭から真名を奪うことに成功したが、未だ隷属させるには至っていない。咄嗟に、春蘭が人間の器に戻ったからだ。

守り神として隷属させる気ならば、玄楽はいつか春蘭の前に姿を現すはずだが、それを悠長に待つことはできなかった。

――雨期は近い。

なんとしてでも、こちらから玄楽の居場所を見つ

け出す必要があった。

その日の夜半のこと。

春蘭は微かな物音に目を覚ました。春蘭に宛がわれた寝室は、中庭に面する回廊に程近い。誰かが起きてきたのだろうか、と眠い眼を擦りながら部屋を出れば、月明かりが差し込む回廊に見慣れた後ろ姿があった。

「――眠れぬのか？」

声をかけると、柱に背をもたれかけていた仲望がゆっくりと顔をあげた。その横顔には、疲労の色がありありと浮かんでいる。

「楊秀にだいぶ飲まされたからね。風に当たらないと眠れそうもない」

あのあと、春蘭は昼間の疲れもあり、早々に寝室に引き上げた。騒ぎ声からすると、ずいぶんと遅くまで飲んでいたようだ。

「災難だったな」

「まったくだ。朝には出立だというのに」

仲望は、いつにも増して面倒臭そうな溜息をついた。その横に座りながら、春蘭は昼間、聞きそびれたことを仲望に訊ねた。

「ところで、ぬしはなにをしに行くのだ？」

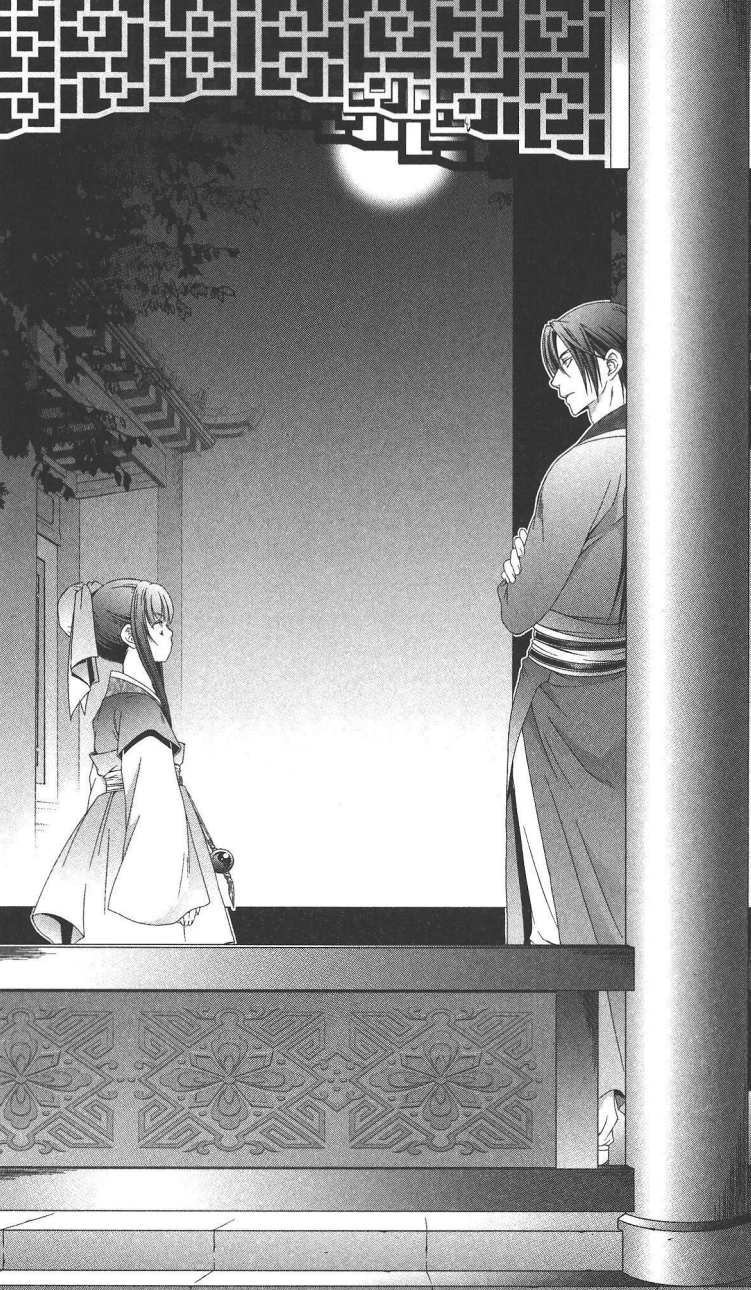
「伝えてなかったかい？」

「龍乎の者に頼み事をされたとしか聞いていない。啓璋もそうだが、特に友寧が心配していたぞ」

心配性の少年は、宴の準備をしている間もずっと浮かない顔をしていた。大丈夫だ、と声をかけることは簡単である。しかし、仲望がなにをしにどこへ行くのか知らない春蘭は、安易に慰めの言葉をかけることはできなかった。

言葉には、言霊が宿る。

どんなささいな言葉でも、ふとした拍子に大きな力を持つことがあるのだ。だからこそ、そこに責任が生じる。



〝――己の言動には最後まで責任を持ちなさい〟

昔、占師の教えと共に、母親から告げられた一言。占いの結果を言葉にして相手に伝える役目だからこそ、どれほどささいな発言であっても責めを負う覚悟が必要だった。

だが、卦を頭から否定されるのは辛い。蟬英にはまともに取り合ってはもらえなかった。なぜ、失せ物探しや簡単な吉凶占いはよくて、人の未来にかんすることを占ってはいけないのだろうか。それは妓楼に求められているものではないといわれても、春蘭は占を制限されることに戸惑いを感じずにはいられなかった。

複雑な気持ちを春蘭は抱えながら、仲望を見上げた。

「……心配をかけたくないから、曖昧に濁したのか？」

図星を突かれたのか、仲望は問いに苦笑で返した。街の警備を担っている龍乎絡みの話である。平和なものであるはずがない。それをわかっているからこそ、友寧も落ち着かないのだろう。

「楊秀には話してあるよ」

「私にも話せぬのか？」

「気になるなら、あとで聞くといい」

「楊秀が教えてくれるとよいのだがな」

どうやら、仲望は自分から話す気はないらしい。説明するのが面倒なのか、それとも春蘭に心配をかけたくはないと思っているのか。

後者であるならば、曖昧なことは言わずに嘘で春蘭を丸め込もうとするだろう。面倒なのだな、と春蘭は結論を下した。

「ところで、ぬしに訊こうと思っていたことがあるのだが」

「なんだい？」

「ぬしの兄のことだ」

兄、と春蘭が口にした瞬間、仲望の目がわずかに細められた。

「なぜ？」
「まずは敵を知らねばならぬと思ったからだ」
一番いいのは、玄楽の居場所を見つけることである。次に大事なのは、相手が不得手とするものを知ることだ。
禁軍の出身ならば腕は立つと見て間違いはないだろう。接近戦が得意なのか、それとも仲望と同じで弓の扱いに長けているのか。後者ならば、白桃でも手間取るかもしれない。
啓璋から聞いた話だけでは、外面しか推測することができなかった。
「交友関係なども教えてもらえるとよいな」
玄楽は、己の生存を誰にも伝えていないようだった。
だが、それはあくまでも春蘭が知り合った者たちには、である。春蘭が知らないだけで、もっと深い付き合いをしていた相手がいないとも限らない。
もしも、今でも連絡を取り合っている相手がいるとすれば、それは玄楽へと繋がる有効な手掛かりとなるだろう。
「――なにも知らないよ」
突き放す風でもなく、ただ淡々とした口調に春蘭は違和感を覚えた。
「兄弟なのだから、なにも知らぬということもないだろう」
「そういうことは、楊秀に訊いた方が早い」
やんわりとした拒絶。以前にも感じたが、鄭家の兄弟の仲はあまりよいものではなかったようだ。
なにより、春蘭が玄楽の生存を示唆したにもかかわらず、仲望は微塵も興味を示さなかった。普通ならば、冗談を言うなと怒るか、もっと詳しい話を聞かせてほしいと言いそうなものである。
だが、仲望の態度はどれとも違った。
無関心。その言葉がぴったりと当て嵌まる。
「ぬしは兄のことを嫌っていたのか？」
「別に」

「ならば、好いていたのか？」
「別に」
「普通ということか？」
好きでもなく嫌いでもないとなれば、その中間ということになる。それならばそれで別の反応を見せそうだが、と春蘭は首を傾げた。
「さあ……あまりよく覚えていないな」
「そんなことはあるまい」
「常に一緒にいたわけじゃあない。禁軍に所属していた時は、住む場所も別々だった」
月明かりに照らされた仲望の横顔は、端整なだけに作り物めいて見えた。それも感情の籠もらぬ人形のような。
内面から滲み出るような拒絶を感じてはいたが、春蘭に引くつもりはなかった。
「なにも覚えていないということはないだろう。それとも、玄楽を敵と見做す私に協力はできぬか」
幼い頃から共に育ってきた兄弟と、突然、屋敷に押し掛けてきた見知らぬ相手。比べるまでもなく、誰もが前者の味方をするだろう。
だが、と春蘭は口にした。
「――それはないな。あやつの味方ならば、私は鄭家に逗留させてもらえなかったはずだ」
だからといって、春蘭の味方というのも違う気がする。仲望は春蘭に対して、そこまで親身になってはいないはずだ。居候にかんしても、断るのが面倒だ、という単純な理由で許可されたのだ。
春蘭は淡々と自分の考えを語る。
「それに、ぬしは玄楽が生きていると言っても、興味を示す素振りすら見せぬ」
春蘭の言葉を信じていないのでは、と考えることもできる。しかし、仲望は不思議なことに、春蘭の身の上を否定するような態度は取らなかった。
「嫌っているわけではないのならば、もう少し反応があってもよいはずだ」
しばらくの沈黙のあと、仲望は億劫そうに溜息を

ついた。なにかしらの答えが得られない限り、春蘭が引かないと思ったのだろう。

「――どうでもいい。これが本心だよ」

感情の籠もらない淡々とした口調だった。

「たとえ兄が生きていようが死んでいようが興味はない。関係のないことだ」

「本心か？」

返答はなかった。

仲望は玄楽に、家族としての愛情を抱いていなかったのだろうか。興味も関心もないなどということが、本当にありうるのだろうか。

「……私には、ぬしがそう思い込もうとしているようにしか見えぬ」

共に暮らした日数は数えるほどだが、その間にわかったこともある。仲望は他人に対し無関心そうに見えるが、時として情の深い一面を見せることもある。

啓璋と友寧に心配をかけまいとしていることもそうだが、攫猿を退治する際、体に負荷がかかると承知の上で春蘭を危機から救ってくれた。けっして思い遣りの欠落した人間ではないのだ。

だからこそ、仲望の玄楽に対する態度には疑問ばかりが残った。

「春蘭には関係のないことだよ」

確かに関係はない。

明確に引かれた一線。それを越えるつもりはなかったが、説明のできないわだかまりが胸に残ったのも事実だった。

「そうか。だが、玄楽にかんすることは話してもらうぞ」

「……しつこいね」

仲望の眉間に皺が寄せられた。機嫌を損ねてしまったのだろうか。しかし、春蘭にも引けぬ理由がある。冷たさを含んだような眼差しを、春蘭も挑むように見上げた。

そこでふと、春蘭の胸中に不穏な考えがよぎる。

「……ぬしは玄楽を庇っているのか？」

表立って抗議することはないが、心の中ではどう思っているか定かではない。春蘭を手元に置いているのも、その動向を玄楽に報告しやすいからではないだろうか。

一度芽吹いた疑いの種は、黒い感情で春蘭の心を満たそうとした。それを払拭したのは、己に向けられた仲望の静かな眼差しであった。風のない湖面のように、わずかな揺らぎすら見られない。

深く息を吸った春蘭は、高ぶりそうになっていた感情を静めた。

「すまぬ。今のは八つ当たりだ」

「八つ当たり？」

「うむ」

もしも、仲望と玄楽が繋がっているのならば、すでにあの男は春蘭の前に現れているはずである。それに、水神盤がこの場所を〝吉〟と占うはずがない。冷静になって考えてみれば、仲望が玄楽の仲間である可能性は限りなく低かった。

「どうやら、自分でも気付かぬうちに焦っていたようだ」

鄭家に逗留するようになって、もう幾日もすぎた。だが、未だに玄楽の影すら摑めていない。焦らずにいる方がむりというものだ。

特に、雨の日は落ち着かない。雨期はまだ先だと頭ではわかっているが、胸が引き絞られるような憔燥を感じずにはいられなかった。

「いずれ玄楽について知っていることは洗い浚い吐いてもらうぞ。なに、今すぐに答えろとは言わぬ。さすがに、そろそろ眠らなければ明日に差し支えるからの。ぬしが帰って来たあとで教えてくれればよい」

「話せることはなにもないんだけどね……」

「ならば、道中に思い出しておけ。たまには頭を使ってやらぬと、物忘れが酷くなるぞ。啓璋と友寧が気の毒だ」

曖昧な表情を浮かべる仲望を見上げ、春蘭はその腕を軽く叩いた。
「どのような仕事かは知らぬが、ぬしには玄楽のことを訊かねばならぬ。無事に帰って来るのだぞ」
「できうる限り、努力はするよ」
嘘でもいいから、無事に戻ると言えないのだろうか。これでは、啓璋たちが心配するわけだ、と春蘭は嘆息した。
「では、ぬしが無事に戻るよう、約束を交わそう」
「……約束？」
「交わされた言の葉には力が宿る。家を出る時に、一言二言、言葉を交わすであろう。それも似たようなものだ」
〝気をつけて帰って来てください〟や、〝行って来る〟という、ささいな挨拶のようなものも、無事に帰って来るという約束である。
「本来ならば、互いの持ち物を交換するのが一番よいのだが……私は渡せるような私物を持たぬしな」
簪の一つもあればいいのだが、小物の類はまったくといっていいほど手持ちがない。両腕を組んで唸り声をあげた春蘭だったが、ふと、脳裏にとある光景が浮かんだ。
「そういえば、私が守護する邑の者たちが物を渡す代わりによくこうしていたな」
戦地へと向かう家族に、もしくは、邑を出て働きに行く家族に、心から無事を祈るように――。
仲望の膝に乗り上げた春蘭は、長い前髪を掻きあげると、その額に唇を落とした。そして、満足げに頷く。
「これでよい。ちゃんと無事に帰ってくるのだぞ――仲望？　なにを惚けているのだ？」
唖然、といった言葉が似合いそうな表情を浮かべていた仲望だったが、我に返ったあとで深い溜息をついた。
「……春蘭。これは、主に若い男女がしてなかったか？」

「そういえば、そうだな」
春蘭が肯定すれば、仲望は「やっぱり」と呟いて、やるせなさそうに肩を落とした。
「まあ、いいけどね……」
「なにがよいのだ？」
首を傾げた春蘭に対し、仲望は己の髪を結わえていた朱色の紐を解いた。長い漆黒の髪が、肩に広がる。
「はい」
春蘭は渡された髪紐を手に、説明を求めるように仲望を見上げた。
「持ち物を交換するのだろう？」
「よいのか？」
朱色の髪紐は、仲望が毎日のように身につけているものだ。気に入っているのではないか、と春蘭は言に含ませてみた。
「いいよ。帰ったら返してくれるのだろう？」
「うむ。では、ぬしが戻るまで預かっておこう」
手にした髪紐を、春蘭はぎゅっと握り締めた。
中庭に目を向ければ、ほどよい月光が辺りを柔らかく照らしだしていた。時折、髪を撫でる風もひんやりとしていて心地がいい。
仲望と玄楽の間には、なにか複雑な事情があるのかもしれない。そうでなければ、兄弟相手に〝どうでもいい〟などと言うはずがないのだから。
だが、それも春蘭にしてみれば関係のないことではある。自分には兄弟関係に踏み込む理由はない。理由はないが、あまりにも頑なな態度を取り続ける仲望が気になるのも確かだった。
夜鳥の物悲しい鳴き声が響く。
春蘭は仲望に付き合って、しばらくの間、静かに中庭を眺めていたのだった。

翌朝、啓璋と友寧のおかげで無事に支度を整えた仲望だったが、昨夜の酒が効いたのかぐったりとし

て目に生気がない。これで旅に出られるのだろうか。見送りのために早起きした春蘭は、歩くだけで左右に揺れる頭を眺めながら眉を寄せた。

ちなみに、仲望以上に酔い潰れた楊秀は、朝一で仕事があると言って、痛む頭を抱えながら帰って行った。仕事があるなら飲まなければいいのに、という仲望の呪詛を背に受けながら。

「ふはははは。わざわざこの俺様が迎えに来てやったぞ。出て来い仲望！」

朝の清々しい空気を切り裂くような哄笑に、厨房の土間で水を飲んでいた仲望が、心の底から面倒臭そうに顔を歪めた。龍乎の者、としか聞いていなかった春蘭は、哄笑の主に思い至り、同情するような眼差しを仲望に向けた。

「子慮が同行するのか……。気の毒に」

「そう思うなら代わってくれ」

「むりを言うでない。それに、子慮は腕は立つ。心強いではないか」

先日の攫猿騒動において、春蘭は子慮の実力を目の当たりにしていた。手負いとはいえ、攫猿を押さえ込むほどの技量の持ち主である。いざという時には頼りになるだろう。

もっとも、四六時中、共に行動するとなると、好敵手として認識されている仲望にとっては、はなはだ面倒臭い相手なのだろうが。

「どうした！　好敵手ともあろう者が、今更になって怖気づいたのか！」

「……早く行かねば、面倒なことになるぞ」

隣家とは距離があるため、近所迷惑になる心配はないが、仲望が啓璋たちにあえて伝えなかったことまで暴露されてしまいそうだ。

もっとも、啓璋と友寧は、まとめた荷物を馬に括りつけるのに忙しく、子慮の言葉にまで気を配っている余裕はないようだが。

「春蘭……」

「しかたがないのう。さっさと来るのだぞ」

縋るような仲望の視線を受け、昨夜の宴会の残り物を摘まんでいた春蘭は、無意味な挑発を続ける子慮の許へと向かった。

「おい、仲望！　寝てんじゃねぇだろうな。いい加減に観念して出てきやがれ！」

「……ぬしは、朝っぱらから無駄に元気だな」

門の前で仁王立ちしている子慮に、春蘭は呆れた眼差しを向けた。

龍乎のお仕着せではなく、騎乗する馬が疲れないように、旅装の上から胸当てと籠手だけという最小限の防具しか身につけていない。武器も腰に佩いた剣のみだ。

危険な場所に赴くのならば、もう少し武器と防具を持参するはずである。ということは、心配するほど危ない目には遭わないということだろうか。いや、運ぶ荷物を減らし、現地で調達するという可能性もある。

色々な考えが交錯した結果、楊秀に訊く他、本当のことを知る手立てはないようだ、と結論づける。

「うおっ、誰もいねぇのに声がすると思ったらちびっ子かよ。びびらせんじゃねぇ！」

「ぬしが勝手に驚いただけだろう。それに、人様の屋敷の門前で怒鳴るでない」

「ちびっ子の癖に説教か？　仲望の奴が出てこねぇんだからしかたねぇだろ」

子慮はそう言いながら、春蘭の頭をぐりぐりと撫でる。それを払い除けようとしていると、横合いからいきなり怒声が響いた。

「隊長！　あんたって人は、どうして小さい子にそんなことをするんですか！」

かわいそうですよ、と顔を真っ赤にして怒鳴るのは、子慮の副官である文重だ。急いで春蘭の傍に走り寄ると、頭に乗せられていた子慮の手を叩き落とす。

「いてぇ！」

「当たり前です。これに懲りたら二度と同じことは

しないでください」
「お前、俺は上官だぞ！」
「上官なら、もっと上官らしくしてください」
　文重は冷ややかな眼差しを子慮に向けたあと、今度は打って変わった優しげな声で春蘭に話しかけてきた。
「がさつな上司でごめんね？　ああ、せっかく可愛く整えた髪がぼさぼさになっちゃって」
「気にするな」
　乱れた髪を手櫛で整えた春蘭は、子慮の手綱を握る人物が現れたことに安堵の息を吐いた。
「文重。子慮をあまり野放しにするな」
「ごめんね。隊長の声に驚いた馬たちを宥めるのに必死で」
　春蘭が視線を向けた先には、興奮して前脚で地面を蹴る馬たちと、それを必死で抑える男たちの姿があった。目算で七人はいるだろうか。おそらく、彼らも子慮の部下なのだろう。
「反省してくださいよ、隊長」
「ふんっ」
　顔を背ける子慮に対し、文重の額に青筋が浮かんだ。これはまずい、と判断した春蘭は、文重の服を引っ張る。
「のう、文重。ぬしらは、どれくらいで華安に戻って来るのだ？」
「行き帰りを含めて、六日もあれば戻って来られると思うよ。あまり華安を留守にしたくないからね」
「そうか」
「仲望さんのことが心配なのかい？」
　心配でないと言えば嘘になる。仲望の存在は、鄭家に居候するにあたって必要不可欠だ。占の結果が鄭家を指し示している限り、春蘭はここに留まり続けなければならないのだから。
　それに、仲望には玄楽にかんする情報を、洗い浚い喋ってもらわなければならない。なにも覚えていないなどと言われても、納得できるわけがない。

「うむ。仲望に死んでもらっては困る」
「ふーん。じゃあ、やっぱり春蘭は、楊秀さんが言ってたように、いずれ仲望さんのお嫁さんになるんだね」
どうやら、楊秀は自身の思い込みを他者に言い触らしているようだ。納得するように頷いている文重に、春蘭は訝しげな視線を向けた。
「……どうしてそうなる」
「違うのかい？　歳はちょっと離れているけど、お似合いだと思うよ」
「いや、そうではなく」
「おい、ちびっ子。仲望なんてやめとけ。結婚するなら、俺様みたいな男前にしといた方がいいぞ」
どこからそんな自信が湧いてくるのか、子慮は得意気に胸を張った。仲望を夫にするのもごめんだが、子慮のような男はもっと面倒だ。絶対に気の休まる時はないだろう。
「……私としては、どちらも遠慮したいのだが」
春蘭が正直に答えていると、ようやく腹を括ったらしい仲望が姿を見せた。啓璋たちも馬に荷物を積み終えたようで、頬を紅潮させながら門へとやってくる。
「ずいぶんと遅い登場だな。待ち草臥れたぞ！」
「だから隊長。どうして、突っ掛かるような物言いをするんですか。草臥れるほど待ってないでしょう」
正論で畳みかけられれば、さすがの子慮も黙らざるをえない。不貞腐れたような様子で、わざとらしく舌打ちする。
そんな上司を尻目に、文重はにこやかな表情で仲望に話しかけた。
「昨日の今日で本当にすみません。ああ、頼んでおいた馬もちゃんと届いたみたいですね」
仲望の荷物を背に積んだ馬は、今朝早く、鄭家に届けられたようだ。どうりで昨日は見なかったはずだ、と春蘭は栗毛の馬を見上げた。

「あの、立派な馬を貸していただいてありがとうございました」
　友寧の言葉に、文重は穏やかな笑みで応えた。
「うちの子たちの中でも、一番温厚で気遣いのできる子を選んだからね。それに、仲望さんにはこちらがお願いして同行してもらうんだから、それくらい当然だよ」
「けっ、んな奴いなくても、あでででっ！」
　文重は笑顔を崩さずに、子慮の足を踵でぐりぐりと踏み潰した。それを見た啓璋と友寧の顔は蒼白だ。
「隊長は余計な口を挟まないでくださいね」
　文重の、上司を上司とも思わぬ扱いは相変わらずである。むしろ、そうでなければ子慮の副官など勤まらないのかもしれない。
「では、行きますか」
　文重の言葉を合図に、こちらを窺っていた龍乎の兵士たちは次々に騎乗していく。いよいよ出立の時だ。
　子慮と文重もそれぞれの馬に騎乗し、仲望も不自由な左足を庇いながらもなんとか馬に乗る。仲望に宛がわれた馬は、文重の言うとおり大人しい気性で、始終、悠然と構えていた。
「仲望。気をつけるのだぞ」
　馬から少し離れた場所に立った春蘭は、馬上の人となった仲望に声をかける。それに振り返った仲望は、
「行って来るよ」
と、素っ気ない返事を寄越した。
　土煙を上げ、仲望たちはあっという間に視界から消えてしまった。不安から、気落ちする友寧を、啓璋がなんとか慰めようとしている。
「六日、か」
　妓楼で働きはじめれば、六日などあっという間にすぎるだろう。それこそ、仲望の心配などしている暇はないかもしれない。
　それでもやはり、胸に巣食った不安は去らない。

「一度占ってみるべきだったか」

仲望は必要ないと断ったかもしれない。しかし、なにかあるとわかっているならば、避けられる不幸もあるのだ。

「いや、さすがに考えすぎか……」

友寧に感化されてしまったのかもしれないな、と春蘭は小さく苦笑したのだった。



皇帝が政務を行う紫宝宮。その出入り口は、まとまった人数が移動できるほどの幅を持ち、本殿へと繋がる回廊も警備の目が行き届くように開放的な造りとなっている。

だが、謁見の広間をすぎれば、そこからは極端に回廊の幅も狭くなり、それまで以上に警備も厳しさを増す。迷路のような本殿を奥へ奥へと進んだ先に、皇帝の執務室はあった。

その房へと続く回廊を、ゆったりとした足取りで進む初老の男がいる。名は管招達。門下省長官という要職にあり、皇帝の信が厚い人物である。

枯れ木のように痩せ細った体は、幾重にも重ねられた正装に埋もれ、頭上に乗せられた冠もどこか重そうに見える。長官の任を果たせるのか不安になるような老人である。唯一、皺の深い顔の中で、抜け目のない光を放つ双眸が只者ではない雰囲気を漂わせていた。

朱塗りの扉の前で立ち止まった招達は、室内に向かって声を張り上げた。本来ならば侍従が取り次ぎを行うのだが、部屋の主の意向で警備兵以外の人影はない。そもそもここを訪れる者が限られているからだ。招達は、そのうちの一人である。

「入れ」

低く、響く声に、招達は自然と頭を垂れた。

室内に入り、拱手しながらますます深く頭を下げる。

「露台建設の件で報告に参りました」

「……遅れているようだな」

不機嫌を隠さない声音に内心で重苦しい溜息をつ

きながら、招達は拱手する手を解きゆっくりと顔をあげた。

大きな執務机に向かい、気難しげな表情を浮かべている人物こそ、華国の頂点に立つ皇帝、沸儀である。

禁軍時代から他者を寄せつけぬ圧倒的な強さを誇っていた肉体は、四十五を数える今も衰えた様子はない。ただそこに存在するだけで威圧感を漂わせる沸儀には、誰もが自然と頭を下げてしまう。

豪奢な正装や冠も、招達とは違い、沸儀の威厳を引き立てる脇役にしかすぎなかった。

「申しわけございません」

招達は再び低頭した。

たとえどのような理由があろうとも、露台の建設が遅れているのはまぎれもない事実。詰まる所、それを任された招達の責任であるのだ。

もっとも、門下省は本来、中書省が起草した詔勅の内容を審議する部署であり、宮殿内の建設はまた別の部署の管轄である。しかし、命ぜられたのは招達である。異を唱えることは許されない。

「山に資材を調達しに入った人足たちが、監視の役人を含め全員消えたとのことです。現在、私の下の者が調査を行っております」

「罪人を起用したのだ、逃げられたのだろう。捕らえ次第、殺せ。姿を消した役人たちもだ」

「そのように手配いたします。資材調達の件も、場所を変えて行うように命じました。日数にして、五日ほどの遅れが生じますが、建設を急がせることで取り戻させましょう」

重要なのは結果だ。途中で問題が生じたとしても、それを補い、期日までに完成させればよいのである。招達はそのような手腕に優れていたこともあり、沸儀の信を得ていた。

残虐皇帝として恐れられる沸儀であるが、それはあくまでも理に適った行動の結果である。帝位継承権を持つ公子らを殺害した〝華玉の乱〟にしても、

計画的に五大夫の弱体化を計ったことにしても、すべては皇帝の座を盤石にするためだ。

先帝をはじめとする、歴代の皇帝の大半が五大夫や宦官の操り人形と化した事例を踏まえ、沸儀が先手を打ったにすぎない。

沸儀が有能である故に、彼の人の前で無能であることは許されない。

そして、無能な部下は淘汰される。

当然だ。役職に見合った業績をあげない者を、いつまでもそこに留めておく理由はない。人材は掃いて捨てるほどいるのだ。

逆に、それは優秀であれば、より高い官職に引き立てられることを意味していた。門閥貴族たちが幅を利かせていた頃とは違う。奴らは五大夫が失脚したと同時に本来の力を失った。

必要とされるのは、純粋な能力。

成り上がりとして宮廷で軽んじられていた招達を、門下省長官の地位にまで押し上げたのは、その類稀なる能力と、沸儀の実力主義志向であった。

だからこそ、招達は沸儀に忠誠を誓うのだ。

「そういえば、占師たちがなにやら騒いでいたな。なんの報せもないが、そちらはどうなっている？」

「確認を取っている最中ですが、卦に不吉な影が出たとのことです。おそらく〝疫〟の兆候かと。占師たちは外れた際の罰を恐れ、口を噤んでいる模様ですな」

「無能な者はいらぬ。処罰せよ」

「刑部に命じておきましょう。卦については、礼部よりすぐに報告させます」

「いらぬ」

告げられた言葉に、招達は目を眇めた。探るような眼差しの先で、黒々とした口髭を撫でる沸儀は口を開いた。

「弱き者など、余の国にはいらぬ」

「……承知しました」

だが、疫が流行るとわかっていて、なんの対策も

立てぬわけにはいかない。万が一、華安に広がるようなことになれば、招達は対応を命じられるだろう。たとえ沸儀からの命がなくとも、それを見越した行動が取れる招達だからこそ、ここまで重用されているのだ。

「用は済んだ。下がれ」

腰を折り深々と拱手するが、すでに沸儀の視線は招達から外れている。分厚い書類の束を流すように読み、時折、筆を取っては指示を書き込んでいる。

世間の者たちは、皇帝が政務に顔も出さず、後宮において好色に明け暮れていると噂するが、実態は違う。確かに後宮の規模は歴代の皇帝の中でも、一、二を争うだろう。しかし、沸儀は女に溺れているわけではない。

政務においての沸儀は、実に優秀だった。彼の果断さがなければ、朝廷の腐敗は国全体をも腐らせていたことだろう。地方の反乱や猩猩緋といった義賊の台頭などは、先帝までの負の遺産だ。

過去、どれほど寵愛した妃がいても、その身内を贔屓するといったことはなかった。妃が望むものは買い与える。ただし、けっして妃も、親族にも政務に口を出す機会は与えなかった。

唯一の例外が、現在沸儀の寵を一身に受けている黎貴妃である。

己の子を太子にしようと画策し、名立たる官吏に声をかけているようだ。通常ならば不興を買って処罰されているところだが、太子のすげ替えは沸儀の望むところでもあるので協力を勝ち得ているのだろう。

おそらく、そう遠からず太子の首はすげ替えられる。沸儀が望んで実行できなかったことなど、一つもないからだ。

房を辞した招達は、回廊を歩きながら脳裏で今後の対策を練りはじめた。露台の件にかんしては、すでに手配済みである。資材の調達は別の場所でも可能だ。こちらはさほど遅れを見せずに工事に着手で

きるだろう。

　占師たちは責任者の首を幾つか飛ばせば、内部で結果を隠匿するようなことは二度としないだろう。占の結果が大幅に外れでもしない限り、処罰されることはないのだということも念押ししておかねばならない。人足と違って占師には数に限りがあるのだから。

　もっとも、二年前の飢饉にかんする占いが外れたことについては、責任を取るという形で責任者に死を命じたが……。

　問題は、彼らが占った〝疫〟だ。

　処分の前に詳しいことを問い質す必要がありそうだ、と考えた時だった。薄暗い回廊を、こちらへと向かって進んでくる者がいた。

「……これはこれは、管侍中。お久し振りでございますね」

　媚を売るような相手の声音に、招達は思わず顔を顰めた。他の者を相手に感情を見せることなどしないが、この相手だけは別だ。なんとも嫌な男に会ってしまったものだと、内心で舌打ちする。

　男の名は紅箏言。年齢は三十代前半だろうか。容貌だけを見れば優男のようだが、ほっそりとした体付きには男性らしさの欠片もなく、宮中では宦官の出ではないかと、嫌味半分に噂されるほどである。薄暗いせいもあって、その病的なまでに白い肌が箏言の異様さを際立たせていた。

　紅を塗ったような唇で弧を描きながら、箏言は足音を立てずに招達の傍へと歩み寄った。

「主上の許へ行かれた帰りでございますか？」

「……それ以外に、私がここにいる理由があるとでも？」

「そんなに怖い顔をなさらなくても、よいではありませぬか。共に主上の寵愛を受ける身なのですから」

「ぬしと一緒にしてもらっては困る」

　たとえ仰ぐ主は同じでも慣れ合うつもりはない。

その意味を含めて睨みつければ、筝言は「おお、怖い」と袍の袂で口を覆った。

その一挙一動が招達の機嫌を損ねるとわかっているのか、筝言は愉快げに顔を歪めて見せた。

「……確かに。私の方が寵愛は深いようですからねぇ」

挑発するように笑う相手に、招達は思わず唇を噛み締めた。反論しないのは、彼の主張が事実であるからだ。

筝言は、招達のように役職を持たない。にもかかわらず、皇帝の執務室に入る権利を持ち、もっとも重要な太子への対応を一手に任されているのだ。

現在、沸儀の治世を脅かす存在といえば、実の子である博焚をおいて他にはない。

父親とは逆の、温厚篤実な性格で、なによりも争い事を嫌った。民のことを第一に考え、民の生活を圧迫するような政策を実施する父親を幾度となく諫める姿を招達も見ている。

故に、沸儀に疎まれ、父子の仲は冷え切っているといっても過言ではない。そして、沸儀が寵愛する妃が男児を産んだことにより、太子の地位を巡る争いが起ころうとしていた。

黎貴妃が祥安を産んだ時、招達は遠からず博焚は太子の座を追われるだろうと考えた。その際は、必ず自分に声がかかる。そう信じ、太子を廃するために根回しを行っていた。

だが、沸儀は身元もわからぬ男、筝言に太子の件を一任すると告げた。異論は認めない。その言葉に、招達は意見すら述べることはできなかった。

自分は、沸儀から信頼されていなかったのではないか。有能でありさえすればよいのだと思って励んでいたが、それは間違いだったのか。盤石であった足許が瓦解し、招達は目の前の男を心の底から憎いと感じた。

今でも顔を見る度に怒りと屈辱が蘇るが、それを態度に出すことを招達はよしとしなかった。寵を

競う相手に隙を見せたくはない。
「太子の件ですが、成果はまだなにもあがっていないようですな」
　筝言がどのような手段を用いて太子を失脚、または暗殺に導くのかは不明だが、未だに成果らしいものは見られない。
　醜い嫉妬だという自覚はあるが、嫌味の一つも言わねば気が収まらなかった。
「そうでしょうねぇ。見た目だけではなにもわからないはずです」
　応じる筝言は、いつにも増して飄々とした態度であった。
　わかってはいたことだが、それが腹立たしくてならない。せめてわずかでも、その余裕を崩すことができたら。想像するだけで、胸がすっとするに違いなかった。
「どういう意味ですかな？」
「これ以上はなにも言えません」
「陛下もご存じで？」
「もちろんです。ああ、それと、私の身辺を探っているようですが、無意味なことは止めた方がよろしいですよ。私たちは同輩なのですから、そう警戒なさらないでください。私はもっと、あなたとお近付きになりたいと思っているんです」
　口元は笑っているのに、その瞳には感情というものがない。まるで、暗い暗い闇の淵を覗いているような気分だ。
　覚えずして背筋に走った悪寒を、招達は顔を顰めることで耐えた。目の前の男が不気味でならない。なぜ、このような人物を沸儀は重用するのだろうか――。
「……失礼する」
「あははは。警戒心丸出しですねぇ。でも、寵臣だからって媚を売ってくる奴らより、顔を合わせる度に私に対する不審を隠そうともしないあなたの方が、よほど好感が持てますよ」

招達にしてみれば、筝言よりも媚を売ってくる者たちの方がよほど好ましかった。だが、皮肉を言えば、より苛立つ返答が待っている。口で勝てた例はない。

招達は鋭い眼差しだけを残し、その場から足早に立ち去ったのだった。

「おや、お仕事中でしたか？」

来訪も告げずに室内に足を踏み入れた筝言に対し、沸儀は別段咎めることもなく無感動な眼差しを向けた。

「なんの用だ」

「経過報告ですよ。あれのことは、定期的に報告しろとおっしゃったじゃないですか」

「どうせ変化はないのだろう？」

沸儀の全身から滲み出る威圧感に、筝言はにたりと笑った。

「あれは、短期間で成果があがるようなものではありませんからねぇ。ですが今のところは、とっても順調ですよ。きっと、雨期が訪れる頃には、満開の花が咲きます。楽しみですね」

意味ありげな筝言の言葉に、沸儀は「そうか」と、素っ気ない返答で応じた。

「おや、ずいぶんと冷淡なのですね。仮にも親子なのに」

「子であると同時に、敵でもある。お前は敵に情けをかけるのか？」

「かけませんねぇ。なるほど、下らないことを訊いてしまいました。申しわけありません」

少しも悪いとは感じていない口調で、筝言は謝罪した。

ここまで筝言が軽口を叩いても無事でいられるのは、その特殊な能力所以だろう。そうでなければ、自分の首はとっくの昔に胴と離れ離れになっている。

「そういえば、先ほど管侍中にお会いしましたよ。

親の敵のような目で見られてしまいました。私はもっと仲良くしたいのですがねぇ。そう告げても睨まれるばかりで。どうすれば、知己となっていただけるのでしょうかねぇ？」

「用が終わったのならば立ち去れ」

「……やれやれ。どうして私の想いは、どなたへも届かないのでしょうか」

わざとらしく嘆いて見せるが、もう沸儀はなんの反応も示さない。やはり、からかうならば管侍中の方が楽しい。思い通りの反応を返す招達は、筝言のお気に入りである。

親しくなりたいというのは本心なのだが、いまいち相手には伝わっていないようだ。もっとも、筝言を敵視している招達にしてみれば、迷惑以外の何物でもないだろうが。

「では、また報告にあがりますよ」

形ばかりの拱手をして、筝言は房を出た。向かった先は、紫宝宮に隣接する建物へと続く回廊、その中程にあるなんの変哲もない壁の奥に造られた特殊な隠し部屋である。

紫宝宮を建てた皇帝が、賊徒に襲われた際の逃走用にと秘密裏に造ったものだ。地下へと続く通路は、宮中から離れた場所にある井戸へと繋がっている。

筝言が使用しているのは、その手前にある倉庫のような部屋である。おそらく、きな臭い時世には、逃走を補助するための武器や防具、食糧などが置かれていたのだろう。

窓もなく、空気の流れが遮断されているため、室内には蒸した空気が立ち込めていた。昼間から蠟燭を使用しているせいもあるだろう。

「ご苦労様」

室内には、円を描くようにして五つの影がある。蠟燭の炎が揺れる度に、五つの影は妖しく蠢いていた。

床に胡坐をかく五人の男たちの足許は、土が露出する土間となっている。複雑な文様が掘られたそこ

には、要所に〝玉〟が置かれていた。
　筝言の言葉に反応したのは、手前に座っていた男である。頭から真っ黒な頭巾を被っており、年恰好は定かではない。
「進捗状況はどう？」
「昨夜、一人意識を失いましたが、すぐに補充を行いました。儀式に影響はなく、すべて順調にございます」
「これで四人目だっけ？」
「はい」
　儀式は体力の消耗が激しく、すでに四人が使い物にならなくなっている。意識を取り戻しても、しばらくの間は安静が絶対であり、その度に補充が行われていた。
「もうあとがないねぇ。次に誰かが倒れたら、私が入るよ」
「……申しわけありませぬ」
「謝罪はいらないよ。一族の再興のためなんだからね」
　先祖代々の悲願である、一族の再興。おそらく、自分の代でなさなければ、紅家に未来はないだろう。そのために筝言たちは許されざる禁忌まで犯したのだ。命を惜しむなど、今更である。
「それにしても、皇帝陛下のお膝元というだけあって、地脈の巡りはいいよねぇ。今までの中でも一番なんじゃない？」
　筝言の視線は、地面に向けられている。地に彫られた文様、その要所に置かれた玉に宿る光が、時折、明滅し、うねるように蠢いていた。地脈を流れる〝気〟の量が多いせいだ。
「はい。当初の予測よりも、術者たちのもちもよいようです。やはり、犠牲を払ってあれを抑えたのがよかったのでしょう」
「そうだね」
　文様の中心には、一房の髪が置かれていた。周囲には、それを取り囲むように玉が並べられている。

その持ち主を脳裏に思い描き、箏言は満足げに唇を歪めた。

「これで、宮廷の占師を束ねる藍家にいいようにされることもない。そういえば、占師たちが主上の機嫌を損ねたそうだよ。責任者が数名、首を切られるんじゃないかな」

宮廷が抱える占師の大半は、藍家の出だ。もちろん、責任者も例に漏れない。一族で固めようとするから、いざという時に身代わりとなる者がいなくなってしまうのだ。

「それはようございました」

男の声に喜色が滲んだ。本当にね、と箏言も頷く。今の華国において、重宝されるのは名門の血ではない。

優秀な能力。

ただ、それだけがあればいい。たとえそこに反逆心があったとしても、あの男ならば楽しそうに笑うだけだろうと箏言は思う。なによりも戦と血を好む沸儀は、意識して争乱に持ち込もうとしているように見える。

〝華玉の乱〟にしても、五大夫の件にしても、わざと反逆するように差し向けていた。おそらく、太子博焚の件も……。

「花中書令はどう動くだろうね？　さすがに、なにもせずに手を拱いているわけにもいかないだろうし」

「彼の者がどれほど優秀であれど、我々の存在には気付きますまい」

「まあ、そうだよね」

では、太子博焚ならばどうだろうか。幼き頃から神童と持て囃されたその能力は、こちらの思惑に気付くだろうか。

くすり、と箏言は笑みを漏らした。

「気付かれても楽しそうだけどねぇ。だって、一方的に戦いを仕掛けて勝っても、あまり楽しくないと思わない？」

「何事も結果がすべてでございます」
「私は、その経過も楽しみたいんだよ」
「そう思われるのは、主くらいでしょう」
男の苦笑する気配。
沸儀に触発されたのだろうか、と箏言も自嘲した。何事もなく大事が成就されれば、一族の復興は叶う。そういう約束だ。
だが、同時に、多少の波乱があってもいいとも思う。地に身を潜め、機を窺っていた期間が長かったせいか、刺激に飢えているのかもしれない。
「でも、主上について行けば、色々と楽しめそうだからいいか」
目を細め、蛇が獲物を狙うように、箏言は微笑んだのだった。



房に焚かれた麝香の、むせ返るような芳香。

広い房内の奥には、御簾が下ろされた一画がある。正面から中の様子を窺い知ることはできない。辛うじて人影が動く気配が感じられる程度だ。

ぴしゃん、と水が弾かれるような音が響く。

しばらくして、御簾の脇から十歳ほどの少女が姿を見せた。

真っ白な上衣と、朱色の腰布。上と同じ色の下衣は、足許を隠すほどに長い。細工品のように緻密に編みあげられた髪には、金色の小菊を模った簪が幾本も挿されていた。

「商売は軌道に乗り、ますます繁盛するだろう。しかし、水難の卦が出ておる。水路ではなく陸路を、品物の中に水に関係するものがあれば、しばらくは取り扱いを避けた方がよい――とのことです」

それを聞いた商人風の男は、機嫌のよい笑い声をあげた。傍に侍る妓女が、さらに男を持ち上げるような甘い台詞を囁きかける。

すっかりいい気分になった男が、妓女と共に退出するのを見届けた少女――春蘭は、安堵するように溜息をついた。

「……ようやく終わったか」

肩から力を抜くと同時に、男が出て行った場所とは違う扉が開き、満面の笑みを浮かべた蟬英が室内に入ってきた。

「ご苦労様、春蘭。今日もよかったよ」

「そうか」

「ただ、最後は余計だったね。あんまり客の商売に口を出すもんじゃないよ」

「わかっている。だが、水難の卦は規模は小さくとも、人命にかかわるものであった。おそらく、彼の者の身内の誰かが死ぬだろう。そうなれば長い間、喪に服さねばならぬ。蟬英も常連客が減るのは困るだろう？」

「ふん。言うようになったね」

春蘭が占師として黄海楼に勤めはじめてから、五日が経った。

蟬英が提案したのは、御簾越しに占を行い、占師の正体を秘密にするということだった。春蘭の幼い外見では支障があるためだ。

身代わりを立てるのではなく、あくまでも謎の占師としたのは、その方が人々の興味を引き易いと蟬英が踏んだからだ。

しかも、占ってもらえるのは常連の客のみとした。よく当たると噂が広まれば、それを目当てに常連客が増えるという算段だ。

春蘭は、占師秋菊の占い結果を客に伝える役を担っている。実際のところは、自分で占った結果をそのまま伝えているのだが。

「私はあくまでも助言をしただけだ。あの男が本気にしなければ意味がない」

「いいや、あの客は陸路を選ぶよ。妓女の前では威張ってるけど、根は小心者とみた。不吉な言葉を押してまで水路は選ばないだろうね」

そう言いながら、春蘭を見る蟬英の視線には厳しいものがある。余計なことは言うなと言いたいのだろう。

春蘭もそれはよくわかっているつもりだったが、可能な範囲で真実を告げようと決めていた。それが自分にできる、最大限の妥協だ。

「今日は五人か……まあまあだね。しばらくは冷やかしの客が増えるだろうが、その内、徐々に減らすつもりだ。それまでは疲れるだろうが頑張るんだよ」

「増やすのではなく、減らすのか？」

「ふふふっ。秋菊の値うちを高めるのさ」
「商売のことはよくわからぬが、それで本当に集客に繋がるのか？」
春蘭が首を傾げれば、髪に挿した簪が軽やかな音を立てた。
見掛けは美しいが、実際につけてみるとかなりの重量がある髪飾りに、春蘭の首は痛んだ。妓楼には豪奢な髪型の妓女が多い。みな肩が凝らないのだろうか、と春蘭は疑問に感じていた。
「大門近くの妓楼ならむりだろうね。でも、うちのお得意様はお金持ちが多いんだよ。そういう方たちに限って、なかなか会えない相手っていうのは、とっても魅力的なのさ。それがささいな占い事であったとしても、話の種にはなるからねぇ。一度くらいは、と誰もが思うんだよ」
「そういうものか」
春蘭にはいまいち理解のできない感覚である。
とりあえず、集客に繋がっているのならば、辞めさせられることもないだろう。今は重量感のある頭をなんとかする方が先決だ。頭を押さえながら、春蘭がよたよたと立ち上がった時、御簾の陰から若い妓女が出てきた。
名を樊月儀といい、黄海楼の妓女の中では古株に当たる女性である。年齢は二十代後半。蟬英より少し若い程度だろう。おっとりとした雰囲気の美女である。
蟬英の右腕であり、秋菊の正体を知る一人でもあった。
「黙って座っているのも疲れるわねぇ」
「あたしが暇な時はまた代わってやるよ。あんたばかりだと、誰かに勘付かれるかもしれないからねぇ」
秋菊の存在は、黄海楼でもごく一部の者にしか知られていない。
蟬英と月儀、それに先日春蘭が占った祥琳という少女の三人だけだ。秘密を知る者は、少なければ

少ないほどいい。

「しかし、よく当たるもんだねぇ。陶家の旦那が、また占ってほしいと言ってたよ」

「陶家……ああ、最初に占った者か」

月儀の贔屓筋で、裕福な商家の若旦那風の男だったと記憶している。それと同時に、蟬英にこっ酷く説教されるきっかけになった相手でもあった。

男は月儀に勧められ、ものは試しと思ったのだそうだ。その際に、月儀に代わり秋菊を務めたのは蟬英である。

適当に「これからのことを占ってくれ」と言われ、その曖昧さに困りながらも春蘭はいつものように水神盤に手を翳した。

占の結果は〝一両日中に身内に凶事あり〟。

春蘭は家に帰るようにと勧めた。これには月儀も困惑したが、春蘭は秋菊の言葉だと強調し続けた。その態度がよほど腑に落ちなかったのだろう、終いには男は気分を害して帰ってしまった。

秋菊としての初めての仕事は、蟬英の機嫌を損ねる結果となった。月儀が取りなしてくれなければ、春蘭は妓楼を辞めさせられていたことだろう。

しかし、その翌日。男は恐縮しきった様子で黄海楼を訪ねてきた。

男には、幼い頃から世話になっていた叔父がいたそうだ。実の父のように慕っていた相手だったが、今年に入り体の優れない状態が続いていたのだという。幸いにもよく効く薬が手に入ったことで、誰もがすぐに持ち直すだろうと思っていたらしい。

その叔父が、急死したのだという。

もしも春蘭が帰宅するように勧めなければ、叔父の死に目に立ち会うことはできなかった、と男は涙ながらに語った。

それでも蟬英はよい顔をしなかった。今回は偶々よい方に転んだだけ。次もそうとは限らない、と。約束を盾に取られれば、春蘭は諾々と従うしかない。以降、蟬英には一度でも約束を破れば即日解雇を言

い渡されている。
「陶家の若旦那は金払いがいいからねぇ」
「でも、蟬英姐さん。秋菊には幾つか予約が入ってるんだろ？」
それほどの人数ではないが、秋菊に興味を持つ客の予約を受けていた。その順番は蟬英が調整している。
上客にはよい顔をしておきたいが、それで他の常連客から苦情がきても困る。その匙加減は微妙だ。
「ちょっと仕切ってみるよ」
「繁盛するのも大変だねぇ」
くすくす、と月儀は婀娜っぽい仕草で笑い声を漏らした。
「春蘭。帰るんだったら、俥を呼んでやるよ」
はじめは荷馬車で通っていたのだが、春蘭が予想以上に使えると思ったのか、蟬英は送迎用に俥を出してくれるようになったのだ。
行きはよいが、帰りは終刻の鐘が鳴らされる頃になる場合もあり、龍神大路に向かう荷馬車を見つけるのは難しい。春蘭はその申し出をありがたく受けていた。
ちなみに、春蘭はあくまでも秋菊の付き人として、黄海楼で働く者たちとは別扱いで、仕事が終わればすぐ帰ってよいことになっている。
客が秋菊に占を所望するのは、夕刻から夜へと移り変わる間だけ。それ以降は、馴染みの妓女が客の無聊を慰める。
「いや、今日はこれから祥琳の琴を聴く約束になっている。客の前で緊張しないために練習するそうだ」
「春蘭と客は違うだろうけどねぇ」
あがり性にも困ったもんだよ、と蟬英は笑った。
「どうして祥琳は緊張してしまうのだろうな？」
「人見知りが激しいってのが原因なんだろうけど……才能はあるが、妓女には向いてない子だよ。春蘭のように、何事にも動じない図太さがあればいい

んだけどねぇ」

「分けてやれるものならばよいのだがな」

これぱかりは、祥琳が努力する以外にはない。そう思って蟬英を見れば、「皮肉も通じないのかい」と嘆息が返ってきた。

「とにかく、俥はまだいらぬ。ああ、でもその前に、この頭をなんとかしてもらえぬか？」

「気に入らなかったのかい？」

「好き嫌いの前に、頭が重くて倒れそうなのだ。これでは、真っ直ぐに歩くのも難しいぞ」

「なんだい、こんな程度で音をあげるんじゃないよ」

「そうだよ。それだって、細い首が折れないように軽い物を選んだんだから」

蟬英と月儀の二人から交互に告げられ、春蘭は唇を引き攣らせた。これで軽いというなら、妓女たちは芸の腕を磨く以前に、首の筋肉を鍛えなければならないのだろうか。

自分は妓女ではないし、首を鍛えている暇もない。これから髪飾りの類は、もっと軽い物にしてもらえないだろうか、と春蘭は本気で頼んだのだった。

薄暗い室内に、涼やかな琴の音が響き渡る。

真剣な眼差しで琴を爪弾く祥琳を、春蘭は少し離れた場所から眺めていた。

二人がいるのは、楼閣の西側の奥まった房で、妓女見習いの少女たちが休憩するところなのだそうだ。一人前の妓女になると、はじめに四人部屋が宛がわれ、固定客がつくようになれば二人部屋に、客数が上がれば一人部屋へと移動できるのだという。

紡がれる音は実に優雅である。しかし、視界に映る楽人の姿があまりにも必死で、見ている春蘭は落ち着かない。蟬英が指摘していたのも頷ける気がした。

曲が佳境に差し掛かり、祥琳の気迫も並々ならぬ

ものになる。そして、最後まで弾き切った祥琳は、安堵したような笑みを浮かべて春蘭に向き直った。
「ど、どうだった？」
「音はよい。ただ、もう少し優雅に弾けぬか？」
「あう……」
落胆するように肩を落とした祥琳は、縋るような眼差しを春蘭に向けた。
「ねえ、春蘭。どうすればいいと思う……？」
「私には楽器の素養はないからのう。笑いながら弾いてみるというのはどうだ？」
「それは、もう試し済みなの。でも、あまりにも笑顔がぎこちなくて……だめだって……むしろ、笑わない方がよかったって……」
妓女は、ただ客の相手をするだけでは務まらないのだそうだ。
特に黄海楼のような高級妓楼の場合、妓女には一流の才が求められるらしい。楽器をはじめ、舞、詩文の創作、客との会話にも機知に富んだ受け答えが求められるのだという。
祥琳には琴の才がある。しかし、生真面目な性格が災いし、なかなか本領を発揮できないでいるようだ。確かに、才能はあるが妓女には不向きな性格だな、と春蘭は苦笑した。
「春蘭は占いをする時、緊張したりしないの？」
「慣れてしまったからな」
「じゃあ、昔は？　覚え立ての時は、緊張しなかった？」
「昔、か……」
祥琳の問いに、春蘭は眉を寄せて困惑した。昔と言われても、それはあまりにも遠い。神となる前の記憶は酷く朧げで、はっきりと覚えていることの方が少なかった。
「緊張した覚えはないが……性格の問題もあるとは思うぞ。私は少々図太いらしいからな」
自分に訊くよりも、妓楼の先輩に訊ねた方がよほど参考になるだろう。そう告げれば、すでに粗方聞

き込み済みなのだと、祥琳は溜息をついた。
祥琳は占師、秋菊の秘密を知っていることもあり、妓楼の中ではもっとも親しい相手である。できれば力になってやりたい。
「……そういえば、これはどういう曲なのだ？」
「確か、恋の歌よ。春が訪れたように、愛しいあなたが早く私の許に来るように、っていう内容なの。〝愛しいあなた〟が片想いの相手なら哀歌。両想いの相手なら恋歌。弾き手の解釈次第だって、月儀様がおっしゃっていたわ」
「ふむ。では、それを考えながら弾くとよいかもしれぬ。緊張していることなど忘れてしまうぞ」
祥琳は音を外さないように気負いすぎているせいで、ぎこちなさがより目立っているように思える。別のことに意識を向ければ、少しは緊張も和らぐのではないだろうか。
「でも、間違えてしまわない？」
「幾度も練習している曲なのだろう？　ならば、体が覚えている」
戸惑うように視線を彷徨わせた祥琳だったが、悩んでいてもしかたないと思ったのか、決意したように頷いた。
「わかった。自信がないけど、やってみるね」
一度上手くいけば、それが心の支えになるだろう。春蘭が見守る中、大きく深呼吸した祥琳は琴の弦に手をかけた。
室内の空気がぴんと張り詰める。
祥琳のほっそりとした指先が、弦を弾く度に音が生まれる。
先ほどとは違い、脳裏で曲の内容を追っているせいか、今まであった硬さが薄れているようだ。流れる指の動きは、束縛から解放されたかのように生き生きと動き、弦上を自由に跳ね回っている。
その指先から複雑に紡がれる音には軽やかさがあった。心が浮き立つようで、でも、少しだけ寂しげで。

弾き手の意識が違えば、同じ曲でも、こうも変わるものなのかと春蘭は感心する思いで祥琳を見詰めた。

演奏を終えると、額に汗を滲ませた祥琳が顔をあげた。緊張した面持ちの少女に向かって、春蘭は笑みを浮かべる。

「よかったぞ」

「ほ、本当に？」

「ああ」

祥琳が、心の底から安堵したような表情を浮かべた時だった。勢いよく扉が開いたかと思えば、蟬英がずかずかと室内に踏み込んできた。

「それだよ、祥琳！」

「せ、蟬英様？」

「ようやくのりこえられたんだねっ」

ぎゅうぎゅうと抱き締められた祥琳は、豊満な胸に挟まれて顔を真っ赤にしている。ずっと祥琳のことを気にしていたらしい蟬英は、我が事のように喜んでいた。

「ところで、祥琳。ぬしはこの曲をどう解釈して弾いたのだ？」

蟬英の豊満な胸に押し潰されながら、祥琳はたどだどしい口調で告げた。

「恋歌だよ。だって、悲恋で終わるのは悲しいから……ちゃんと伝わった？」

「うむ。幸せな音だった」

「ほ、本当にっ？」

頷けば、祥琳が嬉しそうに破顔した。

「おっと、そうだった。ここに来たのは他でもない、春蘭、あんたに用があったんだよ」

祥琳の頭を撫でながら、蟬英は春蘭を振り返った。

「実は、もう一人占ってほしいんだ。秋菊の営業は終わったんだけど、ちょっと断り辛いお客でねぇ」

「私はかまわぬぞ」

「髪型を整えてる暇はないから服だけ替えようか。派手なやつにすれば、見栄えはなんとかなるだろう

しね」

よほどの上客なのか、珍しく蟬英は焦っているようだ。あまり面倒な相手でなければいいが、と春蘭は心中で呟いた。

服装を替えて秋菊専用の房に入れば、すでに月儀は御簾の奥にある定位置に座っていた。御簾の中に乱入するような不躾な客はいないが、念の為に月儀は白い巾で顔を隠している。

春蘭も並んで座り、水神盤を水が張られた盆の脇に置く。

「のう、月儀。相手はどのような客なのだ？」

「いつも相手をするのは蟬英姐さんだから、私も知らないわ。でも、それなりの身分を持つ人じゃないかしら」

曖昧に言葉を濁す月儀に、春蘭は「そうか」と返した。

楼主である蟬英が応対するのだから、月儀が言うように相応の身分を持つ人物なのだろう。そうでなければ、いくら常連客でも、このような突然の申し出は断ったはずだ。できうる限り客の要望には応えるが、蟬英は決まりごとをそう簡単に曲げたりはしない。

「まあ、なにを占うのかっていう点については、いくら相手が上客だからといって、蟬英姐さんも無茶な話は受けないだろうし。春蘭はいつものように気楽にしていればいいわよ」

春蘭にも制約があるように、客に対しても幾つかの決まり事が設けられている。

あくまでも、占を行うのは本人の身辺のみ。他者にかんする占は行わない。官吏の場合、政務に関係する占も不可――。

揉め事を回避する意味合いと、春蘭の占師としての腕を政治や金儲けに利用させないための牽制である。それにここはあくまでも妓楼。占屋ではない。

秋菊の名ばかりが、一人歩きしてもらっても困るというわけだ。

しばらくすると回廊を渡る足音がして、房の扉が開けられた。

「――どうぞこちらへ」

蟬英の声だ。

衣擦れの音がして、客が御簾の前に座る気配がする。客から御簾の中は見えないが、春蘭の側からはおおよそ動きなどはわかるようになっている。

「むりを言ったのではないかい？」

「いいえ。そんなことございませんわ」

蟬英の態度も、客に対するものへと変わっている。声音も優雅で、物腰も格段に柔らかい。はじめてそれを目にした時は、別人かと驚いたほどだ。当然のこととはいえ、思わず感心してしまった春蘭である。

「陶家の若旦那にね、ぜひにもと勧められて。どうしても興味を引かれてしまったんだよ」

「あら、あとで陶の若旦那にお礼を言わなければなりませんねぇ。最近、とんと顔をお見せにならないから、ついにいい人でもできたのかと残念に思っていたんですよ？」

「いい人がいたにはいたんだが、残念なことに振られてしまってね」

「ずいぶんと、人を見る目がないご令嬢もいたものですね。きっと、今頃後悔なさってますよ」

二人の会話に耳を澄ませていた春蘭であったが、どこかで聞き覚えがある客の声に引っ掛かった。

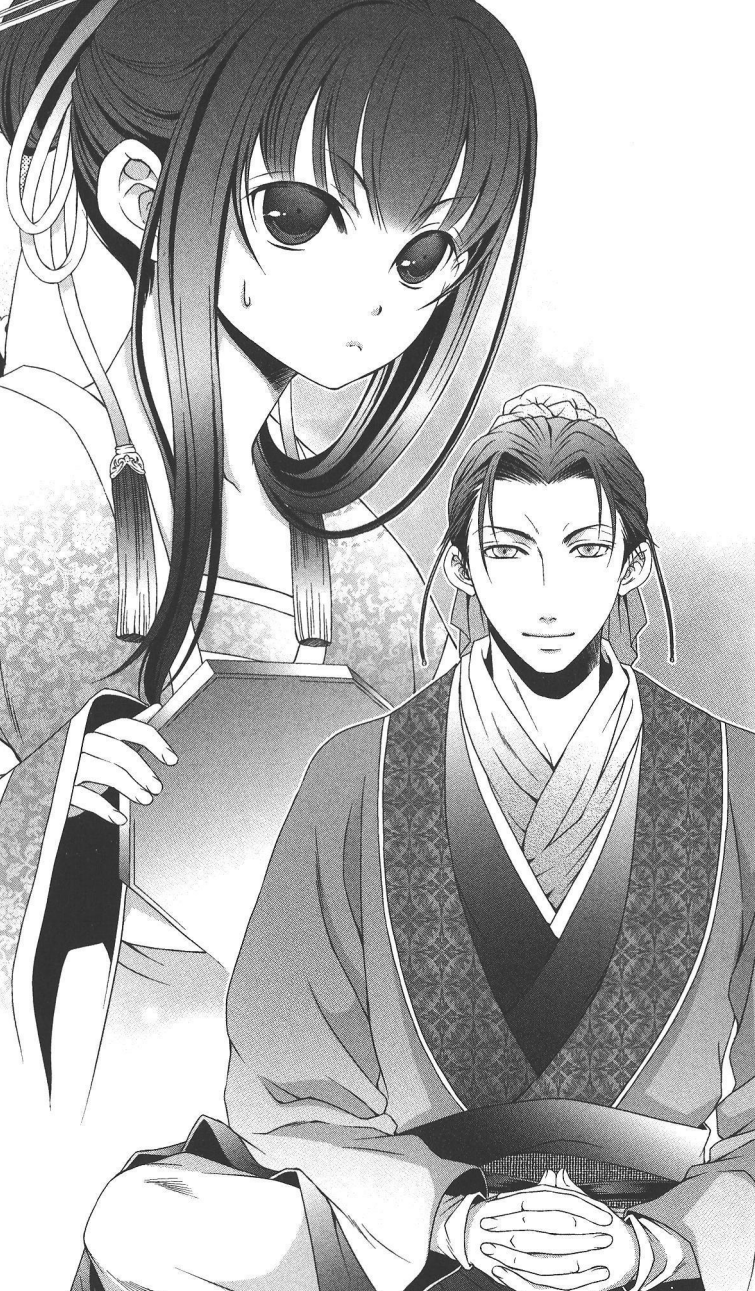
はて、どこで聞いたのだろうか、としきりに首を傾げていると、その様子に気付いた月儀が巾を捲って問うような眼差しを向けてきた。

だが、勝手に喋るわけにもいかない。春蘭は小さく首を振って見せた。

「では、なにを占ってもらおうかな。いざとなると迷ってしまうもんだね」

低くもなく高くもなく、耳にちょうどいい声音。自分はいったいどこで耳にしたのだろうか、と悩む

春蘭に、蟬英が答えをくれた。
「翰栄様の、未来のお相手なんていかがでしょうか？」
「かっ……！」
反射的に口を覆ったおかげで、春蘭の驚きは二人に届かなかったようだ。
呂翰栄。
以前、春蘭が怪我をした際、手当を施してくれた青年だ。親切ではあるのだが、突拍子もない言動の印象が強く、春蘭の記憶には変人として刻まれていた。
茶房の奥に間借りしていると言っていた翰栄が、なぜ黄海楼の上客なのか。あまりにも突飛なことに、春蘭は二の句が継げなかった。
「それはいい。でも、悲しい卦が出たら慰めてくれるかい？」
「私にとっては、そちらの方が喜ばしいのですけどねぇ」
甘い毒が含まれたような台詞に、翰栄が困ったように笑う声が聞こえた。
それを聞きながら、さてどうすべきか、と春蘭は頭を悩ませた。おそらく翰栄は春蘭の顔を覚えているだろう。春蘭は手当の礼にと翰栄のことを占っているのだから。
ここで顔を見せれば、秋菊の正体が春蘭だと知られてしまう。悪い人間には見えないが、かといって信頼に値する相手とも言えない。相談しようにも、蟬英は御簾の向こうだ。
――こうなったら、多少不審がられようともしかたない。
素早く決断した春蘭は、月儀の耳元で囁いた。
「知り合いだ」
「……」
「ぬしは、声を知られているか？」
それに、月儀は首を左右に振る。顔は知られているが声まではといったところか。ならば、月儀が秋



菊の振りをして喋っても支障はない。
「ならば、私の言う通りに話してほしい」
月儀が頷いたと同時に、翰栄の声が響く。
「では、私の将来の相手を占ってもらおうかな」
月儀と視線を交わし、春蘭は水神盤を水に浮かべた。
そういえば〝呂翰栄〟という名は偽名だった。思い出すが、それを指摘できるはずもなく、春蘭はできるだけ相手の相貌を思い出しながら水神盤に手を翳した。
水神盤で個人のことを占う場合、その人物の本名が必要となる。名がなくとも占うことは可能だが、曖昧な結果しか得られないのだ。
――確か、翰栄はこれといった特徴のない、平凡な顔だったような……。
どうしても初対面の相手に――しかも、外見年齢十歳の少女に――結婚を申し込む変人という認識が強く、集中に欠けてしまったのはしかたのないことだろう。
それでも、卦を得た春蘭は、水神盤の上から手を退けた。
「結婚はできる、と伝えてくれ」
「……結婚はできるでしょう」
御簾の向こうで、蟬英らしき影が身動ぎするのがわかった。なぜ、春蘭が出て来ないのか訝しく思ったのだろう。
だが、それに答えることはできない。春蘭は続けて、月儀の耳元で囁いた。
「相手の女性とは、すでに出会っている」
「……お相手の方とは、すでに出会っていらっしゃいます」
「名前に花を表す字を持ち」
「……相手の方のお名前には、花を表す漢字が使われております」
「両親とは死別している」
「……ご両親は亡くなられているようです」

わかるのはここまでだ。
年齢や、どこに住んでいるのかまではっきりとしない。ただ、それは酷く不安定な未来であり、必ずそうなるという保証はできなかった。
以前、翰栄の未来を占った時と同じ結果である。この程度ならば、蟬英も文句を言わないだろう。春蘭は最後に一言付け加えた。
「ただし、確定した未来ではない。結婚する場合は、この女性以外にはないが、そなたの未来は未だ定まっていない」
「……ですが、これは一つの可能性です。結婚するならばこの方以外にはおりませんが、あなた様の未来は、未だ定まってはいません」
ちょっと余計なことを言いすぎただろうか、と春蘭は一瞬後悔したが、問題があるならば月儀が無言を貫くはずである。
「終わりだ」
「……以上でございます」
これで、あとは蟬英が上手く対応してくれるだろう。緊張からの解放に、春蘭は内心で安堵の溜息をついた。
しかし、ここで予想外の事態が起こった。
変人は、やはり変人だったのである。
蟬英が制止する間もなかったのだろう。あっという間に撥ね上げられた御簾と、突然、目前に現れた見覚えのある顔に春蘭は唖然とした。
そして、翰栄は春蘭に向かって悪びれた様子もなく、
「やっぱり、春蘭だった」
と、嬉しげに告げたのだった。
これに慌てたのは蟬英である。
春蘭と同様に、呆然としていた蟬英だったが、すぐに我に返り、硬い声で翰栄に告げた。
「翰栄様。無作法にも程があります」
「ごめんね。でも、確かめたくて」
謝罪する気があるのか、と問いたくなるような悪

びれない態度に、春蘭の視界の端に映る蟬英が唇をぴくりと震わせた。

確かに、秋菊の正体が春蘭だと確認するならば今しかない。だが、やっていいことと悪いことがある。位の高い妓楼では、客にもある程度の品位が求められるのだから。

「翰栄。そういう問題ではない」

春蘭は咎めるような声をあげた。蟬英にとって翰栄は大切な顧客であるが、春蘭にとってはかなり変わった知り合いというだけである。遠慮する必要はない。

「私は君の家を知らないから。ここで確かめる必要があったんだよ」

「だからといって、御簾を捲るな。普通に訊ねればいいだろう」

「そうだね。失念してたよ」

「ぬしは、もう少し反省の色を見せた方がいいぞ」

憤然として告げれば、蟬英が慌てたような声をあげた。

「春蘭。翰栄様に失礼だよっ」

失礼なのはこの男の方なのだが、蟬英にしてみれば上客の一人。春蘭を咎める視線には、困惑と焦りが滲んでいるようだった。

「ああ、蟬英。気にしなくてもいいよ。春蘭と私は深い仲だから」

「どこをどう勘違いすれば、そうなるのだ。私はぬしと深い仲になった覚えなどないぞ」

「結婚を申し込んだじゃないか」

「断ったはずだが？」

「私はしぶといよ？」

「面倒な男だな」

なぜか翰栄は強気の姿勢を崩そうとはしない。むしろ、きらきらと輝く目で春蘭を見詰めてくる。

「それでもやはり、春蘭は私の運命の相手なんだよ」

「どうして、そうなるのだ」

「だって、君がそう占ったじゃないか」
すでに出会っている女性の中で、花を表す文字を名前に持ち、両親とはすでに死別している者――確かに、春蘭が該当するといえばそうだ。
しかし、どう転んでも自分が翰栄の嫁になるとは思えない。
「まだ私だと決まったわけではない。他にいるのだろう」
「心当たりは春蘭しかいないんだけどねぇ」
「ぬしが憶えていないだけかもしれぬ。よく思い出すがよい」
「君も大概強情だよね。私ほどお買い得な相手もいないと思うんだけどねぇ」
「自分で言っているところがいけ好かぬ」
「えー」
翰栄が不満げな声をあげるが、事実なのだからどうしようもない。嫁ぐ気はまったくないが、そもそも偽名を使っているような胡散臭い相手とは知己になるのもごめんである。
やれやれ、と嘆息すれば、視界の端に頭を抱えている蟬英の姿が映った。

結局、翰栄は秋菊の正体について、「遊びに来た時、嫌がらずに会ってくれるなら黙っていてもいいよ」という交換条件で、口を噤んでくれることとなった。結婚してくれるなら、と言われなかっただけよかったと思うしかない。
謎ばかりの翰栄に対し、若干の苦手意識を持っている春蘭だったが、せっかく得た雇用先をそんなことで失うわけにはいかない。渋々と了承した春蘭は、この日は終刻の鐘間近ということで、残念がる翰栄に惜しまれながら鄭家へと帰った。
蟬英は、翰栄が常連客のままでいるならば、春蘭の態度にも目を瞑ると決めた。言い換えれば、諦めたのだろう。馴染みの客である翰栄の性格を、熟知

しているとも言えた。

鄭家に戻った春蘭は、ここ最近の日課となっている占を行う。

——鄭玄楽を捕らえるために、最善とされる行動は。

結果は動かない。

水神盤に現れた文様は、玄楽の生家、つまり鄭家の屋敷を指し示している。

いったい、いつまでここにいればいいのか。

じわりじわりと、苛立ちが春蘭の心を蝕む。

己の占に対し、春蘭は全幅の信頼をおいている。自分の腕を信じられなくなってしまったら、占師としてお終いだ。

だが、一つだけどうしても占えないことがある。

——無事に、真名を取り戻せるかどうか。

もしも、占の結果が、春蘭にとって残酷なものだったとしたら。どう足掻こうとも、未来が変えられないと出てしまったら。

自分は、どうするのだろう。

どうすればいいのだろう。

直視する勇気がなく、どうしても己の未来だけは占うことができなかった。

占師として、もっとも占い難い相手は自身である。

筮竹にかんしては知らないが、水神盤は占い手の感情の起伏に影響を受ける占具だ。占いの際は、心を〝無〟に近付けなければならない。

誰しもが己の未来に不安を抱いている。

それは占師も例外ではない。もしも不吉な卦が出てしまったら——平静な気持ちになれる方がおかしいのだ。

今後に不安を抱えながら占っても、結果は曖昧なものにしかならないだろう。ならば、占うだけ無駄だ。

盆に浮かぶ水神盤を見詰めながら、春蘭は顔を歪めた。

雨期は近い。



ざくざく、と土を踏み締める複数の足音が響く。
それが反響するように聞こえるのは、四方を深い森に囲まれているせいだろう。
青々と茂る木の葉は視界を狭め、うねるように突き出た根に足を取られる。まるで侵入者を頑なに拒んでいるような印象だった。
山奥に足を踏み入れれば踏み入れるほど、人は異質な存在なのだと痛感させられる。ここは〝人〟が生きていける場所ではない。わかってはいるのだが、それでも進まねばならない苦痛に、仲望は幾度目かわからぬ溜息をついた。

仲望と龍乎の一行が華安を発ってから、今日で六日が経過している。予定では、すでに華安に戻っているはずだ。
しかし、予期せぬ問題で未だ森に留まっている。一日を雨で棒に振り、次の日も泥濘に悪戦苦闘し、調査に大幅な遅れが出てしまったのだ。
仲望たちは人足が宿舎として使用していた小屋を拠点とし、採石場へと続く道を丹念に調べていた。ただの集団脱走なのか、それともなにか事件に巻き込まれたのか。未だに、判断できる材料は見つかっていない。
「集団脱走にしては、おかしな点があるんですよねえ」
仲望に肩を貸しながら斜面を登っていた文重が、ぽつりと呟く。
先ほどから、なんでもいいから手掛かりらしきものが見つかればさっさと帰れるのに、と文重はぐちぐちと文句を言っていた。適当に相槌を打っていた

仲望は、今度はなんだと胡乱な眼差しを向ける。
現在、仲望たちは採石場がある場所から、さらに奥へと進んでいた。
獣道と呼ぶに相応しい斜面を、周囲に気を配りつつ歩いている最中である。今日の捜索でなにも見つからなければ、手ぶらでも華安に戻ると子慮は朝食の時に宣言していた。
「脱走するなら、食糧を根こそぎ持っていくもんじゃないですか。荷馬車だってありますし、置いてくっていうのは考えられないですよ」
「まあ、確かに」
「それに、監視していた役人の遺体もありませんでしたし。人足たちに逃げられて、罰せられるのを恐れた役人たちも逃亡したとしても、少しくらいは争ったと思うんですよね。だったら、死体の一つや二つ転がっていてもおかしくないはずです」
文重が指摘するように、人足たちの宿舎や役人らが寝泊まりしていた場所には、死体どころか争った形跡すらもなかった。もっとも、足跡などは残されていたところで、雨に流されてしまっただろうが。
「こんな山奥だ。獣が食ったんじゃないか？」
「骨は残ります」
「じゃあ、妖」
詳しくは知らないが、人肉を好む妖もいると聞く。血の匂いに誘われて、山塀から降りてくることも考えられた。
「そりゃ、こんな山奥ですから、妖くらい出るでしょうよ。遺体が転がってたら、喜んでもってっちゃうでしょうよ」
どうやら、なかなか進まない調査に文重の苛立ちも限界のようだ。
今日で調査は打ち切られ、仲望も解放されるわけだが、龍乎である彼らにはそのあとが待っている。手ぶらで戻った場合、散々な嫌味を投げつけられることだろう。
人足でも、役人でもいい。生き証人などと贅沢は

言わない。せめて死因がはっきりしている遺体の一つもあれば、と文重は嘆く。

そんな青年には悪いが、仲望は何事もないままに一刻も早く今日という日が終わってくれたらいいと、心の底から祈っていた。

不意に、前方を行く一団にざわめきが起こった。それに気付いた文重は急に顔を輝かせ、仲望を引き摺るようにして速度をあげた。

むしろ、置いて行ってくれ。転ばないように必死で木の根を避けていると、ようやく先頭の集団に追い着くことができた。

「見てきます」と言って、文重は同僚らの間に入って行く。荒い息を整えつつ木に寄り掛かった仲望は、人垣の隙間から見える光景に目を眇めた。

地面に複数の穴がある。

遺体が見つかったのだろうか、と首を傾げていると、「ただの穴じゃねぇか！」という、子慮の叫び声が響いた。どうやら、中にはなにもないらしい。

しかし、人が一人入れるくらいの穴が集まっているのは異様だった。

いったい誰が、なんのために掘ったのだろうか。

しばらく、押し問答する子慮と文重の声が続き、疲労からくる眠気に仲望が欠伸を噛み殺していると、当の二人が揃ってこちらへとやってきた。

「……で？」

説明を求めるように文重を見れば、彼が口を開くよりも先に子慮が割り入ってきた。

「穴だ」

「見ればわかる」

「人に訊いといて、その言い草はなんだ！」

誰もお前には訊いていない、と仲望は頭を抱えた。なおも言い募ろうとする子慮を、お返しとばかりに今度は文重が押し退けた。

「隊長は説明が下手糞なんですから、ちょっと黙っててください！」

「俺は下手糞じゃねえ！」

「はいはい。説明は俺がしますんで、辺りを見回ってきてくださいよ。なんか見つかるかもしれませんよ」

背中を押された子慮は、ぶつぶつと文句を言いながら部下たちの許へと歩いて行った。相変わらず上司の扱いに手慣れている文重に、仲望は感心した目を向ける。他の者では、こうはいかないだろう。

「じゃあ、簡単に説明しますね。地面に掘られた穴は、全部で七ヶ所。捜せば、もっとあるかもしれません。すべて掘り返された跡がありました」

「……掘り返されたってことは、中になにかが埋まってたのか？」

「でしょうね。自然にできたものだとは考えられません。先日の雨でだいぶ埋まったみたいですが、比較的新しいものだと思います。土質が軟らかかったら、跡は残っていなかったかもしれませんね」

「それで？」

不審な穴が見つかった。

だが、それだけでは失踪した者たちを捜す手掛かりにはならない。仲望は木に片手をつきながら、結局なにも進展しなかったことに嘆息した。しかし、文重は違ったようで、先ほどの苛立ちを忘れたように生き生きとした表情を浮かべている。

「こんな場所に、まるで隠すようにあるわけですから、なにか意味があるかもしれません。とりあえず、この周辺を手分けして調べるつもりです。仲望さんはここで休んでいてください。なにかわかり次第、連絡しますから」

「わかった」

調査に加わる文重を眺めながら、仲望はそのまま木の根元に座り込んだ。

ここ数日、ずっと山道を歩き通しだったため、足腰が悲鳴をあげている。体力が落ちたという自覚はあったが、まさかここまでとは、と仲望は自嘲的な笑みを浮かべた。

禁軍に所属していた時は、毎日のように厳しい鍛

錬を己に課していた。鍛錬のしすぎでは、と啓璋たちに心配されたほどであった。

――追い掛けた背中が、あまりにも大きかったからだ。

仲望が目標にしていた人物は、実力、名声ともに群を抜いていた。唯一、彼の出自が妾腹ということで、陰口を叩く者はいたが、真っ向から対立しようと思う者は一人もいなかっただろう。

誇りに思うと同時に、嫉んだこともあった。

半分は血が繋がっているはずなのに、なぜここまで違うのか、と。どれほど努力を重ねても、遥か前を行く背に追いつくことはなかった。

体格的に槍や剣は不利だと思い、弓術の腕を磨いた。弓にかんしては禁軍一という称号を得たが、それでも達成感はなかったように思う。

常に憔悴を感じていた。

どうすれば、あの人に追いつくことができるだろうか、と。追い掛けて、追い掛けて、そして、突然、その背を見失った。

四年前の戦で、兵士として致命的な怪我を負った時、絶望するよりも安堵する気持ちの方が強かった。ああ、これで自分はあの背を追い続けなくてもいいのだと、解放されたとすら思えた。

怪我のため、後方へ送られた仲望の許に悲報が届いたのは、しばらく経ってのことだ。

はじめは信じられなかった。

そんな馬鹿な話はない、と。一騎当千とまで言われたあの人が、こんな辺境の戦で命を落とすわけがない、と。

だが、もたらされる情報が示すのは、〝死〟の一文字。遺体が見つからないことにわずかな望みをかけていたが、時が経つにつれ諦めの気持ちが強まった。

あの人は死んだのだと。

心のどこかで疑いながらも、ずっとそう思い続けていた。

――春蘭が、現れるまでは。

自らを守り神だと名乗る少女は、兄に真名を奪われたのだと訴えた。半信半疑というよりは、信じる方が馬鹿馬鹿しいような話を、仲望は肯定もしなかったが否定もしなかった。

心のどこかで、やはり生きていたのだと複雑な気持ちになったのは確かだ。

ただ、もうあの人のことで悩みたくはない。なにも考えたくはない。だから、春蘭の問いにも頑なに答えなかった。ひたすらに拒み続けた。

しかし、華安に戻ったらそうはいかないだろう。大切なものを取り戻そうと奮闘する少女を、邪険に扱い続けるのは困難だ。

「いっそ、忘れてしまえたら楽なのだろうな……」

木々の隙間から差し込む太陽の光を眺めながら、仲望は誰にともなく呟いた。

『おい、仲望。最近眠れてないんじゃないのか？』

心配そうな声が耳朶に響く。

振り向けば、十四、五歳の少年が立っていた。華国では異質な真っ赤な髪色に、それよりは幾分色褪せた赤銅色の瞳。一目で異国の血が混じっているとわかる外見は、彼の有能さの前には不利な条件にならなかった。

こちらを見る視線には、案じるような色が滲んでいる。いつもそうだ。少しでも無茶なことをしようものなら、この人にはすぐ気付かれてしまう。それが嬉しい半面、歯痒くもあった。

『勉学に励むのもいいが、体を壊したら元も子もないぞ』

わかっている、と仲望は表向き従順に答えた。逆らったところで、上手く言い包められてしまうのがおちだからだ。

しかし、相手はそれを見透かしたかのように苦笑する。

『馬鹿だなぁ。お前はお前のやりたいようにやればいいのに。周りの声なんて気にすんなよ。どうせ上辺しか見ていない奴らなんだから』

それは自身の経験からくる言葉なのだろう。

自分よりもこの人の方が、何倍も辛い思いをしてきたのだ。陰口などではなく、面と向かって罵倒されたこともあるかもしれない。

周囲の声を気にしないとは言わないが、それに意識を奪われているわけではなかった。少しでもこの人に近付きたくて、認められたくて、精一杯努力しているだけなのだ。

『それとも、親父にまたなんか言われたのか？』

途端に、声が低くなる。

唯一、この人が苦手としている相手。別に憎み合っているわけではない。父親は彼なりにこの人の才能を認めているのだ。ただ、この人があまりにも無欲だったせいで、親子仲はあまりよいものとは言えなくなってしまったのだが。

なにも、と答えれば彼は眉をひそめた。もしかして、自分が嘘をついていると思ったのだろうか。でも、それが真実だ。父上にはなにも言われてはいない。

『本当に？』

逆だったらよかったのに、と本音を漏らしていた使用人たちの会話を偶然耳にしてしまっただけなのだ。次男が異国の血を引く子供で、長男が正妻の子だったならば、後継ぎ問題だってこじれることはなかった。

〝――様〟は、大手を振って後継ぎの座に収まったのに、と。

『もしなにか言われても、気にすんじゃねぇぞ』

わかっている。

気にしたって意味がない。だから、あなたも気にしないでほしい。嬉しいと思うのと同時に、どうしても出来損ないの自分が哀れに思えるから――

はっとして仲望は顔をあげた。いつの間にかうたた寝をしてしまったようだ。

「ふう……」

乱れた感情を静めるように、仲望は肩から力を抜いた。なにか懐かしい夢を見ていた気がしたが、すでに霞のように曖昧になっている。ただ、無性にやるせなさだけが残るような夢だった。

しかし、自分の屋敷ならいざ知らず、いつ獣が襲ってくるかわからない山奥でうとうとするなど自殺行為だ。

疲れもあるだろうが、あまりに平和な生活に慣れ切っていたようだ。やれやれ、と溜息をついて周囲を見回した時、仲望は周りに誰もいなくなっていることに気付いた。

深い霧も立ち込めている。

この五日、早朝に霧が出ることはあったが、夕霧ははじめてのことである。こんなに急に出るものだろうか、と仲望は首を傾げた。

それに、無謀を絵に描いたような子慮ならいざ知らず、何事にも慎重な対応を心掛ける文重が、視界を奪うほどの霧にもかかわらず調査を続行するとは思えない。霧が出てきた時点で、小屋に戻るように提案するはずだ。周囲はしんと静まり返っており、子慮たちの気配を感じることはできなかった。

迷ってしまったのだろうか、と考え、仲望は即座にそれを否定した。一人や二人ならまだしも、仲望以外の全員が迷うことなどありえない。また、はぐれた者がいたとして、捜索するならば仲望にもその旨を伝えるはずだ。

なにかが起こっている。

緊張から、額にじっとりとした汗が滲んだ。いつまでもこの場に留まっているわけにはいかない。採石場に戻り、そこに誰の姿もなければ小屋に戻った方がいいだろう。

夜になれば辺りは極端に冷える。このままこの場

所にいては、下手をすれば凍死する恐れもあった。それに、各自、小屋を目指す可能性もある。

「子慮！　文重！　誰かいないのか！」

時折、仲望は立ち止まっては声を張り上げた。霧のせいで視界が利かないため、傍に誰かがいてもわからないこともあるからだ。

だが、今のところ反応はない。

幸い、採石場までは目印となるように、周囲の木々に印をつけ、生い茂る草を踏み固めるように進んできたため、霧に視界を奪われたとしても迷う心配はない。

肩を貸してくれた文重がいないため、歩みは遅くなってしまうが、今のところなにも問題はなかった。

「くそっ、なんなんだこの霧はっ」

時が経つにつれ、霧は徐々にその濃さを増している。手を伸ばせば、指先が霞んで見えるほどだ。それでも、仲望は目印があるだけましだった。迷ってしまったのだとすれば、子慮たちには、頼りとするものがなにもない。

「ようやく採石場か……」

見通しの利かない霧に辟易しながらも、仲望はなんとか採石場まで辿り着くことができた。切り出された巨大な石が転がるだけで、がらんとした広場にも深い霧は立ち込めている。

ここから小屋までは、整備された道が続いている。今までのように気を張っていなくても迷うことはないだろう。

念のため、もう一度、子慮たちの名を呼ぶ。反応がないことを確認し、仲望は重い足を引き摺るようにして歩き出した――その時だった。

肌を刺すような殺気に、考えるより先に腰に佩いた細身の剣を抜いていた。得意の弓も持参してはいるが、障害物の多い場所での機動性は剣の方が上だ。両手で構え、周囲を窺う。

くる、と感じた瞬間、仲望は横に跳んだ。

空を切るような音が響き、なにかが仲望のすぐ脇

を掠めた。素早く剣で横薙ぎにするが、手応えはない。この霧の中でも、相手は仲望の位置を把握しているようだ。

しんと静まり返る中、確かに霧の中でなにかが蠢く。額の汗が頬を伝い、顎から流れ落ちる。仲望は微動だにせず、次の攻撃に備えた。

再び、なにかが迫る気配を感じ、剣を真正面に構えた。しかし、はっとした時には、強い力に剣を奪い去られていた。一瞬の出来事に、仲望は愕然とする。

だが、茫然としたままでは、どうぞ狙ってくださいといっているようなものだ。背負っていた弓を手に取り、矢を番える。その間に、仲望は少しずつ移動を開始した。小屋まで行けば、乗ってきた馬がいる。

周囲に気を配りながら、慎重に歩みを進める。霧に隠れるようにしてこちらを狙っているものは、いったいなんなのか。

子慮たちも、こいつに襲われたのだろうか、と嫌な考えが仲望の脳裏をよぎる。もしかしたら、失踪した人足や、役人たちも……。

唇を噛み締め、斜面を下ろうとした時だった。足許に転がるなにかに躓き、仲望は体の均衡を崩してしまった。とっさに受け身を取るが、地面に叩きつけられた右肩に衝撃が走る。

「くっ……！」

転んだ拍子に弓も手放してしまい、思わず舌打ちする。

いったい、なにに足を取られたのだと見てみれば、そこには見覚えのある男が倒れていた。名前は忘れたが、今回の調査に同行していた龍乎の兵士だ。どうやら、逸れたあと、ここまで逃げてきたところを何者かに襲われたらしい。

首筋に手を当てれば、微かな脈拍が指先から伝わってくる。外傷も見当たらない。気を失っているだけのようだ。

「おい、起きろ」

できるだけ声量を落とし、男の体を揺すった。しかし、男はぴくりとも動かない。死体ならば躊躇なく置いていくことができるが、まだ息のある相手をこのままにしておくことはできない。せめて、小屋に運べたら、と思った時だった。

背後に、先ほどの気配。

反射的に振り返れば、そこには三つの赤い光があった。とっさに、倒れている兵を木々が生い茂る斜面に向かって蹴り落とす。上手くすれば助かるだろう。

自分もそれに続こうとしたが、肩に激痛が走った。

「う、ぐぅ……！」

右の肩が燃えるように熱い。

逃げなければと思うが、なぜか手足が痺れて思うように動けない。薄れゆく意識の中で、仲望は家で待つ少年たちや、友、そして、最後に約束を交わした少女のことを思った。

兄のことを話すようにと、こちらの都合などお構いなしに要求したきた少女。春蘭は、きっと怒るだろう。約束したではないか、と可愛らしい顔を歪めて――。

すまない、と口にするより先に、仲望の意識は闇の淵へと落ちたのだった。

仲望が鄭家を出発してから、すでに八日が経つ。心配した啓璋と友寧が龍乎の詰所に問い合わせると、雨のせいで調査が遅れているとの報せがあり、もう少しかかるだろうとのことだった。

主が不在のせいか、少年たちには精彩がない。特に友寧などは、晴れ渡った空を見上げては重苦しい溜息をついていた。

「春蘭、今日は妓楼に行かないのか？」

中庭に面した回廊でぼんやりとしていると、洗濯物を取り込んでいた啓璋が珍しそうに声をかけてき

た。ここ数日は、毎日のように黄海楼へと通っていた春蘭が、昼を回っても屋敷にいることに気付いたらしい。

「うむ。今日は休みなのだそうだ」

今日は黄海楼の一部を貸し切っての宴会が行われるため、〝秋菊〟は休みだと蝉英に言われていた。雇用先が決まったこともあり、以前のように街に繰り出す必要もない。

暇を持て余し、友寧に手伝いを申し出たが、笑顔で断られてしまった。

以前、畑の収穫を手伝った際、作業が楽しくて必要以上の野菜を収穫してしまったことを忘れていないらしい。

それとも、自分で使用した食器を洗おうとして、手を滑らせて割ってしまったことか。仲望の袍を洗濯する際、洗濯板に強く擦りつけすぎて、丸々一着をだめにしてしまったことだろうか。

どちらにせよ、春蘭には家事にかんして役に立たないという烙印が押されていた。

「じゃあさ、龍乎の詰所に行って、旦那様のことを聞いてきてほしいんだ」

珍しい啓璋からの頼み事に、春蘭は二つ返事で頷いた。

「よいぞ」

「あ、でも、友寧には内緒でな。もしも、また日にちが延びるようなことになれば、今以上に落ち込むからさ」

「わかった」

「龍乎の詰所はわかるか？」

「大丈夫だ」

だてに職探しのために龍神大路をうろついてはいない。迷わぬよう、目立つ建物の位置と名称は記憶ずみだ。

「では、行ってくる」

「気をつけるんだぞ。美味いものをやるからって言われても、絶対についてくなよ！」

「ぬしは私をいくつだと思っているのだ……」

過保護な少年に溜息をつき、春蘭は厨房で働いている友寧に見つからないように屋敷を出た。

ここ最近は黄海楼と鄭家を俥で往復する日々が続いたせいで、自分の足で歩くのも久し振りのことである。

龍神大路へと出てからは、なるべく人波に飲まれないように道の隅を歩き、たまに休憩を挟みながら大門を目指す。

いつ通っても、この大路は人波が途切れることを知らない。たまにそれを割るようにして俥が通っていくが、道に溢れる人々のせいで思うように進めなくなっている様を見る。そこまでして俥に乗る価値と、龍神大路を通る必要性があるのだろうかと、首を傾げたくなる光景だ。

そんな人垣の向こう。徐々に姿を現した巨大な門が春蘭の目的地だった。

龍神大路にある龍乎の詰所は、近隣を管轄する三つの隊が共同で使用しているのだそうだ。大人数を抱えるため、建物自体もかなり巨大である。

遠くから外観を眺めることはあっても、直接足を運ぶのは今日がはじめてのことだ。春蘭は、まず表門の脇に立つ門番たちに声をかけてみた。

「すまぬが、中に入ってもよいか？」

餓鬼がなんの用だ、とばかりに睨まれるが、春蘭は気にせずに言葉を続けた。

「先日、龍乎の調査に同行した鄭仲望の身内のものだ。なにか報せが届いていないかと確かめに来た」

「鄭……？　お前、知ってるか？」

「いや、知らねえな」

「ああ、でもどっかの奴が、押しつけられたって嘆いてたな」

「どこの隊だ？」

「さあ……」

困惑する門番たちを見上げながら、啓璋に誰に訊ねればいいのか、ちゃんと聞いてくるべきだったと、今更ながらに痛感する。

だが、主の帰宅を心待ちにしている少年たちのためにも、ここで引き下がるわけにはいかない。

「確か、虎慈軍だったか。その関係の者を呼んできてはくれぬか？」

子慮が隊長を務める部隊の者ならば、仲望のことを知っているだろう。頼む、と重ねて言えば、門番の片方が「まあ、それくらいなら」と、頷く。「ちょっと待ってな」と告げ、奥へ姿を消した。

「嬢ちゃんの身内は、なかなか帰ってこないのか？」

残った方の門番の問い掛けに、春蘭は頷いた。

「予定の日数がすぎても帰って来ぬのだ」

「そりゃ心配だな」

「うむ。せめてなにか報せが届いてないかと、確認しに来たのだ」

人がよいのか、門番は親身になって春蘭の話を聞いてくれる。

しばらくその場で、門番と会話をしながら待ち続けていれば、急に詰所の奥が騒がしくなった。何事かと門から覗けば、複数の人の声と、慌ただしい足音が響き渡る。春蘭が首を傾げていると、その人垣の中に見知った顔を見つけた。

「楊秀！」

なぜ、禁軍の将軍が龍乎の詰所にいるのか。春蘭が駆け寄ると、楊秀は驚いたように双眸を瞠った。周囲にいた大人たちも、ぎょっとしたような視線を春蘭に向ける。

「どうして、ここに？」

困惑しながらも、楊秀は春蘭を持ち上げて片腕に座らせる。それはこちらの台詞なのだが、とりあえず詰所へとやってきた理由を告げた。

「啓璋に頼まれたのだ。子慮たちから、なにか報せが届いているやもしれぬからな」

それは、ほんの一瞬だった。
楊秀の表情が、わずかに強張る。
その違和感に気付けたのは、至近距離にいたせいだろう。何事もなかったかのように取り繕おうとする楊秀に、春蘭は目を眇めた。
「なにかあったのか？」
「いや、なんでもないぞ」
慌てて目を逸らそうとした楊秀の頬を、両手で固定する。問い詰めるように睨めば、その顔には引き攣ったような笑みが張りついていた。
「……ぬしは、嘘が苦手なのだな」
「そ、そんなことはない」
「別にぬしに訊かずとも、虎慈軍の者ならばなにか知っているだろう。そちらに訊くからよい」
少々きつめの口調で告げれば、楊秀は観念するように肩を落とした。
案内されたのは、詰所の一室である。剝き出しの土間に、木の卓と椅子が置かれているだけの殺風景な部屋だ。そしてなぜか、壁には何ヶ所もの補修の痕が残されていた。
外で話すような内容ではないため、楊秀が龍乎の知り合いに場所を貸してくれるよう頼んだのである。
「禁軍と龍乎は犬猿の仲だと聞くが、そうではないのか？」
「例外もある」
龍乎の兵士たちも、相手が将軍という高位にあるにもかかわらず、礼儀を逸しない程度に友好的だ。
「私だけでなく、仲望も似たようなものだぞ」
「そうなのか？」
「私たちの師がな、龍乎の出身だったからな。ここには兄弟弟子がわんさかいる」
なるほど、と春蘭は頷いた。そして、本題とばかりに椅子に座る楊秀を対面から見詰める。
「仲望たちになにがあった？」
むすっとした表情を浮かべていた楊秀だったが、他の者に訊かれるよりはと思ったのだろう。重い口

を開く。
「……報せがあったのだ」
「説明するならはっきりせよ。どうせ、啓璋たちにも伝えねばならぬのだろう？　私はなにを聞かされても取り乱しはせぬぞ」
「いや、少しは取り乱せ」
仲望の嫁なのだから、と楊秀は不満げに顔を顰めた。おかしなところに注文をつける相手である。
「そんなことはどうでもよい。さっさとなにがあったか言わぬか」
「……実はな、仲望たちが消息を絶ったというのだ」
仲望が龍乎に同行した理由を知らない春蘭のために、楊秀は事情を簡単に説明した。
とある山奥にある採石場から、そこで働いていた人足や、役人たちが忽然と姿を消した。その下調べを命ぜられた子慮たちは、山塀に迷い込む危険から身を守るために、地脈を流れる〝気〟を視ることのできる仲望に同行を頼んだのだという。
仲望は、啓璋たちに心配をかけるからと、それを楊秀にしか打ち明けていなかったそうだ。
調査には、往復にかかる日数を含め、だいたい六日ほどだろうと見積もっていた。だが、それは詰所にもたらされた報せにもあったように、雨のせいで大幅に遅れが生じてしまった。それでも、予定より二日ほど遅れて戻ってくるものだと、残された者たちも思っていたそうだ。
しかし、今朝方、詰所にもたらされたのは、調査に同行した龍乎の兵士が一人を除いて全員連絡を取れなくなっているという報せだった。
「その兵士は、瀕死の状態で下山したらしい。そして、意識を失う前に、仲間たちが〝赤い目の化け物〟に襲われたと告げたそうだ」
「赤い目の化け物？」
「妖だろう。たとえ不意を衝かれたとしても、獣相手に手間取る者たちではない」

確かに、山堺が近いともなれば、その可能性は高いだろう。

妖に襲われたとなれば厄介だ。上手く逃げられたとしても、執拗に追われ続けるかもしれない。中には、人間の子供ほどの知能をもち、人を甚振ることに快感を覚えるものもいる。目をつけられたら厄介としか言いようがない。

なによりも、山は妖の縄張りだ。さらに山堺が近いともなれば、一度迷い込んだらお終いである。全員無事に生きているかも怪しいだろう。

そこに仲望が含まれていることに気付き、春蘭は眉を寄せた。

「それで、ぬしはどうするつもりだ？」

「むろん、捜しに行く。龍乎からも捜索隊が出るそうだ。それに同行させてもらおうと思っている」

「禁軍はよいのか？」

「龍乎への応援という形を取るから問題はない。なに、将軍など戦でも起こらぬ限り、いてもいなくても同じだ」

確かに、妖が相手ともなれば、気術兵の存在は必須だろう。だから、楊秀は龍乎の詰所に呼ばれていたのか、と春蘭は納得した。

「さて、私はこれから今後のことで話し合いがある。すぐに終わるから、ここで待っているといい。どうせ鄭家へと寄るつもりだったのだ。一緒に帰ろう」

「わかった」

春蘭の頭をひと撫ですると、楊秀は急いだ様子で部屋を出て行った。鄭家に寄って啓璋たちに仲望のことを告げるつもりなのだろう。

「友寧と、啓璋が悲しむな……」

仲望が死んだと決めつけるのは早計だろう。だが、傍に子慮や文重がいたとしても、攫猿のように獰猛な妖が相手だったとしたら、逃げるだけで精一杯だろう。いや、そもそも逃げ切れるかどうか……。

唇を噛んだ春蘭は、窓辺に椅子を引き摺るとそれに登って外を見回した。道と仕切られた塀の傍には

観賞用の植木が何本か植えられており、少し離れた場所には小さな池もあった。周囲に人気がないことを確認する。

「よし」

小さく頷き、春蘭はそのまま窓から外に飛び降りた。池に近付くと、足音を聞きつけた鯉が餌をもらえると勘違いしたのか、春蘭の周りに集まってきた。

「む。これでは、占ができぬな」

辺りに首を巡らせると、池の傍に盥を見つけた。ここで洗濯でもしているのだろうか。

「まあ、よい。使わせてもらおう」

池に注いでいる水を盥で受け、ある程度溜まったところに水神盤を浮かべる。

そして、同じように肌身離さずに持っていた、仲望の髪紐を右手に絡ませる。水神盤に手を掲げて、春蘭は意識を集中させた。

盤が小刻みに回転を繰り返し、ぴたりと動きを止める。浮かび上がった文様に、春蘭は無意識に眉を寄せた。

「方角を示すということは、仲望は生きている……が、怪我を負っている、のか？」

文様の形は、どう解釈してもよいと思えるものではない。それが重大な怪我かまでは不明だが、仲望の身になにかが起こったことは間違いなかった。

――急ぐ必要がある。

もしも、仲望が危険な状態にあるのならば、一刻を争う。だが、捜索隊がすぐに仲望たちを見つけられるとも思えない。よほどの奇跡か幸運にでも見舞われない限り、まずむりだ。

もしも自分が捜索隊に同行すれば、占で仲望や、子慮たちがいる方角を特定することができる。おそらく、それがもっとも早く彼らを救出する方法だ。

だが、と春蘭は思う。

この生身の肉体は、ささいなことで傷を負う。それは、攫猿の一件で嫌というほど思い知らされた。山奥という、妖や獣が跋扈する場所で、また危険に

さらされるようなことになれば――今度こそ、死ぬかもしれない。

真名を取り戻し、再び邑の守り神に戻ることが春蘭の目的だ。卦は鄭家を指し示しているので、そこに居候することになった。あそこに居続けるためには、仲望に死なれては困る。

しかし、攫猿の時とは条件が異なる。

仲望を助けるために自身を危険にさらし、万が一、致命傷を負ってしまったとしたら――。

「どう、すべきなのだろうな……」

堂々巡りをする思考に呟いてみたが、守り神としての答えはわかり切っている。

命を損なう危険があるような場所に、自ら進んで近付くことはできない。たとえ仲望が危険な目に遭っているとしてもだ。

そう頭では理解している。

だが、釈然としない感情が、己の胸の中で燻っている。これはいったい、なんなのだろうか。なぜ、わかり切っているにもかかわらず、これほどまでに心が揺れるのか。

春蘭は楊秀が捜しにくるまで、その場に蹲っていた。

――なぜ、という釈然としない感情を持て余しながら。



それは、どこか物悲しい琵琶の音。

黄海楼の西の楼閣、その最上階の、中庭に面した房に春蘭はいた。欄干にもたれ、どこかの部屋で奏でられている曲に聞き入っている。

しかし、その途中で、横合いからそろりと伸ばされた手を、ぴしゃりと叩き落とす。

「触るな」

睨んだ先には、悪びれた様子もなく微笑む翰栄の姿があった。

「そんなにぴりぴりしてどうしたんだい？　今日は手負いの獣みたいだね」

「……ぬしには関係なかろう」

苛立ちをぶつけるが、翰栄には効果がなかった。不機嫌な春蘭の態度さえ面白いとばかりに、先ほどからちょっかいをかけてくる。

「つれない言葉だね」

「事実だ」

「うーん、そうきっぱり言われると、さすがに落ち込むなぁ」

「そもそも、私はすでに仕事を終えたのだ。ぬしのせいで、留められておるのだぞ」

蟬英からどうしてもと頼まれれば、頷く他ない。すでに終刻の鐘が鳴り、夜間の外出が咎められる刻限となっている。

それもこれも、春蘭を引き止めた翰栄のせいだ。おかげで、今日は黄海楼に泊まらざるをえない。啓瑋たちにはなにも言って来なかったので、今頃心配していることだろう。

「だって、すごく悩んでるように見えたから」

「……なんのことだ？」

「眉間に皺。蟬英も心配してたよ」

こちらを窺っていた楼主を思い出し、春蘭は言葉に詰まった。自分でも、いつもと違うという自覚はある。なにをしていても、あのことが心に引っ掛かっているのだ。

昨日、鄭家を訪れた楊秀は、啓璋と友寧にすべてを告げなかった。

現地で少し問題が起こっていること。その応援には自分も同行するので心配はするな、と二人を安心させるように言った。

龍乎の詰所に行けばばれてしまう嘘なのだが、楊秀は春蘭が訪ねて来たことを踏まえ、そちらにも手を回したのだそうだ。鄭家の家人が訊ねに来ても、本当のことは告げないでほしい、と。

真実を告げるのが正しいのか、それともわずかな希望に賭けて、あえてそれを伏せるのか。捜索隊が無事に仲望たちを連れ帰ればいい。だが、もしも誰一人として助からなかったら――。

楊秀のとった手段が正しいのか、それとも間違っているのか、春蘭には判断することはできない。なにが正しくてなにが間違っているのかなど、きっと誰にもわからないだろう。

そして、今日。楊秀は捜索隊と共に華安を旅立った。

「よかったら、話してみないかい？」

「……断る。ぬしに話したところで、解決するとは思えぬ」

「そんなことないよ。話してみないとわからないじゃないか」

「わかる」

どうあっても、春蘭は自らの意志で危険に飛び込むわけにはいかなかった。それくらいの分別はある。三百年という長きにわたり、守り続けてきた民の暮らしがかかっているのだ。

「頑なだねぇ」

「そもそも私はぬしを信用していない。そんな相手になにを話すというのだ」

強い拒絶の言葉を口にした春蘭は、すぐにそれを後悔した。視線を床に落とし、小さく溜息をつく。

「――すまぬ。ただの八つ当たりだ」

あり得ない話ではあるが、ここに仲望がいてくれれば、と思う。

その当人のことで悩んでいるのだが、それでも、この胸のわだかまりを声に出すことができるのは、彼をおいて他にはいなかった。もっとも、出発前夜にも、彼に同じような八つ当たりをしてしまったのだが。

「うーん。じゃあ、譬え話でいいからさ、話してごらんよ。少しは気が楽になるかもしれないよ」

「譬え話？」

「曖昧な形だったら話せない？」

「……ぬしは、どうあっても私に話させたいようだな」

「だって、気になるだろう？」

邪気のない笑みを浮かべる翰栄が、なにを考えているのかはわからない。そもそも、なぜ自分にこれほどまでに構うのか。

以前、戯言のように結婚を申し込まれたが、そこに恋愛感情が介在しているとは感じられなかった。溜息をついた春蘭は、しかたなく口を開いた。

「たとえばの話だ。ある者に、瀕死の友がいるとする。すぐに助けに向かえば、命は助かるかもしれない。だが、それには危険を伴う。自分の身も危うくなるかもしれぬ」

実際、手負いの攫猿を相手にするのとは状況が違うのだ。確実に、春蘭の身は危険にさらされるだろう。

「だが……その者には死ねぬ理由がある。自分が死ねば大勢の人間が不幸になるのだ」

守り神は大切である。

洪水や疫から邑を守ることはもちろん、大地に恵

みを与えるのも守り神だ。それを失った邑は徐々に衰退し、そして無人の土地となる。

子も、その親も、そのまた親も、三百年という長きにわたり、我が子のように見守ってきたのだ。もしも、あの邑が消えてしまったらと想像しただけで身を切られるような痛みを覚える。

仲望と邑人たち。

比べるまでもなく、大切なのは後者だ。

「だから、友を見捨てた。ただ、それだけのことなのだ」

ずきり、と胸が痛んだのは、気のせいだ。

内なる声が響く。

目的を忘れるな、と。

以前、花家の娘にも言ったではないか。

〝――いざという時はぬしを見捨てる〟、と。

相手は違うが、今がまさにその時なのだ。無意味な感傷はいらない。

「でも、見捨てたくはなかった」

翰栄の声に、春蘭は双眸を見開いた。

「違う？」

「……いや、違いはしない。できるなら助けたいに決まっている。だが、それ以外の選択肢を選ぶことはできぬのだ」

もしかしたら、危険な目には遭わずに仲望を助けることができるかもしれない。

しかし、同時に、春蘭が命を落とす可能性も存在するのだ。それは、水神盤で占ったところで、どうにもならない。

変わらぬものなどなにもないのだから。

「じゃあさ、ぎりぎりまで頑張って、だめだったら一人で逃げればいいんじゃないかな」

「……は？」

「どっちにしろ、見捨てることには変わりないけどね。でも、運がよければ瀕死の友人を助けられるんじゃない？」

「いや、だから、その〝ぎりぎりまで頑張る〟行為

自体に危険が伴うのだが」
あっけらかんとした態度で告げる翰栄に、春蘭は茫然としながら応じた。
「本当に？」
「なにがだ？」
「今、春蘭がいる場所が限界なのかい？」
翰栄の言葉が心を揺らす。
それ以上、なにも聞きたくはない。迷う気持ちが、別に道があるのではないかと、ありもしない可能性を探そうとするから。
「限界なんてさ、その時にならないと決められないものだよ」
「それ、は……」
春蘭は俯き、唇を噛んだ。
ここが限界ではない。そう思ってもいいのだろうか。
「私は……」
「まあ、いざ目の前で見捨てられたら、相手の絶望は半端ないと思うけどね」
きっと、翰栄に悪気はないのだろう。真面目な雰囲気が、その一言のせいで緩んだものへと変わる。
しかし、翰栄は一向に気にした様子もなく、笑みすら浮かべながら続けた。
「それに、春蘭がどうして自分の死に悩んでいるのかは知らないけど、死んだら死んだで、意外とどうにかなるものなんだよ？　人間っていう生き物は、けっこう強かだからね。だから、そんなに責任を感じなくてもいいんじゃないかな。あ、でも春蘭に死なれたら悲しいから、やっぱり、危なかったらさっさと見捨てて逃げてね」
「なんだ、それは」
春蘭にとって、人は常に守るべき存在だった。
その考えは、今も変わらない。だが、翰栄の話を聞いて、少しだけ気が楽になったのも事実だ。
「……断っておくが、ただの譬え話だぞ」
「わかってるよ」

にこにこと頷く翰栄は、本当にわかっているのだろうか。なにかを勘付かれた気がしなくもないが、翰栄が内なる声を聞けるというわけでもない限り、真実に辿り着くことは不可能だ。

「あ、あとね、もう一つ。瀕死の友人がたとえ死んじゃったとしても、それは誰のせいでもないと思うよ。だって、死ぬような目に遭ったのは自分の責任だ。瀕死の友人だって、きっとそう思ってるよ」

「……そうか」

確かに、仲望は見捨てられたとしても、春蘭を恨んだりはしないだろう。春蘭が逆の立場でもそう思うからだ。

「確かに、譬え話でも誰かに話すと気が楽になるな。礼を言うぞ」

「じゃあ、お礼に結婚――」

「それは却下だ」

まだ言うか、と春蘭は嘆息する。助言に対する感謝の気持ちも、あっという間に薄れてしまった。

「とりあえず、私はもう行く。あとは他の者に相手をしてもらえ」

蟬英の馴染みの客ともなれば、嫌な顔をする者はいないだろう。

「私は春蘭がいいんだけど」

「もう充分であろう」

「全然足りないよ」

「それは残念だったな」

さっさと立ち上がった春蘭に、翰栄は不満げな視線を向けた。

「もしかしたら、あれかなぁ。敵に塩を送ったのかも……」

「どういう意味だ？」

言葉の意味がわからず、春蘭は首を傾げた。それに、翰栄は「こっちの話だよ」と笑った。

回廊に出た春蘭は、蟬英を捜そうとしたが別の客の相手をしていることを思い出した。だから、春蘭が翰栄の相手を頼まれたのだ。

「帰るにも、誰かに言わねばなるまい」

春蘭の姿が見えなくなったとなれば、蟬英が心配するだろう。なにしろ、夜間は外出を禁止されている。外を出歩けるのは、巡回の兵士くらいだ。

誰か知り合いはいないだろうか、と辺りを見回していると、いきなり背後から強い力で突き飛ばされた。

「なっ！」

転びそうになるが、壁に手をついてなんとか転倒は免れる。いったい誰が、と振り返れば、そこには二十歳前後の女が立っていた。

紅色の派手な襦裙をきっちりと着込んだ姿は、他者を拒絶するような雰囲気を漂わせていた。結い上げられた髪は、豪奢な細工が施された簪や大輪の生花で艶やかに飾られている。

気品のある仕(た)まいではあるが、美しい容貌に浮かぶ傲慢(ごうまん)そうな表情がそれを打ち消していた。

「邪魔よ」

冷たい声だった。そこには幾許(いくばく)かの侮蔑も含まれているように思える。初対面の相手だが、なぜ敵意を向けられているのか。意味がわからずに、春蘭は眉を寄せた。

「薄汚い娘が。ここにいていいと思っているの？」

ここ、というのは、最上階のことを指しているのだろう。以前、階が上がるごとに、客の質も、妓女の質も高くなるのだ、と祥琳(しょうりん)が教えてくれた。

ならば真っ先にここへ通された翰栄は、それなりの身分の者なのだろう。そんな者が高級茶葉を扱う茶房とはいえ、間借りしているのは不自然だった。面倒事の匂いがするので、あえて理由を問う気はないが。

「……私を無視するとは、いい度胸ね」

「ああ、すまぬ。少し考え事をしておった」

「なんですって？」

「だから、すまぬと謝ったではないか。今度はちゃんと聞くぞ」

ひくり、と女の唇が痙攣した。美しいはずの顔も、なぜか歪んだように強張っている。
「あの女に気に入られてるからって、この私にそんな口を叩くだなんてっ……！」
「そもそも、ぬしは誰なのだ？」
こうしている間も、時は刻々とすぎている。先を急いでいる春蘭としては、のんびりと会話を楽しんでいる暇はなかった。
「ほ、本当に礼儀を知らない娘ねっ」
人にぶつかっておいて、謝罪の一つもない女の方がよほど礼儀知らずなのだが、それを指摘しては火に油を注ぐことになるだろう。
さて、どう対処すべきかと頭を悩ませていると、回廊の角から救いの主が姿を現した。
「紅燕？　こんなところで、どうし――あら、春蘭も？」
酒を口にしたのか、月儀は頬をほんのりと朱に染めていた。
紅燕、というのが女の名なのだろう。月儀に気付いた紅燕は、忌々しげな眼差しを残すとそのまま奥へと去ってしまった。
「なにか難癖でもつけられた？」
「難癖……なのか？」
一方的に怒鳴られただけで、会話らしき会話はなかった。難癖とは違うような気がしなくもない。春蘭が訝しげに首を傾げていると、月儀は困ったように微笑んだ。
「春蘭が悪いんじゃないわよ。紅燕は誰に対してもああなの。特に蟬英姐さんを嫌ってねぇ」
では、〝あの女〟というのは蟬英のことか。
確かに、春蘭は蟬英に気に入られている。だが、それはあくまでも、春蘭に商品としての価値があるからだ。普通の娘だったら、見向きもされなかったに違いない。
「まあ、その傲慢なところがいいっていう物好きも多いんだけどね。それに、紅燕は前から呂の旦那を

狙っているから、春蘭のことを面白く思ってないんだよ」

「翰栄を？」

「そうそう。ふらーっとやって来てはうちの楼主様を指名して、毎回、高価な贈り物を置いてくからねぇ。よっぽどの金持ちだって噂だよ。だから、紅燕は自分の取り巻きの一人に加えたいのさ。あの子は、うちの中でも一番の花持ちだからねぇ」

「はな？」

「ここいらじゃあ、借金のことをそう呼ぶのさ。紅燕が背負ってる額じゃあ、身請けしてくれそうな客も滅多なことじゃあ現れない。だから、稼いでおける間に稼がなきゃ、って焦ってるのさ」

以前、蟬英が妓楼を〝華やかなだけの地獄〟だと評していた。今、春蘭と話している月儀や、必死に琴の練習に励んでいる祥琳も、みなここに売られてきたのだ。

「ところで、春蘭。呂の旦那はどうしたの？」

「ああ、ちょうどよかった。私は用ができてしまって、席を外してきたのだ」

「あらあら。じゃあ、手の空いてる子をつけなきゃねぇ。くくくっ、紅燕が聞いたら真っ先にすっ飛んできそうだよ」

「すまぬな。それと、蟬英はまだ接客中なのか？」

「そうみたいね」

「ならば、言伝を頼みたい。すまぬが、四日ほど〝秋菊〟を休ませてくれ、と」

それには、さすがの月儀も驚いたように目を瞠った。

「むりを言っているとはわかっている。だが、私はどうしても行かねばならぬのだ」

「――そいつは困るね」

振り返れば、そこには蟬英の姿があった。今の話を聞いていたのか、どことなく不機嫌そうな表情を浮かべている。

「蟬英」

「どういう理由があるかは知らないけどねぇ、いきなり四日も休みますって言われて、はいそうですかという雇い主はいないよ」
「……すまぬ」
「春蘭、これはお遊びじゃないんだよ。やると言ったからには、責任を持ってもらわなくちゃ困るんだ」
　蟬英の厳しい言葉に、春蘭は唇を噛んだ。
　秋菊の評判は方々に広まっているようで、常連客のみと限定してはいるが、予約を希望する者は多いと聞かされている。急に休まれては困るだろうが、春蘭にも譲れないものがあった。
「罰は受けよう。不在にする間に生じた損失の分は無償で働いて返す」
　真剣な眼差しで蟬英を見詰めれば、やがて諦めたような溜息が聞こえた。
「……商売人を相手に〝無償で働く〟なんて言うもんじゃないよ。これ幸いにと、いいように使われちまうからね」
「蟬英？」
「いいよ。ただし、四日だけだ。それ以上は認めないよ」
　あっさりと引き下がった雇い主に驚いていると、その視線に気付いた蟬英は肩をすくめて見せた。
「あたしがなにを言おうが、あんたは引かないだろう？　無駄な押し問答はしないたちなのさ。約束してある客には、体を悪くして占える状態じゃないって話しとくよ」
「……迷惑をかけるな」
「その分、あんたにはきっちり稼いでもらうから覚悟しておきな。それに、鄭家の旦那からあんたのことはよろしくと頼まれているからねぇ。まったく、金にはなるが面倒な子を雇っちまったもんだよ」
　蟬英の口から出た意外な人物の名に、春蘭は目を瞠った。
「おや、知らなかったのかい？　あんたを雇うって

決まった次の日に文が届いたのさ」

次の日といえば、仲望は出立の準備と二日酔いでそんな暇はなかったはずである。夜半に春蘭と会話をしたあとで、文をしたためたというのか。

「楊秀様ほどじゃあないけど、鄭家の旦那も未だに方々に顔の利く方だからねぇ。よろしくと頼まれた以上、簡単にくびにはできないよ」

「……そんな力があるようには見えぬが」

「あんたが子供だからなにも知らないだけだよ。わざわざ教えるようなことでもないからねぇ。でも、あのお屋敷で暮らすんなら、ちょっとは知っておいた方がいいよ。鄭家の兄弟っていや、揃って文武に優れた俊才だって有名だったもんさ。まあ、兄の方は残念なことに命を落としちまったがね。仲望様だとて武官としての立身出世は望めないかもしれないが、文官としてならぜひうちの部署にっていう誘いがあとを絶たないはずだよ」

「……別人のことを聞かされているようだ」

蟬英が語る仲望と、春蘭の知る仲望は、とてもではないが同一人物であるようには思えない。それに蟬英は含みのある笑みを浮かべた。

「なにか考えがあってのことじゃないかい？」

「ふむ」

考えすぎではないのだろうか、と思ったが、今ここで重要なのは蟬英の機嫌を損ねないことだ。四日も休みを貰うのだから、余計なひと言でそれを台無しにはしたくない。

しかし、仲望は春蘭の知らないところで、働き易いようにと、自分のことを気にかけてくれていたのだ。再会が叶ったならば、礼を言わねばならない。

「さて、お子様はそろそろお休みの時間だよ。祥琳はもう部屋に戻ってるはずだから声をかけてごらん。寝具の世話をしてくれるよ」

「わかった。それと、私は朝早くにここを出るつもりだ。荷馬車に乗せてもらうから、いつもの俥はいらぬ」

本当は、夜が明ける頃には華安にすらいないのだが、これから帰ると言えば蟬英たちに引き止められることはわかりきっている。

「では、五日後に」

そう告げると、春蘭は足早に妓女見習いの娘たちが休んでいる部屋へと向かった。

現在、黄海楼には五人の妓女見習いが暮らしている。それでも少ない方で、少し前までは十人ほどが同じ部屋で寝起きしていたのだと祥琳は言っていた。十人の内の五人は、すでに妓女として部屋持ちになっているらしい。

部屋に顔を出せば、祥琳以外の娘たちは寝入っていた。

「あ、春蘭。待ってたわ」

「私が来ることを知っていたのか？」

「蟬英様から、春蘭はここに泊まることになるだろうから、寝具の準備をしておいてほしいって言われてたの」

どうやら、翰栄の相手を頼まれた時には、すでに春蘭の宿泊は決まっていたようだ。寝ている娘たちを起こさないように、春蘭は小声で礼を告げた。

「すまぬな」

「気にしないで。もう寝ちゃう？」

「ああ。今日は色々と疲れた」

「私も。あのね、春蘭のおかげでお客様の前で琴を披露することができたの。上手だってたくさん褒められたわ。本当にありがとう」

祥琳の声には抑えきれぬ喜びの色が滲んでいた。ずっと悩んでいただけに、嬉しくてしかたないのだろう。

「祥琳の実力と、努力の結果だ」

「ふふ。春蘭ならそう言うと思った」

くすくす、と鈴を転がしたように笑う祥琳に、春蘭も笑みを返した。

寝間着に着替え、布団に入れば祥琳が卓に置いてあった燭台の火を消す。室内はあっという間に暗

闇に呑まれた。

「……祥琳」

「なあに？」

「私は明日の朝早くにここを出るつもりだ。私の姿がなくても気にしないでくれ」

「わかったわ。あ、床はそのままにしておいていいからね。片し方に順番があるの」

「了解した」

お休み、と言葉を交わせば、沈黙が辺りを支配する。そのまましばらくすると、すぐ傍から祥琳の寝息が聞こえてきた。よほど疲れていたのか、それとも単に寝付きがいいのか。暗闇の中、むくりと起き上がった春蘭は、枕元に畳んで置いた襦裙を手に取った。

足音を立てないように寝室から離れ、人気のない場所で自分の服に着替える。玉が吊るされた紐を腰に巻けば、準備は完了だ。こっそりと裏口へ回り、誰もいないことを確認する。

「白桃（はくとう）」

名を口にすれば、玉が淡い光を放ち、なにもない空間に真っ白な大虎が姿を現した。白桃は先代の守り神から譲り受けた神獣である。

甘えるように擦り寄ってくる白桃の頭を撫で、春蘭はその背に跨った。

「まずは鄭家へ向かうぞ。啓璋と友寧に断らなければ、黄海楼に乗り込んで来るだろうからな」

「バウッ」

ひと声鳴いて、白桃は闇夜の都を静かに走り出した。

風のように走る白桃は、久し振りに外へ出たということもあり、生き生きとした様子で屋根から屋根へと跳躍（ちょうやく）している。春蘭を振り落としかねない勢いだ。

春蘭はその背にしがみつきながら、荷馬車の方が

まだましではあるな、と白桃が聞いたら臍を曲げそうなことを考えていた。

巡回の兵士に見咎められることもなく鄭家へと辿り着いた春蘭は、中庭から屋敷に入り、灯りのついている房へと向かった。

「啓璋と友寧は、おるか？」

扉のところから室内を覗けば、卓に突っ伏して眠る二人の姿があった。春蘭の声に反応して、友寧がのろのろと顔を起こす。

「ん、うー……」

「こんな所で寝ていると具合を悪くするぞ」

未だに起きない啓璋の体を揺すれば、先に起きていた友寧が驚いた声をあげた。

「しゅ、春蘭！」

「なんだとっ！」

友寧の声に反応し、啓璋も弾かれたように体を起こす。驚いたように二人を見やれば、片方は怒りの、片方は安堵の表情を浮かべていた。

「お前っ、遅くなるならそう言え！」

「春蘭がなかなか帰って来ないから、心配したんだよ？　確認しようにも、夜は出歩けないし……」

どうやら、少年たちは帰宅の遅い春蘭を心配して、待っていてくれたらしい。その途中で寝てしまったのだろう。

「すまぬ。少々、引き止められてしまってな」

「まったく。だいたい、俺はあそこで働くことにまだ反対してんだからな。無断で外泊したら、絶対に辞めさせるぞ」

「ぬしは私の父親か……」

啓璋や友寧は、妓楼という場所にあまりよい印象は抱いていないようだ。

「あ、でも、今帰って来たってことは、また夜道を歩いて来たの？」

「白桃に乗ってきたから、歩いたわけではない」

「夜間は出歩いちゃだめだって言ってるのに……」

咎めるような友寧の視線に、春蘭は溜息をついた。

どうにも、最近の少年たちは春蘭の行動に口を出しがちだ。必要以上に話しかけてこなかった頃が懐かしい。

「私は二人に話があるのだ」

「なに？」

「なんだ？」

四つの瞳が春蘭に向けられる。

楊秀は二人に、仲望の身に起こったことはあえて告げなかった。それは、待つことしかできない少年たちを慮ったからだとわかっていた。だが、これから春蘭も留守にする以上、あの説明では通らない。

なによりも、仲望のことを一番に心配している二人だからこそ、真実を知るべきだと思う。それが、どれほど辛いものであろうとも。

「仲望は、現在、行方がわからなくなっている。それは、仲望だけではない。子慮たちも、だ」

二人の顔が驚愕に染められる。あまりにも唐突に告げられた事実に、どう反応していいのか混乱しているようだ。

「昨日、龍乎の詰所に行った時、聞いてしまったのだ。捜索隊が結成され、楊秀もその一員として同行した」

「そんな、だって……楊秀様は、なにも心配ないってっ」

友寧の悲痛な声に、春蘭の心が痛んだ。啓璋も唇を噛み締め、耐えるように俯いている。

「本来なら、私もぬしらに告げぬ方がよかったのだろう」

事実を知ることは残酷だが、知らぬこともまた同じくらい酷なことだ。

「ぬしらも、薄々勘付いていたのだろう？」

友寧は、はっと目を見開き、啓璋は俯いていた顔をあげた。どちらも、春蘭の言葉を肯定していた。

「そこで私まで理由をつけていなくなれば、余計になにかあったのではと、不安にさせるだけだと思っ

たのだ」

「いなくなる、って、どこに行くの……？」

訝しげな友寧の問いに、春蘭は自分の決意を口にした。

「仲望を捜しに行く」

「なっ、だって、それは楊秀様たちが向かったんでしょう？　どうして、春蘭が？」

「捜索の範囲は広大だ。すぐに仲望たちが見つかるとも思えない。だが、私にはこれがある」

二人に示して見せたのは水神盤である。以前、啓璋と友寧の前で、春蘭の占師としての腕は実証済みだ。それに、黄海楼で占師として働いているという実績もある。

「移動には白桃がいる。楊秀と合流して、私が場所を示せばすぐに見つかるはずだ」

二人の顔色は優れない。春蘭にそのようなことを任せてもいいのか。危険はないのかと、春蘭の身を案じているのだろう。

「そんなの無茶だよっ。それに、楊秀様たちはもう華安を発ってる。追いつけるわけないよ！」

「友寧の言う通りだ。旦那様のことは心配だけど、だからって、お前まで危険なところに行く必要はないんだ」

「楊秀様に任せておこう？」

「楊秀様なら、きっと旦那様やみんなを助け出してくれるって」

春蘭をどうにか思い留まらせようと、二人は必死に言葉を重ねる。しかし、春蘭は首を横に振った。楊秀たちでは、仲望らを生きて連れ帰ることは難しい。

「私は仲望を助けたいのだ」

それは偽りのない春蘭の本心だった。守り神としての責任を考えた時も、その思いだけは変わらなかった。

「のう、啓璋、友寧。私は限界まで頑張ろうと思う。だが、むりならば仲望は見捨てる。それだけは覚悟

しておいてくれ」

助けに行くと言っておいて、危険だと判断した場合は見捨てる、という春蘭に、一瞬、二人の瞳に反感の色が宿った。だが、それは口に出されることなく、少年たちの心に留め置かれた。

「――すまぬな」

仲望を助けたいという気持ちは強い。だがそれ以上に、春蘭は自身に課された使命を放棄することはできないのだ。

「私は行く。ぬしらは仲望の無事を祈っていてくれ」

そう告げ、春蘭は返事を待たずに回廊へと出た。夜通し駆け続ければ、楊秀たちが山に入る前に合流することができるだろう。追い掛けてきた春蘭に対し、楊秀はいい顔をしないだろうが、そこは言い包める自信があった。

「白桃」

名を呼べば、中庭で待機していた白桃が近付いてきた。金色の瞳が、もう行くのかと問い掛けている。

「できるだけ急いでくれ。日が昇れば、ぬしの姿は人目につく」

わかった、というように白桃はのどを鳴らした。神獣である白桃は、その気になれば馬よりも早く走ることができる。春蘭が振り落とされないようにと、気を遣っていつもは速度を緩めているのだ。

背に騎乗すれば、白桃はゆっくりと動きはじめた。進むべき方角はわかっている。迷うようであれば、また占えばいい。

背の筋肉が脈動し、白桃が跳躍の体勢に入った時だった。

回廊を走る足音と共に、啓璋と友寧が姿を現した。よほど急いできたのか、月明かりの下でもわかるほど頬が紅潮している。

「おい、これを持ってけ！」

「必要でしょう？」

手渡されたのは、水神盤を浮かべるにちょうどい

い盆と、水筒に入った水だった。確かに、これがあればどこでも占ができる。

「……助かる」

「それくらい、自分で準備しとけよな！」

照れながらも憎まれ口を叩く啓璋に、春蘭は思わず微笑んだ。手渡されたものを友寧が持ってきた布にくるんで、春蘭は背に括りつけた。

「気をつけてね」

「怪我すんじゃねぇぞ！」

少年たちの声が夜空に響く。どんな時でも心配性な二人に感謝しながら、春蘭は決意の滲んだ声で告げた。

「――行って来る」

それを合図に、白桃の巨軀が夜空を跳んだ。



春蘭が、山の麓の邑に辿り着いたのは、山際が薄らと明るみはじめた時だった。

そこは規模の小さな邑で、家も数えるほどしかない。薄闇の中、木に隠れるようにして移動すれば、邑で一番大きな屋敷の一画に、十数頭の馬が繋がれていた。

捜索隊の者たちが乗ってきたものだろう。昨日は日が暮れてから到着したのか、山には入らなかったようだ。

起床するにはまだ早いようで、人の姿は見られない。まずは楊秀と合流することが先決だが、春蘭は今までの経験から、自分の外見がこのような場所にそぐわないことを知っていた。

――今、姿を現すのは得策ではない。

楊秀が一人になる機会を窺うために、春蘭は先に山に入り捜索に備え仮眠を取ることにした。茂みの中で地面に伏せる白桃に体を預け、春蘭は目を閉じた。捜索隊になにか動きがあれば白桃が報せてくれる。

夜通し駆け続けたせいで疲れていた春蘭は、すぐに眠りに落ちた。

次に目覚めた時には、辺りはすっかり明るさを取り戻し、太陽も完全に昇っていた。がやがやと、ざわめきが聞こえ、馬に騎乗した捜索隊の者たちが、出発しようとしているところであった。

春蘭を起こそうと、一心に頬を舐めていた白桃の頭を撫でる。音を立てないように背に跨り、小声で捜索隊のあとを追うように命じた。

人数がいるのだから、幾つかの班に分けて捜索を

行うはずだ。楊秀を捕まえるならば、そのあとがいい。

馬たちが白桃に勘付かないように充分な距離を保ちながら進めば、やがて開けた場所へと辿り着いた。明らかに人の手が入っていた。

採石を行う人足たちはここで暮らしていたのだろう。白桃の背から周囲を窺えば、人々が寝起きしていたらしき小屋も見つけることができた。

そこで捜索隊の面々は馬から降り、四つの班に分かれた。班一つで、四、五人といったところか。楊秀の班は四人だ。

一つの班は広場に残って、周辺の捜索を行うらしい。その場に留まり他の者たちの馬を木に繋いでいる。どうやら、この先は徒歩で行くようだ。

残りの三班はさらに奥へと進んで行く。あとを追うと、採石を行っていた場所に着いた。広場からそう離れていない距離だ。周囲には中途半端に切り出された石が転がり、閑散とした雰囲気を醸し出して(かも)(だ)いる。

「ふむ……ここからばらばらに動くのか」

三方に分かれ山へと入って行く者たちの背を眺めながら、春蘭は白桃と共に楊秀を追った。

白桃の背に揺られる春蘭は、片手で頭を押さえながら不満も露に口を尖らせていた。その前を、さらに憤然とした表情の楊秀が、周囲を警戒しながら歩いている。

春蘭としては気を遣ったつもりなのだ。

いきなり声をかけては驚かせると、先回りした春蘭は、比較的視界の開けた場所で楊秀たちの到着を待っていた。そして、春蘭を見つけて茫然とする楊秀に「私も手伝うぞ」と告げた瞬間、脳天に拳を貰ったのである。(こぶし)

確かに、勝手についてきた春蘭にも非はある。しかし、問答無用で殴ることはないだろう。

「戻れ」と鬼のような形相で凄む楊秀に、春蘭は自分ならば仲望の居場所を示すことができると主張した。

「ぬしが了承せぬのなら、自分一人で捜すぞ」

半ば脅迫のような一言である。

こう言えば、楊秀が断れないことを春蘭は知っていた。卑怯だとは思うが、今は手段を選んでいる暇はなかった。

結局、楊秀は折れた。

春蘭が仲望の居場所を占うことができるという点も大きかっただろう。黄海楼での春蘭の評判は蟬英を介して彼の耳にも届いていたが、不本意なことには変わりないようで、先ほどから不機嫌な態度を隠そうとしなかった。

楊秀と共に捜索を行っていた二人の龍乎兵は、楊秀が「子慮たちを無事に見つけたいと思うならば、なにも訊くな」と、半ば脅すように説得した。相手は禁軍の将軍ということもあり、二人は春蘭に薄気味悪そうな視線を向けつつも、同行を了承したのであった。

そして、残る四人目は……。

「それで、嬢ちゃんはいったい何者なんだ？」

興味津々といった様子で、春蘭に付きまとっていた。

年齢は四十を過ぎたくらいだろうか。熊のような体格に、見事に天辺だけが禿げあがった頭。視線をすぐ下へと向ければ、対照的なほどふさふさとした口髭が蓄えられている。服装は、彼だけが武具を身につけておらず、歩きやすい旅装に、大きな包みを背負っていた。

名は宋影春。

捜索隊に同行してきた町医者である。

「……何度も言うが、私は人だ」

「じゃあ、この虎はなんなんだ？　ずいぶんと嬢ちゃんに慣れてるじゃねぇか。しかも真っ白ときたもんだ」

影春の興味は尽きないらしい。春蘭だけでなく、白桃にも御執心の様子であれこれ訊ねてくる。先ほどからこの調子のため、付き合わされる身としては堪ったものではない。

「気にするな」

「こんな不思議な光景を目の当たりにして、気にするなっていう方がむりだ」

真顔で答える影春に、春蘭は肩を落とした。興味を持っているのは影春だけで、龍乎の二人は無用な詮索をしてこない。ぜひ彼らを見習ってほしいものだ。

「しかし、嬢ちゃんがあの仲望の嫁とはなぁ。あいつも隅におけねぇな！　ちっこいのは、まあほっといても大きくなんだろ」

影春は仲望の知り合いで、楊秀から偏った説明を受けていたようだ。春蘭が名乗るなり、「仲望の嫁か！」と、驚いた声をあげていた。

「ちっこいは余計だ。それに、嫁ではないとさっきから言っておるではないか。ぬしはちゃんと話を聞いているのか？」

「はきはきした嫁だな」

「……」

この者も人の話をよく聞かない性格なのか、と春蘭は疲れたように嘆息した。

影春の背は高く、服の上からでも隆々とした筋肉がわかるほどである。今まで出会った人間の中で、もっとも体格がよい。外見だけを見れば、この中では一番強そうだ。

「本当にこちらで合っているのか？」

先頭を行く楊秀が春蘭を振り返り、確認するように問い掛けてきた。

「うむ。間違いはないぞ」

楊秀が疑問を持ちたくなるのも当然だろう。春蘭たちが進んでいるのは、勾配の急な斜面だった。地面から岩肌が露出している部分もあり、足を滑らせればあっという間に滑り落ちてしまう。

行く手を阻む巨大な木も、確実に楊秀たちの体力を奪っていた。平然としているのは、白桃の背に乗る春蘭と、体力には自信があるらしい影春だけだ。

「迂回すれば、それだけ時間がかかる。できるだけ、最短距離を通った方がよい。それに、山はどこもこんなものだ」

春蘭が守護していた邑も、深い森に囲まれていた。白桃が庭として遊んでいた場所は、斜面ももっと険しく、所々に切り立った崖もあった。それに比べればたいしたことはない。

「これが続くのか……そろそろ休息を取った方がよさそうだな」

楊秀は自分たちより少し離れたところを、肩で息をしながら登ってくる二人を一瞥した。

毎日、鍛錬を行っている兵士でも、この強行軍は堪えているようだ。楊秀の呼び掛けに応じる声には張りがない。

「ふむ。ならば、もう少し行ったところにある水場で休憩してはどうだ？　水筒の水も少なくなってきたしな」

仲望のいる方角を確認するために、春蘭は立ち止まっては占いをするといったことを繰り返していた。水はどこで補充できるかわからないので、その都度、水筒に戻していたが、どうしても零れてしまう。

飲み水としても使用しているため、確実に水の量は減りつつあった。この強行軍で、水がないというのは死活問題である。

「水場だと？」

「水の気配がする」

普通の人間にはわからないだろう。だが、水に深いかかわりを持つ春蘭は、人に戻ったあとでも敏感に感じ取ることができた。

楊秀は周囲に耳を澄ませているが、なにもわからなかったようで不可解そうに首を捻っている。すると隣から感嘆するような声が聞こえた。

「嬢ちゃんはそんな特技まであるのか。山で迷った

際には便利だなぁ。今度、こつでも教えてくれ」
「こつはないぞ」
「ないのか！」
　遅れがちな二人に合わせて歩調を緩めながら進めば、そうかからずに春蘭たちの前に岩肌を流れる川が姿を現した。
　川幅は狭く、深さも春蘭の膝までしかない。水面を覗き込めば、澄んだ水の底が見えた。楊秀が休憩を告げると、二人はその場に崩れ落ちた。
　春蘭も白桃の背から下りて、水筒に新しい水を補給する。白桃は久し振りの山に落ち着かないのか、しきりに周囲を見回していた。
「ああっ、生き返る！」
　水面に直接口をつけて水をがぶ飲みしていた影春が、歓喜するように声を張り上げた。身を隠せるような障害物がない場所で、大声をあげるのはあまりにも危険だ。
　山塀を棲み処とする妖が、この辺りをうろついていないとも限らないのだから。
「のう、影春。あまり大声は――」
「そうだった。嬢ちゃん、ちょっと手を出してみな」
　さっさとしろとばかりに催促され、春蘭は渋々と両手を差し出した。すると、「やっぱりな」と影春が呟いた。
「こりゃ、痛かっただろ」
　春蘭の掌には、小さな豆がいくつもできていた。酷い箇所は潰れてしまい、掌全体が真っ赤に腫れている。白桃の背中に長い間しがみついていたせいだ。
「確かにはじめは痛かったが、今はじんじんするだけだ」
「感覚が麻痺してるんだよ」
「そうなのか」
　どうすることもできないので、あえて気にせずにいたのだが、影春は医者というだけあってそれに気付いたようだ。
「水で冷やすだけではだめなのか？」

「だめだ。こっちに座りな」
「わかった」
春蘭を岩に座らせると、影春は持参してきた荷物袋から小さな蓋つきの陶器を取り出した。そして、春蘭の顔よりも大きな手で、傷口の周囲を確認するように触診した。
「化膿はしてねぇみたいだな。ただ、ちょっと熱を持っちまってるか」
「む……あまりぐいぐい押すでない」
麻痺しているとはいえ、傷口に触れられれば痛む。つい文句が口をついて出てしまうのも、しかたのないことだろう。それに、影春は感心するような顔付きで春蘭を見た。
「泣かねぇのか。嬢ちゃんは我慢強いな」
「私の名は春蘭だ」
「嬢ちゃんでいいだろ。もしくは嫁か？　仲望の嫁になるんだし、それでいいだろ」
「よくはないぞ」
ちびっ子と呼ばれたり、嬢ちゃんと呼ばれたり、このままでは春蘭の名を呼ぶ者の方が少なくなってしまうのではないだろうか。
「次は薬を塗るからな。けっこう染みるから覚悟しとけよ」
影春の宣言通り、緑色の薬は染みた。ひりひりと、傷口がさらに熱を持ったかのように痛む。麻痺していた痛覚が蘇ったようだ。
「ふむ。これでも我慢すんのか」
「泣いたところで無意味であろう？」
「子供は四六時中、びーびー泣いてるもんなんだがなぁ。お前さんは、仲望の小せぇ頃にそっくりだな」
「不本意だ」
おそらく、幼少の頃も変わらずにぐうたらな性格だったに違いない。痛みを堪えていたのも、泣くのが面倒だったから、と平気で言いそうだ。
しかし、影春の口から出た言葉は、意外なものであった。

「昔のあいつは、感情のねぇ餓鬼だったよ。色々失うもんがあって、そんでようやく〝人〟に近付いた感じだな」

「そうなのか？　感情が見えないのは、今も同じだと思うが？」

春蘭の言葉に、影春は口髭を揺らしながら苦笑した。

「あれよりもっと酷かった。兄貴の方は、がーがー喚いてうるさいくらいだったんだがな。血の繋がった兄弟だってのに、不思議なもんだ」

「……兄とは、鄭玄楽のことか」

唐突に出てきた名前に、春蘭はつい戸惑って訊き返してしまった。

「なんだ、玄楽のことを知ってんのか？」

「……ぬしは、あやつの居場所を知っておるか？」

「居場所って、玄楽は死んだぞ。仲望から聞いてねぇのか？」

「知らぬか……」

呟き、春蘭は小さく溜息を漏らした。そんな簡単にわかれば苦労はないか、と苦笑する。家僕の少年たちや楊秀に訊いても知らなかったのだ。

「おら、終わりだ」

縦長に裁断した布を掌に巻かれ、治療は終わった。傷口も薬を塗布した時よりは痛みがなくなっている。

「すまぬな」

「いいってことよ。しかし、あれだな。こんなに山奥まで来たのに、まだ妖の一匹にも会えねぇとはなぁ」

〝会わない〟ではなく、〝会えない〟と言った影春に、春蘭は首を傾げた。

妖に会いたい者などいるはずがない。

それが春蘭の認識である。稀に無害な妖もいるが、人間にとっては害になるものが大半だ。しかし、そんな春蘭の疑問には気付いた様子もなく、影春は落胆するように肩をすくめた。

「結局よぉ、こないだの攫猿の遺体も解剖し損ねち

まうし。だから、さらす前にちょっとだけでいいから触らせてくれればよかったんだ。せっかくの機会だったってのによ」

「なぜ攫猿の死体を解剖するのだ？」

その行為に意味があるとは思えない。

だが、影春は攫猿を解剖できなかったことがよほど悲しかったらしい。全身から後悔の念が滲み出しているようだ。

「そりゃあ、お前、人体の神秘を解き明かすために決まってんだろ」

「神秘？」

どこか恍惚とした表情で、影春は語り始めた。

「なぜ、俺たちの体は動いているのか。なぜ、感情というものがあるのか。なぜ、なぜ――人体の謎には限がねぇ」

「ふむ。だが、攫猿の死体が関係するか？」

「攫猿の中には、人から妖になった奴がいるって話じゃねぇか。もしかしたら、今回の奴がそうかもしれねぇと思ってよ。なぜ、人間が山堺で過ごすだけであんな奇怪な姿になんのか。どういう秘密があるのか。考えただけで夜も眠れねぇ。だから、ぜひ解剖して調べてみたかったんだよ」

「そうだったのか」

「今回も、山堺の近くまで行くっていうじゃねぇか。だから、わざわざ志願して捜索隊に同行したのさ。さすがに単独行動は危険だからな」

ただで護衛してもらえるとは幸運だ、と影春は言う。しかし、でかい図体で目を輝かせながら語る姿は、微笑ましい光景には程遠いものがあった。趣味は人それぞれであるが、ずいぶんと変わった趣向の持ち主もいたものだと春蘭は感心した。

だが、大変残念なことに、人が妖に変わることはない。それはあくまでも、伝承として流布されるうちに、内容の一部が変じたものだろう。

もっとも、追及されると面倒なので、指摘はしないが。

「龍乎や楊秀からは動機が不純だと怒られたが、こんなとこまでついてくる医者は俺くらいなもんだ」
「確かに不純だな。そもそも医者になったのも、趣味が原因なのか？」
そう水を向けると、影春は嬉々として食いついてきた。
「おうよ。医者になれば、人体の神秘により近付けるんじゃねぇかと思ってな。あっちこっちの医学書に手を出して、気術士の施術専門医の資格まで取っちまったしなぁ。まあ、今はそっちの方は辞めたけどな」
「ほう。ぬしは施術の資格も持っておるのか」
「一時期、それに熱中したことがあってな。いや、あの時は俺も若かったもんよ。だが、途中で面白味が消えちまってな」
まるで、若かりし頃のほろ苦い思い出を語るような表情で、影春は自嘲するように笑った。
「人体の神秘を研究しているとはいえ、俺も医師の端くれだったわけよ。病気や怪我を治す以外の目的で、生身の人間の体を傷付けることが嫌になっちまってな」
「そうか」
「それに、気術士にかんする施術の歴史が、また陰惨なもんでよ……。いや、これは嬢ちゃんに聞かせるような話じゃねぇな」
幼い春蘭に気遣ってか、影春は語尾を濁した。しかし、そこまで言われれば逆に気になるというもの。休憩中ということもあり、暇を持て余した春蘭は続きをせがんだ。
「私はどんな話でも平気だぞ。気術士についても、最近になって知ったばかりだからな。教えてほしい」
「いや、しかしなぁ……まあ、仲望の嫁になるんだったら、ちいとは知ってた方がいいのか？」
なぜ、仲望が関係するのかは不明だが、どうやら影春は気術士にかんする施術の歴史を教えてくれる

気になったようだ。

「初めは玉を使用した武具と同じでな、それを粉にしたものを人に飲ませて実験したそうだ。だが、体内からは排出されるだけで吸収はされなかった。そこで、学者たちは、親指大ほどの大きさの玉を直接人体に埋め込むことにした」

説明の初っ端から血腥い内容だな、と春蘭は眉を寄せた。確かに、女子供に話す内容ではない。

「ふむ。実験する側はよいが、される側は堪ったものではないな」

「まったくだ。学者たちもそこのとこは考えたようで、批難されないように罪人を利用したって話だ。どうせ死ぬ奴らなんだからと、そりゃあ好き勝手やったらしい。まあ、皮肉なことに、そのおかげで玉が人体に定着することが判明したわけだ。ちなみに埋め込む場所は心臓の真上だ。そこが玉に溜まった〝気〟を、もっとも全身に送りやすいみたいだな。これも罪人たちを使って、散々実験した結果だ」

自分が守り神となっている間に、巷ではそのようなことが行われていたのか、と春蘭は嘆息した。強さを求める気持ちはわかるが、その犠牲となった者たちを思えば、いくら罪人とはいえ気の毒に思えてしまう。

「ただな、玉が定着したとしても、地脈から得られる膨大な〝気〟に耐え切れずに死ぬ者が続出したんだ。結局、生き残れたのはほんの一握りだけ。結果、〝気〟を操るには適性が必要だということが判明したわけだ」

人の命を救う職業に就いているせいか、それを語る影春の表情は不快げに歪められていた。

「それでは実用化には至らぬだろう。適性があればよいが、大半が施術後に死んでしまったら意味がない」

「玉を埋め込んだあと、適性がないと判断されれば取り出すことが可能なんだよ。痛い思いをするには違いないが、もしも適性があれば武官としての名声

は思いのままだ。死なない保証があるなら、試してみたいと思う奴らはわんさかいるぞ」

確かに、と春蘭は頷いた。

強力な力が得られるのであれば、武官を目指すものだけでなく、少しでも野心のある者ならば試してみたいと思うだろう。

「だが、ここで一つの問題が起こった。施術にかかる費用だ」

「……法外な値段を要求されるということか」

「ああ。それは成功しても失敗しても変わりはない。裕福な家ならまだしも、平民に手が届くような額じゃあなかったわけだ。そこで、今度はそこそこの費用で施術を請け負う闇医師が現れた。闇医師は施術をちょっと齧った程度の奴らだと思えばいい。玉を埋め込むことはできるが、取り出すことはできない。むろん施術後に死んでも責任は取らない。中には、信じたくはねぇが、正当資格を持つ施術師が、練習のために闇医師の振りをして依頼を請け負うなんてこともあったらしい」

失敗しても誰も文句は言わねぇからな、と影春は苦々しげに告げた。

「朝廷は対処をしなかったのか？」

「そりゃ、お偉いさんたちも、こりゃまずいってことで闇医師を取り締まろうと動いたさ。それにかんする法律も作られたくらいだ。だが、何事も完全に取り締まることはできねぇんだよ。頭の回る奴は、役人に金を渡して見逃してもらったりしてるくらいだ。未だに多くの闇医師は存在し、将来、食うのにも困りそうな奴らが一縷の希望にすがって戸を叩くのさ」

「なるほど。ぬしは、諸々のことを含め施術師であることが嫌になったのだな」

「そんなとこだな」

春蘭に気術士について教えてくれた青年も、そうやって施術を受けたのだろうか。しかし、彼は施術が成功したにもかかわらず、禁軍の門を叩くことは

なかった――。

「お、そろそろ休憩は終わりみたいだな」

顔を向ければ、楊秀が地面に座り込んでいる二人を叩き起こそうとしているところだった。「鍛錬が足りぬのだ」とか、「軟弱だぞ。それでも龍乎か！」と、怒鳴っている声がする。

だから、なぜ叫ぶのだ。そんなに妖たちに見つかりたいのか。春蘭は思わず額を押さえた。

それを指摘すれば、妖に会いたいらしい影春がわざと大声を張り上げかねないため、忠告することもできない。出会ってから一日と経っていないが、この男は自分の願望のためならば、それくらいのことは躊躇いもなく実践しそうな気がした。妖見たさにここまでついてくるほどなのだから。

「早く仲望たちが見つかればよいが……」

すでに、太陽は中天に近い。夜の闇が落ちた山は、昼間とはまるで別世界だ。獣たちもそうだが、妖も活発になる。水神盤の反応を見れば仲望が生きているとわかるが、よく夜の捕食者たちから身を守れているものだ。

水面を尻尾で叩いて遊んでいた白桃を呼べば、白い巨体がすぐ目の前に現れる。その背によじ登っていると、体力を回復した龍乎の二人が羨ましそうに春蘭を見詰めていた。

「……私にはぬしらの方が羨ましいのだがな」

誰にも聞こえない音量で呟き、春蘭は苦笑した。彼らのような姿ならば、子供と侮られることもないだろう。

春蘭を背に乗せた白桃は、ゆっくりと起き上がった。そして、なぜか再び周囲を気にするように見回す。

「白桃、なにかあるのか？」

「バウゥ」

「自分で、なにが気になるのかわからぬのか？」

「ウウウッ」

白桃は、困惑するように鳴いた。

龍乎の二人は、名を袁道順、蘇覚程といった。歳は道順の方が若く、まだ十九歳になったばかりなのだという。覚程はそれよりも三歳年長であった。赤の他人にもかかわらず、背格好や顔付きまで似通っている二人であったが、それ以外は似ている部分がなく、覚程がまったくの無口、道順がずっと黙ってはいられない性格だった。

はじめ、二人は春蘭と白桃の存在を警戒していたそうだ。

しかし、楊秀や影春の態度を見ているうちに、どうでもよくなってしまったらしい。双方とも楊秀に言われた通り、無事に子慮たちが見つかればかまわないという結論に達したとのことだった。

「こいつらは脳味噌まで筋肉でできてるからな。大方、悩むのが面倒になったんだろうよ」というのが、影春の見解である。

「春蘭ちゃん。姫隊長たちはまだなの？」

情けない声を出したのは道順である。覚程は表情が削げ落ちたような顔付きで、ただひたすら黙々と歩いている。

「ぬしがもっときびき歩けば、もっと早く着くと思うぞ」

「それは絶対むりっ」

これで精一杯だと道順は訴える。

川辺の休憩から、再びかなりの距離を歩いたが、仲望たちの姿は見えない。方向は合っている。だが、少し気になる点があった。

「人が通った跡がない、な」

まるで春蘭の心を読んだかのように、覚程が呟いた。独り言のようなそれに、前を行く楊秀と影春も反応するように振り返った。

「……確かに、採石場からここまでかなりの距離を歩いたが、一度もそれらしいものはなかったな」

額に滲んだ汗を袖で拭きながら、楊秀は周囲を見

回すように首を巡らせた。
「足跡の類ならば、雨が降れば消えてしまうのではないか？」
　仲望たちが華安を発ってから、今日で十日目となる。その間に、何度か雨が降っているはずだ。地表に残った足跡は消えてしまうだろう。
　だが、春蘭の問いに、楊秀は首を横に振った。
「禁軍でも龍乎でも、山に入った時には、必ず目印をつけながら進むように訓練されている。木の幹に刀傷をつけるなり、枝を折るなりして、来た道を見失わないようにするためだ。私たちもやってるぞ」
　殿を歩く覚程と道順が、それを担当していたらしい。斜面を振り返れば、幹の中程、大人の視線ほどの高さに斬りつけたような跡が残されていた。
「……私の占が外れているということはないぞ。それは断言できる。あの邑に辿り着けたのも、これのおかげだ」
「いや、春蘭のことを疑ってるわけではないぞ。ただ、一つの痕跡も見つからないというのは、単純な遭難ではないのかもしれないな」
「どういうことだ？」
「印をつける暇がないほど急いでいたということは、何者かに追われていた可能性が高い」
　何者か。
　おそらく、誰もが同じ結論に行きついただろう。そのような何者かは妖をおいて他にはいない。妖に追われて、果たして何人が無事に残っているのか。
　道順と覚程の二人は、危険な生物が当たり前のように闊歩しているという現実を、改めて実感したような表情を浮かべていた。
「……急ぎましょう。俺、調査隊の中に、幼馴染みがいるんですよね」
　急に真面目な顔付きになった道順は、力強い足取りで斜面を登りはじめる。あまり気張りすぎると体力が持たないぞ、と影春が呆れたように声をかけていた。

「ふむ。また、水場があるな」

微かに感じる水の気配に、春蘭は顔をあげた。水の補給は充分に足りているが、どうやらそれは進行方向にあるらしい。

森を抜けると、水量は少ないが、切り立った岩肌を流れ落ちる滝が春蘭たちを待ち構えていた。



高さにして、ゆうに楊秀の背の三倍ほどもある。
岩場を垂直に流れ落ちる水の先は滝壺だ。水量は、先ほどの水場よりも少ない。滝というよりは、ごつごつとした岩肌を水が勢いよく流れているといった感じだ。
「これを越えて行くのか……？」
楊秀が茫然と呟いたのもむりはない。
岸壁は、一線を引くように水場を離れた左右の森の奥にまで続いている。迂回するとなると、かなりの時間がかかるだろう。
「うむ」
春蘭が頷くと、背後から道順の呻き声が聞こえてきた。振り向けば、無表情が常の覚程も口元が引き攣っている。
「山奥なのだから、これくらいあって当然ではないか？」
けっして登れない高さではない。道順は恨みがましい視線を春蘭に向けた。
「そりゃ、春蘭ちゃんにはその虎がいるけど、俺たちは自力で登らなきゃだからね。ははははっ」
虚ろな眼差しで岸壁を眺めた道順は、乾いた笑い声をあげた。
「……行くしかないだろう」
厳しい眼差しを岩肌に注いだ楊秀は、背負っていた荷物を下ろし、腰に佩いていた剣も取る。
「まず、私が登ろう。木に縄を括りつければ、少しは登り易くなる。途中までくれば、引き上げてやるぞ」
頼もしい楊秀の言葉に、道順は薄ら涙まで浮かべ

て頷いた。覚程も明らかにほっとしている。
「おう、楊秀。俺も引き上げてくれんのか？」
「……宋先生は、助けなどなくとも自力で登れるのでは？」
町医者にもかかわらず鍛え抜かれた肉体を持つ影春ならば、楊秀よりも余裕で岸壁を登れそうだ。しかし、一般人を先に行かせられるわけもなく、ここは自分がと楊秀は名乗り出たのだろう。
「私と白桃は最後に登ろう。頑張るがよい」
滝壺の縁に腰を下ろした春蘭は、同じく岩場に寝そべった白桃の腹に体を預けた。
歩く必要がなくとも、白桃の背に揺られているだけでかなりの体力を必要とする。それでも、捜索隊を追っていた時よりも、速度が出ていないだけましだろう。
全身に広がる疲労感。合間を縫って休憩しなければ、楊秀か影春に背負ってもらうことになりかねない。人間の体――特に子供――は、か弱過ぎて面倒だ、と春蘭は溜息をついた。
「私も、影春のように頑丈な体だったらよいのだがな……」
小さな体は、少しむりをするだけですぐに怪我を負ってしまう。生前に、不便を感じたことがなかったのが不思議なくらいだ。
――鍛えれば、影春のようになれるだろうか？
「いや、それはそれで時間がかかりそうだ……」
神に戻ってしまえば、体力云々の問題は解消される。それに、慌てて鍛えたところで、すぐに効力が現れるとも思えなかった。
春蘭が緩慢な眠気にうとうとしていると、崖を素手で登っていた楊秀が、ようやく天辺に辿り着いた。さほど間をおかずに縄が垂らされ、続いて影春がそれを使って岸壁を登りはじめる。
縄などいらないのではないかという安定感のある動きで、あっという間に岸壁を登り切ってしまった。残された二人は唖然としている。

続いて、道順が崖を登りはじめた。影春とは違い縄をしっかりと握り締め、時折、足場を確認してから慎重に手を伸ばす。見ている方がはらはらさせられる。

「白桃が銜えて登った方が、まだ早いな……」

「バウッ」

肯定するように白桃も吼える。道順は、まだ崖の中腹にも差し掛かっていない。半分以上登らなければ、楊秀も引き上げられないだろう。

「ん？」

不意に、滝壺の中に黒い影が揺らいだ。魚にしては大きいそれに、春蘭は体を起こす。

妖かとも思ったが、さすがに白桃が気付くだろう。神獣である白桃は、妖の気配に敏感だ。興味深げに水面を眺めているところを見ると、妖ではないようだ。

「なんだ……？」

黒い影は徐々に水面へと近付いてくる。春蘭が身構えた時、それは滝壺の中から顔を覗かせた。

「鯉、か？」

灰色の鱗を持つ、巨大な魚だった。水面下に透かし見える全長は春蘭ほどもあるだろう。長い年月を経ているのか、側面には複数の古い傷跡がある。尾鰭も、なにかに齧られたように一部が欠けていた。

『――これは珍しい。神気を感じたと思えば、守り神様ではございませぬか』

耳にではなく、脳裏に直接響く。不思議な感覚だったが、守り神であった春蘭からしてみれば驚くようなものでもなかった。

「ぬしは、何者だ？」

『私は、胡古と申します。歳を経た一介の鯉でございます。昔、麓の邑から守り神と崇められたこともありましたが……あなた様とは、比べようもございません』

長く生きるうちに、稀に〝仙〟へと変容するものがいる。彼らは人々によって守り神と崇められるこ

ともあれば、より力の強い神に隷属し神獣となることもあった。

春蘭が守り神として存在している間、仙に会ったことは数えるほどしかなかった。

『本来ならば、即座にご挨拶に参るべきでしたが、守り神の祝福を受けた人間かもしれぬと、様子を窺っておりました。ですが、このように立派な神獣殿を持つのであれば間違いないと思い、御前に参じた次第にございます。して、なぜ人間の姿を取っておられるのですか？』

「事情があってな」

胡古の丁重な物言いに、春蘭は思わず苦笑した。守り神であった時は、大抵の者たちがこのように傅いたものだ。

『……深い事情があるのでございますね。なにも知らぬとはいえ、不躾なことを伺ってしまいました。ご容赦ください』

「そこまで謙る必要もないぞ」

『とんでもない。守り神の中でも高位とされる、水神様の眷属の方を相手に、いくら敬っても足りることはございません。しかし、そのお姿では本来の力は発揮できぬのではございませんか？』

「そうだ」

『おお、なんと御労しい』

胡古は、まるで我がことのように嘆いた。巨体をくねらせれば、水面に大きな漣が立った。

「ところで、ぬしに訊きたいことがあるのだが」

『私が知り得る範囲でございましたら』

頼られることが嬉しいのか、声が急に明るさを取り戻した。

「ここ数日の間、我々以外の人間を見なかったか？」

『見てはおりませぬが……気になることはございます』

「どういう意味だ？」

『森の獣たちが姿を消してしまったのです。あなた

様も不思議に思いませんでしたか？』

　指摘を受けてはじめて、春蘭はここに至るまでの間、一度も生き物の姿を見ていないことに気付いた。野生の獣たちは警戒心が強く、滅多なことでは人前に姿を現すことはない。しかし、鳴き声まで聞こえないというのはおかしい。

『ここは貴重な水場です。毎日のように、様々な生き物たちが水を求めてやってきたのですが、このところ徐々に回数を減らし、ついには一匹も来なくなってしまいました』

「……そうか」

　どうやら、消えたのは人だけではなかったようだ。

　それは、いったいなにを意味しているのか。

『あとは、しばしば黒く不気味な影を見るようになりました』

「影？」

『はい。霧が立ち込めた時に限って現れるようなのですが……』

「妖ではないのか？」

『確かに私もはじめはそう思いました。ですが、妖にしては少し違う気がするのです。それに老いたとはいえ、これでも元守り神であった身。若い妖は神気を恐れ、近付いては来ません。滝壺から出ることが叶わぬ身ゆえ、姿を確認したことはなく、特徴もなにもわからない状態です。しかし、それが現れるようになってから動物たちがぱたりと姿を消しました』

　曖昧にしかお伝えできずに申しわけありません、と胡古は済まなそうな声音で告げた。

「他にはなにかないか？」

『私が気付いた範囲ではなにも』

　申しわけなさそうに、胡古は尾鰭を揺らした。そして、さらに畏まった口調で春蘭に話しかける。

『実は、守り神様に聞いていただきたい願いがあるのです』

「私にか？」

守り神として力を失っている春蘭にできることは少ない。悩んだ末に「可能なことならば」と答えた。

『白雪。こちらに来なさい』

胡古の声に呼ばれ、水面に顔を出したのは一匹の真っ白な蛙であった。大きさは春蘭の掌に収まるほどしかないだろう。巨大な鯉とは比べるまでもない。

『このものは、呼び名を白雪と申します』

「――仙か」

それも成り立てといった感じである。あまりにも微力なため、胡古が傍で守っているのだろう。

『縁があり、私の弟子となったものです。どうか、このものをあなた様の隷属にしていただけぬでしょうか』

予想外の申し出に、春蘭は茫然とした。確かに自分は力を奪われたとはいえ、歴とした守り神だ。

だが、それは胡古も同じである。なぜ、弟子ではなく、己の神獣としなかったのか。

『疑問も当然でございましょう。ですが、自身の隷属とするには、私はいささか歳を取りすぎました。鱗の色を見ていただければわかるように、寿命が尽きようとしているのです』

確かに、仙の証である白色が、今はくすんだ灰色へと変わっている。力が徐々に衰えてきた証拠だろう。

『白雪は、たまたま私の傍で暮らしていた故に仙となったのです。本来ならば、このように小さきものが仙となることなどありえません』

確かに、仙となるためには途方もない長さを生きねばならない。体の小さいものは、それだけで不利なのだ。

『私が消えてしまえば、このものはあっという間に命を奪われてしまうでしょう。はじめはそれも定めと諦めておりましたが……あなた様とこうしてお会いすることができた。これもなにかのお導き。どうぞ、白雪をお連れください』

切実な声に、春蘭は困惑した。常ならば、迷うこ

となく胡古の願いを聞き入れただろう。神獣は一体でなければならぬといった決まりがあるわけではない。だが、今、春蘭は特殊な状況下にある。おいそれと承諾することはできない。

「連れて行くことはできるが、隷属はできぬ。私は故あって、真名を奪われているのだ」

『なんですと！』

悲鳴のような声が脳裏に響いた。白桃にも声は聞こえているようで、突然の大声に驚いたように顔をあげた。尻尾が忙しなく動いている。

『……申しわけありません。つい、取り乱してしまいました。ですが、ああ……だから、そのお姿を取られているのですね』

「うむ」

守り神の姿に戻ることは可能だ。力も以前と同様に使えるだろう。だが、守り神に戻るということは、人になることで強引に立ち切った隷属の糸を再び結び直すようなものだ。

居場所を知られてしまう上に、名を呼ばれれば従わざるを得ない。真名を奪われた際、春蘭は渾身の力で抗った。そして、そのわずかな隙に人の姿へと戻ったのだ。

抵抗できるのはわずかな間だけ。それを経てしまえば、心まで完全に隷属させられてしまう。神が人に従うことがあってはならない。

「真名は取り戻すつもりだが、すぐには隷属してやることはできぬのだ」

隷属して神獣となれば、たとえ肉体に致命傷を負ったとしても、玉に戻りさえすれば治癒する。つまり、主の命が尽きない限り不老不死の体となるのだ。

しかし、今のままでは、怪我を負ってもそれを自然治癒以外で治すことはできない。死ぬほどの傷を負えばそれまでだ。

『……それでも、連れて行ってはもらえないでしょうか。ここにいても、白雪に未来はありません。ならば、危険があっても未来が続く道へと進ませたい

のです』

「わかった。これもなにかの縁だ。そのものは私が預かろう」

『おおっ……ありがとうございます。これで、私も心残りはございません』

涙混じりの声に、春蘭は苦笑した。よほど、自分が消えたあとのことを心配していたのだろう。胡古に寄り添う白雪を見詰めながら、春蘭は先代の守り神のことを思い出した。

ある意味、自分と先代も似たような関係だったのかもしれない。力の大半を春蘭へと譲り渡した先代の守り神は、今は穏やかな眠りの中にある。命が消えるにはまだ時があるが、二度と目覚めることはないだろう。

「おーい、嬢ちゃん！　なにやってんだ！　早く来ねぇと置いて行っちまうぞ」

影春の声に顔をあげれば、春蘭を除く全員が崖を登り終えていた。どうやら、覚程は道順ほど悪戦苦闘はしなかったようだ。

『ずいぶんと礼儀のなっていない人間ですね。懲らしめてやりましょうか？』

「いや、気にするな」

影春たちは、春蘭を人間と思って疑っていないのだ。子供に対するそれでもしかたはないだろう。だが、春蘭の正体を知っている胡古にしてみれば、許し難い態度のようだ。

「もっと別れを惜しませてやりたいのだが……すまぬな」

『もったいないお言葉です。さあ、白雪。あなたの主となる方にご挨拶しなさい』

胡古に促され、春蘭の脳裏に白雪の声が響いた。

『うるせぇんだよ、くそじじい』

「……空耳か」

『ちびのくせにぼけてるのか』

影春の声は相変わらず渓谷に響いている。だから大声を出すな。おかげで空耳まで聞こえるではない

か、と春蘭は崖の上から手を振る影春を睨んだ。

『申しわけありません！　甘やかしてしまったばかりに、こんな性格になってしまって。しっかりとした言葉を教えたつもりが、邑の人間たちに影響を受けてしまったようで……』

『うっせ』

ふいっ、と胡古から視線を逸らした白雪に、やはり空耳ではなかったか、と春蘭は溜息をついた。ずいぶんと捻くれた性格の弟子だ。

「……まあ、よい。すまぬが先を急ぐので、少々乱暴になるぞ」

白雪の小さな体を摘まみ上げた春蘭は、迷った末に水筒に押し込んだ。水があれば干乾びて死ぬこともないだろうし、水筒の中ならば落とす心配もない。

『てめっ、だせ！　だせ！』

「よし、これでいい」

水筒を腰に結わえれば、断末魔のような悲鳴が頭に響いた。これはこれでうるさいが、うたた寝防止にはなるだろう。

『白雪をよろしくお願いいたします。口は悪いですが、心根は優しい子で――』

『かむぞ！　うろこをはがしてやる！』

噛みつかれても痛くはないし、そもそも春蘭に鱗はない。

「では、達者でな」

『はい。守り神様も、一日も早く真名を取り戻されますよう、お祈り申しあげます。それと、先に進まれるようでしたら、霧と黒い影にはお気をつけください』

「退治できればいいのだが、力を使うことができぬのではな」

『そんなことはございません』

慌てたように胡古が否定していると、水筒の中から悲痛な声が響いた。

『やだー、じじいー』

どうやら、白雪は胡古と離れるのが嫌だったよう

だ。水筒を内側から必死に蹴っているが、蓋が開くことはない。

『……どうぞ、行ってください』

じじい、じじい、と悲しげな声が脳裏に響き続ける。特殊な事情がある春蘭に預けようと思うくらいだ、胡古の寿命はすでに尽きかけているのかもしれない。

「ぬしも、隷属してやることができればよかったが……」

『私は白雪と違い、陸上では生きていけません。お気になさいませぬよう』

すまぬ、と春蘭は心の中で呟き、白桃の背に跨った。ゆっくりと体を起こした白桃は、春蘭を落とさないように気をつけながら、力強い跳躍で岸壁を登って行く。

脳裏に響く泣き声が、いっそう強さを増した。突然、長い時を共に暮らした相手と引き離されるのだ、白雪にしてみれば納得がいかないことばかりだろう。

だが、春蘭にはどうすることもできない。

自分がもし、胡古ならばきっと同じことを望んだはずだから。

「なにかあったのか？」

崖を登り切ると、そこにはすでに準備を整え終えた楊秀たちの姿があった。彼らを前にした春蘭は、すぐに気持ちを切り替える。

「よくはわからぬが、ここで変異が起きているらしい。霧が出てきたら気をつけよ」

それだけでなく、山塊（さんかい）との境目は、意外に近い。地脈から感じる気が、歩みを進める度に濃くなっているからだ。これから先は、より注意して進まねばならないだろう。

楊秀を先頭に、一行は再び歩き始めた。



山際が赤みを帯びはじめていた。
野山は、日暮れが早い。気を抜いていると、あっという間に辺りは闇に閉ざされてしまう。先を急ぐべきか、適当な場所で野宿の準備をするべきか、指揮官の判断能力が問われる時である。
「そろそろ、捜索を一旦打ち切るか」
楊秀の言葉に、誰もが歩みを止めた。
異を唱える者はいない。指揮官の命令は絶対であるうえに、道順と覚程は体力的な限界から、影春は空腹から、むしろ楊秀の意見を積極的に支持する様子だった。
「火を熾せるような場所を捜す必要があるな」
「自分たちが捜します」
「そうか。では、頼む」
早く休みたいのだろう。道順の発言に、覚程も文句を言わずに頷いている。
「張り切るのはよいが、あまり遠くへは行くなよ」
「はいっ」
「……了解しました」
二人の姿が、茂みの奥へと消えた。影春は空腹で、地響きのような音を立てる腹を押さえ、木の根元に蹲っていた。
「すごい音だな」
「おー」
言葉を交わす気力もないらしい。やれやれ、と肩を落とした春蘭は、腰に結わえたままになっている水筒へと顔を向けた。
あれから、白雪は一言も喋らない。泣き叫んでも意味がないと悟ったのか。もしくは、激しい揺れに

黙らざるを得なかったか。

蓋を開けて確認してみると、水面にぷかぷかと浮かぶ真っ白な蛙の姿があった。

まさか、この程度で力尽きてしまったのかと焦ったが、腹がぴくぴくと動いているところを見ると、どうやら熟睡しているらしい。

「……寝かせておいてやるか」

再び蓋を締め、春蘭は溜息をついた。

白雪には悪いことをしたと思う。もしも、春蘭が真名を奪われていなければ、胡古を隷属することができたのだ。

そもそも、真名を奪われなければ、仲望と出会うはずもなく、胡古たちと春蘭が顔を合わせることもなかったが、だからといって割り切ることは難しかった。

春蘭にできることは、一日も早く真名を取り戻し、白雪を隷属させてやることである。

「そうだ、白桃。真名を取り戻せば、ぬしに仲間ができるぞ。少し……いや、かなり小さいが」

「グルルル」

仲間ができる、というところに反応して、白桃が嬉しげにのどを鳴らした。

「そうか。嬉しいか」

白桃は思念を飛ばすことが苦手なため、白雪たちのように会話することはできない。ただ、言葉は理解できるので、態度や鳴き声で意思の疎通を行っていた。

「遊び相手にはなれそうにないが、きっと退屈はせぬぞ」

白桃は温厚な性格で、滅多に怒るということはない。きっと、嫌がらずに白雪の面倒を見てくれるだろう。

「ぬしの毛に白雪を乗せたら、見つからなくなりそうだな」

「グルル」

「間違って飲み込んではだめだぞ」

「バウッ」
飲み込んだりしない、と白桃が不満げに鳴いた——その時だった。
「ぎゃあああああっ！」
耳をつんざくような悲鳴が辺りに響き渡った。
立ったまま木に背を預けていた楊秀も、地面に座り込んでいた影春も即座に反応し、悲鳴が聞こえた方角へと走り出す。
春蘭も白桃の背に摑まり、二人のあとに続いた。
あれは道順の声だった。まさか、妖に襲われたのだろうか。いや、声が聞こえる範囲にいるのならば、白桃が真っ先に気付いたはずだ。
「道順、覚程！」
楊秀の呼び掛けに反応はない。
最悪の展開が春蘭の脳裏をよぎった時だった。前方を走っていた楊秀が、なにかに気付いたように足を止めた。
「止まれ！」
影春は訝しげな表情を浮かべながら、指示に従って足を止めた。白桃もなにかを感じたのか、ぴたりと立ち止まった。
楊秀は手前にある草むらの中に、なにかを見つけた様子だった。足首ほどの高さに、一本の細い紐が張られている。それを剣先で切断すれば、真横から一抱えもありそうな丸太が突き出してきた。
それを巧みに避けて、二ヶ所、三ヶ所と、設置されている罠を見つけては破壊していく。やがて視界が開けたと思えば、地面に伏せる覚程の姿があった。
なにをしているのかと思えば、すぐ傍に掘られた穴に向かって手を伸ばしているようだ。
「なにがあった！」
楊秀たちと共に駆け寄った春蘭が見たものは、地面に走った深い亀裂の途中で、覚程に片足を摑まれながら逆さ吊りになっている道順の哀れな姿だった。
「は、早く助けてくださいぃぃぃ」
慌てて引き上げれば、よほど恐ろしかったのだろ

う、道順は滂沱の涙を流し始めた。確認するために亀裂の中を覗けば、底には丁寧にも穂先のように鋭く削られた木の枝が幾本も設置されていた。確かに、これは怖い。

覚程が足首を掴まなかったら、怪我どころの話では済まなかっただろう。

「罠だな」

楊秀の視線を辿れば、亀裂を隠すように木の枝が敷かれ、表面を泥で覆った跡が残されていた。中に設置されていた木の槍も、明らかに人の手が加えられたものだ。

「だが、なんのための罠だ？」

亀裂を覗き込みながら春蘭が首を傾げた時、歓喜に溢れたような声が響いた。

「よっしゃあ、肉が掛かったぞー！」

「……」

誰もが沈黙する。

嫌というほど聞き覚えのある声に、春蘭は再会を喜ぶよりも脱力せずにはいられなかった。もしかしなくても、この複数の罠を仕掛けたのは――。

「子慮！」

春蘭が叫べば、剣を掲げた不自然な格好で固まっている虎慈軍隊長の姿があった。

「けっ、獲物が掛かったと思ったのによー」

お前らじゃ食えねぇだろうが、と子慮はぐちぐちと文句を言う。

それを、道順が恨みがましい眼差しで睨みつけていた。危うく、獲物の代わりとなりかけたのだ。当然の怒りだろう。

「でも、なんでお前らがいるんだ？」

心底不思議そうに首を傾げる子慮に、その場にいた全員が思わず頭を抱えた。遭難しても、子慮は相変わらずだ。

「調査隊がいつまで経っても戻らないから、わざわ

ざ捜索に来たんだ。それを、お前はなにを遊んでいるんだ！」

　青筋を立てて怒りを表す楊秀に、子慮は悪びれた様子もなく答える。

「んなの、手持ちの食糧が底をついたから、獲物を捕まえようとしてたに決まってんだろ。とりあえず、ここじゃなくて文重のとこに行こうぜ。あいつ怪我して動けねぇんだ」

「それを早く言え！」

「いちいち怒鳴んなくてもわかるっつうの」

　渋々といった態度で子慮が案内したのは、先ほどの落とし穴のように、大地の間にできた亀裂だった。深さはさほどないため、出入りも楽なのだろう。露出した地面の上には、横たわって眠っている文重の姿があった。

「文重！　肉じゃなくて助けを見つけてきたぞ！」

　嬉々として報告する子慮に、文重が億劫そうに目を開けた。そして、信じられないものでも見るように春蘭たちを指差す。

「……隊長、どうしましょう。幻が見えます」

「幻？」

「宋先生はまだしも、こんな場所に春蘭がいるとは思えません。とうとう毒が頭にまで回ったみたいです。俺は死ぬんでしょうか？　ああ、でも俺が死んだら、いったい誰が隊長の面倒を見るんだろう……心配で死ぬに死ねない」

「私は現実だぞ」

「……幻が喋った。もう終わりだ」

　なかなか現実を認めようとしない文重の脇に膝をつき、影春がさっそく治療を始めていた。

　怪我を負っているのは、右足らしい。熱を持って赤く腫れあがっている患部を触診して、面倒臭そうに唸った。

「こりゃ、毒だな。おい、子慮。怪我してから、こいつはどんな感じだった？」

「あーっと、最初は叫んでも殴っても起きなかった

ぜ。意識を取り戻したのは、昨日の朝だな。はじめはぼーっとしてたけど、そのうち喋れるようになった」

「ふむ。命にかかわるものではないか。じゃあ、体が自然に毒を中和するまで待ってた方がいいな。傷の方は血も止まってるし、化膿止めでも塗っとけばいいだろ」

紫色に変色している傷口を眺めていた影春は、あっさりと診断を下した。そして、持参してきた包みをごそごそと漁る。

「しかし、いったいなんにやられたんだ？」

水で洗った患部に、春蘭の手当に使用したのと同じ不気味な緑色の薬を塗布しながら、影春は興味深そうに訊ねた。視線を向けられた子慮は、曖昧な表情を浮かべる。

「いや、それが、よくわかんねぇんだ」

「どういうことだ？」

それまで、文重の怪我の手当を優先するために、黙り込んでいた楊秀が口を開いた。

「しかたねぇだろ。一面真っ白な霧でなにも見えなかったんだから。部下と一緒になって逃げるので精一杯だったんだよ」

「その部下はどうした。なぜ、ここにいない？」

「昨日、助かった六人の部下を先に下山させた。川沿いを下れば、邑に着くからな。ここにいても飢え死にするだけだ」

昨日ということは、捜索隊と入れ違いになったのかもしれない。

「こいつも一緒に行かせようとしたら、足手纏いになるからつって、嫌がったんだよ。怪我人はさっさと帰れってんだ」

「……その口振りでは、まるで自分だけここに残るつもりだったようだな」

嫌な予感が春蘭の胸を苦しめた。仲望が部下たちと共に下山したのならば、水神盤は邑のある方角を指すはずである。しかし、占の結果は、未だ山の奥

を指し示していた。
「逸れた奴らを捜してたんだよ」
「仲望はどうした」
春蘭の指摘に、子慮はぐっと押し黙った。逸れたままということか。なぜ、子慮たちはこんな山奥まで来たのだろうか。
「仲望とはどこで逸れたのだ？」
「採石場の近くだ」
子慮の言葉が正しいとすれば、仲望は不自由な足でここまでの距離を歩いたということになる。それはいくらなんでもむりがある。
「では、なぜぬしは採石場の近くを捜索しないのだ？」
「徐々に逃げてるうちに、ここまで来ちまったんだよ。別に迷子になったわけじゃねぇからな。勘違いすんなよ！」
「ここまでは、何者かに追われて来たのか？」
「逃げ切ったと思っても、しつこいくらい追っ掛けてくんだよ。霧が出ると、必ずあいつがやってくるみたいだ」
「……追い込まれたか」
子慮たちを襲ったものの正体はわからない。だが、それは意図して子慮たちを奥へ奥へと追い立てていたようだ。
もっとも、川が見つかったことで、その大半は下山してしまったが。
「そのようだな」
春蘭の意見に、楊秀も納得するように頷いた。
「ところで、ぬしらを襲ったものの特徴はわからぬのか？」
「なんとなくだが、黒くてでかかったような気がする。一瞬しか見てねぇから、よくわかんないけどな。あと、一撃がすげぇ速い。弾き返すだけで精一杯だったぜ」
「他には？」
「あーっと、なんか妙な赤い光を見たな。部下の奴

らも見たつってたし。霧の中で、三つの赤い光が不気味に光ってたんだよ」

「赤い光……」

助かったという龍乎兵が、確か同じ証言をしていたはずである。赤い光を放つ妖などいただろうか。春蘭は守り神であった時の記憶を辿る。

しかし、どれほど記憶を掘り起こそうとも、そのような特徴がある妖の話すら聞いた覚えはなかった。そうこうしている間に、文重の手当も終わり、日も徐々に暮れはじめていた。

子慮たちがいる亀裂は幅があるため、春蘭たちが入っても手狭さは感じない。道順と覚程がてきぱきと野宿の準備をはじめ、空腹が頂点に達した影春は、勝手に荷物から干し肉を取り出し齧っていた。

赤い光を放つ妖について悩んでいた春蘭は、ふと白雪ならばなにか知っているのではないかと思い至った。

水筒の蓋を開ければ、先ほどと同じ体勢で眠っている白雪の姿がある。水面に出ている頭を指先で突けば、ほどなく白雪の目が開いた。

『ちび。なんだちび』

眠たげな声には、不貞腐れたような響きが滲んでいた。どうやら、未だに胡古と引き離されたことを怒っているらしい。

「眠っていたところすまぬな。少し訊きたいことがある。ぬしは、三つの赤い光を放つ妖に心当たりはないか？」

『あかいの？　あかいのはしらない。でも、くろいのはだめ。じじいがだめだって。あぶないかもしれないから、いちばんふかいとこでかくれてろって』

「なぜ、だめなのだ？」

『じじいがだめだって。だからくろいのがみえたら、すぐにかくれる』

「どんな姿をしているのかわかるか？」

『よくわかんない。でも、ちょっとみたら、すごくおっきかった』

「他にはなにも知らぬか？」
『しらない。はらへった』
蛙はなにを食べるのだろうか、と春蘭は首を傾げ、干し肉を齧っている影春から、その欠片を失敬する。
「水にふやかしてから食べるのだぞ」
『なにこれ、かたい。や』
「ふやかせば食べられる」
干し肉の欠片を両手で摑んだ白雪は、水につけながら早くふやけるように必死で揉みはじめた。
一心不乱な姿が面白く、それをじっと眺めていれば、少しだけ不満げな白桃が春蘭の頬を舐めてくる。どうやら、白雪にだけ構う姿が面白くなかったらしい。
「白桃も見るか？　なにやら可愛らしいぞ」
水筒を差し出せば、興味を持ったらしい白桃が、干し肉を揉み続ける白雪をじっと見詰めた。
『かたい、かたい、あ、やわ。やわやわ』
ようやく目当ての柔らかさになったらしい。幸福そうに干し肉を咀嚼している。小さな欠片だが、白雪にはそれで充分だったらしく、豆のように膨れた腹を仰向けにして気持ちよさそうに水面を漂っていた。
「さて。私も、食事ができるまでひと眠りするか」
未だに白雪を観察している白桃の腹に体を預け、春蘭は目を閉じた。
これは、予感だ。
明日、春蘭は山堺に入ることになるかもしれない。もしも、仲望が妖に攫われたのであれば、必ず己が棲み家へと持ち帰っているはずである。獲物を家の外に放置するものはいない。
仲望は元禁軍の気術兵である。通常の人間よりも、山堺の狂った気に強い。たとえ山堺に連れて行かれたとしても、すぐに異常をきたすことはない。懸念があるとすれば、四年前の怪我により気を調整することが難しくなっていることだろう。万が一、攫猿の時のように暴走するようなことがあれば――。

まどろみの中、春蘭は手首に結んでいた髪紐を知らず握り締めていたのだった。

翌朝、誰よりも先に目覚めた春蘭は、亀裂の中から外の様子を窺っていた。朝の澄んだ空気の中、やはり聞こえるべき動物たちの鳴き声が一つとしてない。

しばらくして、文重を除く者たちが全員起床した。毒のせいで発熱している文重は、昨日より意識ははっきりとしているものの、未だに自力で歩くことは適わないらしい。

「ところでな、私に提案がある」

簡素な朝食を終えたあと、春蘭はそう切り出した。全員の視線が春蘭に向けられるのを待って、改めて口を開く。

「ここから先は、楊秀と二人で進もうと思う」

真っ先に反対したのは、熱のせいで顔を真っ赤に染めている文重だった。声を発することすら億劫な様子ではあるが、春蘭に対し猛然と抗議する。

「駄目ですっ。ただでさえ危険な場所なのに、さらに危険なところに行かせられるもんですか！」

「だがな、文重。仲望はおそらく、山塀の内部にいるのだ。中に入っても平気なのは、楊秀と私しかおらぬ。ぬしらでは、半日も経たぬうちに変調をきたしてしまうだろう」

「なぜ、自分は平気だと断言できるんだい？　君が不思議な子であることはわかっているけど、山塀に入っても平気でいられるなんて、さすがにおかしいよ」

「私の肉体は、神気の名残があるのだ。それが消えるまでは、山塀の狂った気にさらされても平気だ。理由は暇がないから省く。山塀に入れぬ者は足手纏いだ」

きつい言い方だが、事実に変わりはない。楊秀は道案内役の春蘭を守らねばならず、他の者たちが体

に変調をきたせば、その時点で足手纏いと化してしまう。仲望を捜すどころではない。

「ここに来る前に、滝壺があっただろう？　あそこで待っていてくれ」

胡古の力が満ちる場所ならば、よほど強力な妖でもない限り近寄ろうとはしないだろう。ここに留まっているよりは遥かに安全だ。

「おい、ちびっ子。俺たちは、仲望の他にもう一人の仲間を捜してるんだぞ。こいつ一人だったら、運べねぇだろうが」

「おそらく、その者は無事だ。ぬしらが消息を絶った日に、自力で邑まで下山しておる」

楊秀に確認するように顔を向ければ、肯定するように頷いた。

「行方知れずになっているのは、仲望と、採石場で働いていた人足たち、それに役人らだ。仲望以外の者たちも山塀にいるとすれば、すでに手遅れだと考えた方がいい」

山塀の気に狂うよりも先に、体力が持たないだろう。反論を封じられた子慮は、面白くなさそうに口を閉じた。

「どうかわかってほしい。これが、仲望を助けるための最良の手段だ」

だが、あくまでも春蘭を子供として扱っている文重は、危険だと言って譲ろうとはしない。覚程と道順は上司らの意見に従うつもりのようだ。

影春だけが妖を間近で見られないと嘆き悲しんでいた。遺体の一部だけでもいいから持ち帰って来てくれ、と楊秀に嘆願し却下されている。

文重がなにを言おうと、楊秀と二人で行くつもりでいた春蘭だったが、助けは意外な人物からもたらされた。

「じゃあ、しかたねぇな。俺らはその滝壺のとこで待ってるわ」

子慮の何気ない一言に、はじめは唖然としていた文重だったが、意味を理解するとすぐに猛然と反論

した。

「あんた、正気ですか？　こんな子供が山堺に向かうのを黙って見てろって言うんですか？」

「そうだ」

「ふざけないでください！」

辛そうに肩で息をしながら、文重は自分の上司を睨みつけた。そんな部下に対し、子慮は面倒臭そうに告げる。

「動けねぇ奴がなにを言っても意味ねぇだろ。ちびっ子の言うとおり、山堺に入るんなら俺らは足手纏いだろうが」

「うっ……」

珍しく正論を述べた子慮に対し、部下である道順と覚程は、「隊長がまともに喋ってる……！」と、別人でも見るような眼差しを向けていた。

「ってわけだ。山堺でもなんでも入って、さっさと仲望の野郎を見つけて来い」

偉そうな態度で踏ん反り返る子慮だったが、この時ばかりは春蘭も彼に感謝したくなった。どうやら、子慮は武芸だけで隊長に登りつめたわけではないようだ。無自覚かもしれないが、状況判断を的確に行っている。

さすがに、上司にそこまで言われれば黙らざるを得ないのか、文重は複雑な表情を浮かべていた。

「楊秀は反対せぬのか？」

「どの道、仲望の居場所までの案内係は必要だ。だが、なにかあったらこちらのことは気にせず一目散に逃げるのだぞ」

「わかっている」

優先すべきものがなにか、楊秀が考えている以上に春蘭も強く自覚している。華安を出る際に、いざという時の覚悟はしてあった。

脳裏に、翰栄の言葉が蘇る。

〝――今、春蘭がいる場所が限界なのかい？〟

まだ、その時ではない。

だから、自分は前に進もう。



日が登り切る前に、春蘭と楊秀は出立した。その際、春蘭は一番安全と思える道順に、白雪が入った水筒を渡した。滝壺に中身を注いでほしい、という言葉を添えて。

昨日はあまりにも唐突な別れだった。だからせめて、わずかな時間であっても、きちんと別れを済ませてほしい。それが、白雪の今後に強い影響を及ぼすことだろう。

もっとも、危険な場所にか弱い白雪を連れて行けないと思ったのが一番の理由だが。

「ふむ。このまま、真っ直ぐだな」

「今までにない急斜面だが……まあ、いい」

覚程たちに合わせる必要がなくなり、楊秀は今までとは比べものにならない速度で斜面を登っていく。

それに続く白桃は、心なしか楽しそうだ。ゆっくりと歩くよりは、走ったり、跳んだりする方が好きなのだろう。時折、楊秀と競争するように先頭に躍り出るほどである。

しかし、なぜか後方が気になるようで、楊秀を待つ間などに、林の奥をじっと見詰めていた。妖ならばもっと警戒する素振りを見せるが、いったいどうしたというのだろうか。

「……ところで、少し訊きたいことがあるのだが」

楊秀と二人きりという場面は、あるようでない。龍乎の詰所に行った帰りは二人だったが、あの時、春蘭は仲望を助けるべきかどうかで悩んでいた。そのせいもあり、玄楽のことを訊きそびれたままずるずると時だけが流れたのだ。

楊秀は玄楽の親友であった。

仲望を除いて、もっともあの男に近かった楊秀はなんと答えるだろうか。
「仲望の兄のことだ」
「玄楽のことか？」
「そうだ。どのような人間であったのか、ぬしから訊いてみたいと思ってな。迷惑でなければ教えてほしい」
「かまわんぞ」
予想通り、楊秀は気にする様子もなく頷いた。以前、春蘭が玄楽が生きているのだと告げたことにかんしては、子供の戯言という認識を貫き通している。楊秀が納得するまで言葉を重ねるのも面倒なため、あえてそのままにしている。
「あいつは、男として生まれたならば、こうありたいというまさに理想像そのものだったな。己に向けられた反感も、実力を示すことですべて黙らせていた。少なくとも、面と向かって嫌味を言う者はいなかったな」
「……そうか」
「ただ、奴にとって禁軍はけっして居心地のよい場所ではなかったようだ」
過去を懐かしみながらも、楊秀はなぜか後悔するような口振りで話を続けた。
「禁軍は、よくも悪くも陛下に近すぎた。せめて龍乎ならば、あいつも悩むことなどなかっただろうよ」
「なにを悩むのだ？」
「禁軍は陛下の勅令がなければ動かない。民がどれだけ困った事態に陥ったとしても、陛下の許可なく軍を動かすことはできぬのだ。たとえそれで民を見殺しにする結果となっても、な」
「……皇帝は、自国の民を見捨てるような男なのか？」
春蘭の問いに、楊秀は否定も肯定もしなかった。なにかに耐えるように眉を寄せたあと、自嘲するような笑みを浮かべた。

「私にもよくわからない。ただ、禁軍は皇帝陛下の手足だ。自らが意思を持ってはいけない。それは指揮系統の混乱に繋がるからだ。玄楽はそれを頭では理解していても、心の中では陛下の采配に反発しているようだった。四年前の戦も、不必要な虐殺だと憤っていたくらいだ」

「そうか」

話を聞く限りでは、鄭玄楽という男は義俠心に溢れた若者であったように思える。しかし、民のことを思う男が、大罪を犯すだろうか。

「仲望とは、仲はよかったのか？」

「もちろんだ。実に仲のよい兄弟だったぞ。ただ仲望の奴は、優秀すぎる兄のせいでいらぬ苦労をしていたがな」

「確かに、兄弟の誰かが優秀であれば、肩身の狭い思いをすることもある」

仲望にとって、玄楽は追い掛けるにはあまりにも大きすぎる存在だったのだろうか。春蘭にも歳の離れた兄がいた。記憶はおぼろげであるが、毎日が占師になるための修行であって、遊んでもらった覚えはない。

それに、兄との縁も十二の時に断たれてしまった。顔すら覚えていないといっても過言ではない。

「玄楽も仲望のことを大切にしていた。鄭家の次期当主は、正妻の子である仲望がなるべきだと主張していたほどだ」

「仲望は面倒臭いと言いそうだな」

「ああ。なぜ自分なんだ、と憤慨していた」

どちらも、あまり欲のない兄弟だったようだ。春蘭は楊秀から得た情報を吟味する。啓璋に訊いた時もそうだったが、やはり春蘭が描く玄楽の人物像とはかなり懸け離れていた。

楊秀は、玄楽を義俠心溢れる人物だという。

しかし、何度も思うが、ならばなぜ春蘭の大切なものを奪ったのだろうか。守り神がいなくなれば、邑を守るものはなにもない。多くの邑人たちの命が

失われるだろう。

それを玄楽が知らなかったとは思えない。彼の者を善人だというのならば、その理由を納得のいくように説明してもらいたかった。

春蘭は鬱屈を振り払うように、周囲を見回した。だいぶ奥へと進んだようだ。

「ところで、そろそろ山塀に入るやもしれぬ。心構えはよいか？」

「覚悟している。意識して気を操ればいいのだろう？」

「そうだ。妖が接近すれば白桃が気付く。できるだけ気の調整を意識せよ。その方が、おそらくもつ」

いざとなれば、そんな余裕はなくなってしまうだろうが、だからこそ、それまでなるべく体に負荷をかけないように気の調節を行う必要があった。

「気術兵であるぬしならば、山塀の境界くらいわかる――白桃？」

ぴたりと足を止めた白桃は、なぜか前方ではなく後方を窺うように振り返った。木々の間をじっと見詰めるが、よくわからないというように、しきりに首を傾げている。今朝から、いったいなにをそこまで気にしているのだろうか。

「なにかいたのか？」

相手が妖ならば、白桃の反応はもっと顕著だ。こんな穏やかな態度ではいられないだろう。

先に進んではまた立ち止まり、進んでは立ち止まりを繰り返している。後ろにいったいなにがあるというのか。

やがて、それに耐えられなくなったのは楊秀だった。白桃の背に跨っていた春蘭の体を持ち上げ、白桃に向かって口を開いた。

「春蘭は私が見ている。気になるなら、行って来い」

「バウッ」

ひと声鳴くと、白桃はその巨軀を空中に躍らせた。そのまま、一直線に茂みの中へと姿を消す。しばらくして、顔を真っ青にして飛び出してきたのは、見

覚えのある青年だった。
「洪采？」
整った容貌を歪め、必死の形相で駆けてくる青年は、名を郭洪采といった。攫猿の件で顔見知りとなり、命を助けられたり、狙われたりしている相手である。
癖のある髪を無造作に束ね、格好は楊秀たちと似たような旅装だ。身につけている武具は、以前と同じで最低限、必要なものしかない。
義賊、猩猩緋。
それが、洪采が属する集団であり、国から逆賊として追われている者たちでもあった。つまり、禁軍とは敵同士。
楊秀を見上げれば、案の定、今にも捕らえんばかりの表情だ。
「お嬢ちゃんんんっ、こいつをなんとかしてくれぇっ！」
「白桃。がぶっといってよいぞ」
「バウウウッ！」
やったー、とばかりに、白桃は洪采に襲い掛かる。それを巧みな動作で避けながら、洪采は抗議の声をあげた。
「いったい、俺がなにをしたっていうんだー！」
「私たちを尾行したではないか」
なるほど、白桃がずっと気にしていたのは洪采だったのか。納得して頷く春蘭に対し、洪采は必死だ。
「だからって、ひっ、ちょ、あっ、爪が痛い、爪が痛い！」
前脚でじゃれるようにしがみつかれ、洪采は情けない声をあげた。本気を出せば、白桃と互角に渡り合えるだろうが、さすがにここでことを構えるつもりはないようだ。
「白桃。もうよいぞ」
名残惜しそうに洪采から離れた白桃は、春蘭の許へと駆け寄ってきた。
「それで、なぜ私たちを尾行したのだ？」

「……ぜひご一緒させてもらいたくて」
「却下だ。なぜ、我々が逆賊と行動を共にしなければならん」
　強い嫌悪を示す楊秀に、洪釆は馬鹿にしたような表情を浮かべた。
「皇帝の狗のくせに、気安く話しかけないでくんない？」
「貴様。死にたいようだな」
「奇遇だな。こっちも、あんたを殺したくてうずうずしてるんだけど？」
　一触即発の空気が辺りに張り詰める。
　春蘭は怒鳴りたくなる気持ちを堪え、まず洪釆に視線を向けた。
「なぜ、ぬしはここにおるのだ？」
「うちの者も攫われたんだよ。んで、それを救出するために俺が来たってわけ。でも、肝心の居場所がわかんないからさー。お嬢ちゃんはなんか居場所がわかってるっぽいから、あとをついてけばどうにかなるかなって。実は昨日から尾行してました。その虎君は勘付いてたみたいだけどね」
　悪びれた様子もない洪釆に、春蘭は頭を押さえ、楊秀はますます殺気を漂わせた。このままでは、気術を使いこなす者同士の、無駄な一戦が勃発してしまう。
「どちらも、剣の柄から手を放せ」
　春蘭の怒りを含んだ声音に、二人は渋々とだが手を放した。だが、互いに睨み合ったままだ。こんなことをしている場合ではないのだが、と春蘭は嘆息した。
「俺も気術士だからさ、そっちの使えない狗よりよほど頼りになると思うぜ？」
「黙れ、野良の気術士風情が。私が使えないだと？笑わせるな」
「事実を言ったまでだ。皇帝の命令がなければ、なにもできない木偶のくせに」
「ほう。よほど私の剣の錆になりたいようだな」

「その言葉、そっくり返すぜ」
「ほう……。春蘭、少し待っていろ。今、口の減らない逆賊を誅してやる」
「はっ、できるもんならやってみろよ」
再び剣の柄に手が掛けられた。しかし、それが抜かれることはなかった。
「――ぬしら、よい大人が醜い言い争いなど、恥ずかしいとは思わぬのか。今、なにを優先すべきかよく考えよ」
双方ともになにか言い募ろうとするが、春蘭に睨まれれば口を閉ざすしかない。
「楊秀、ここは目を瞑ってくれ。無駄な争いは、仲望の命を縮めるだけだ。洪采のことは、まず仲望を助けてからでもよいだろう」
「……わかった」
「それと、洪采。ぬしも仲間を助けたいのならば、余計な口は慎め。ここで楊秀と殺し合っても意味はないぞ」
「……善処する」
なにもしていないのに、かなり疲れた気持ちになってしまうのはしかたないだろう。うんざりしながらも、春蘭は内心で気術士が一人増えたことを喜んでいた。
仲望が妖に捕らえられているのならば、洪采の存在は大きい。
唯一、懸念すべきことは、洪采に殺されそうになった経験があることだ。あれから命を狙われたことはないが、諦めたという保証はない。自分を殺すことを断念してくれればいいが、そうでないのならば警戒するに越したことはないだろう。
洪采が、ついでに春蘭と楊秀を殺そうとしない保証はないのだから。もっとも、それは楊秀にも言えることではあるが。
これ幸いにと、罪人として捕らえようとするかもしれない。
「戦力は増えた。だが、気苦労も増えた。どちらが

よかったのだろうな」
「どういう意味だよ、それ」
「自分の胸に手を当てて考えてみよ」
こうなったら、さっさと仲望を見つけ出す以外にない。斜面を登りながらも、互いを牽制することを忘れない二人を眺め、春蘭は暗澹たる溜息をついたのだった。

山堺に足を踏み入れた途端、空気の質が変わった気がした。
より濃密になったというべきか。守り神であった時は意識したことはなかったが、人の身にこれはきついだろう、と春蘭は眉を寄せた。
それは、楊秀と洪釆も同じようで、安定性を欠いた地脈の乱れに、必死に体内の気を調整しようと奮闘している。
「……霧が出てきたな」
周囲を白く染めるように立ち込めはじめた霧は、徐々に春蘭たちの視界を奪う。白桃のおかげで妖に気付けるが、そうでなければ不意をつかれて一巻の終わりだろう。
霧が出てきたら気をつけろ、という胡古の忠告が思い出される。
「偶然か……そうでなければ、これも妖の能力の一つか……？」
そのような能力を持つ妖に心当たりはない。山堺に入る前に占った方角をけっして見失わないようにしながら進んできたのに、この霧では方向感覚を失ってしまう。
水神盤での占は、地脈の乱れを受けかなり難しいものとなっている。むりやり気を押さえつけた上で占うことも可能だが、それは春蘭にとってかなりの負担となる作業だった。しかし、この霧ではそうも言っていられない。
春蘭は盆と水神盤を取り出し、占を試みた。

「ふむ……そろそろだな」
盤上に現れた文様が、仲望が近くにいることを報せてくれる。しかし、こうも霧が深くては、目で捜すことは不可能に近い。気力を消耗することになるが、限界まで水神盤に頼るしかないようだ。
「楊秀、洪采、そろそろ――」
「ガウッ」
近いぞ、と春蘭が告げるより先に、白桃が警戒するように声をあげた。
妖が近くにいる。異変に気付いたのか、楊秀と洪采も春蘭を守るように両脇へと移動し、剣を鞘から抜き放った。
「気をつけよっ」
体に絡みつくような霧に眉を顰めれば、前方の木の間を、赤い光が流れるようによぎった。思った以上に速い。
「……くるぞ」
どんな動きにも耐えられるよう、春蘭は白桃の背にしがみついた。
一撃目を受けたのは、洪采だった。霧の中から現れた黒い槍のようなものが、洪采の体目掛けて突き出される。それを剣で弾き、代わりに霧の中に向かって、鋭い突きを繰り出す。だが、手応えを告げる音はない。
「こやつは毒持ちだっ。怪我をすれば終わりだと思え！」
春蘭の警告に、なにも知らなかった洪采が「嘘だろっ！」と叫ぶ。洪采と楊秀は、巧みに防いでいるが反撃の糸口は摑めない様子だ。
せめて、この霧をどうにかできればいいのだが、風一つ吹かないことにはどうすることもできない。夜目の利く白桃も、さすがに霧の中では動くに動けないようだ。
しかし、止まったままでは恰好の標的となってしまう白桃は敵の鋭い攻撃を巧みに避けているが、背に春蘭を乗せていることもあり、反撃に転ずること

は難しいようだ。

気付けば、傍に楊秀と洪采の姿はなかった。顔をあげて周囲を見回すが、それらしい影はない。二人の声や、剣戟の音が聞こえないことから、近くにはいないのだということが知れた。

どうやら、敵の攻撃を避けているうちに二人と逸れてしまったらしい。いつの間にか止んだ攻撃に安堵しながらも、三人をばらばらにすることが敵の狙いだったのでは、と春蘭は疑った。

三人同時に相手をするよりは、個々に攻撃した方が能率的だ。この濃い霧も手伝って、迷わせることなど容易いはずだ。

「……どちらとも逸れたのはまずいな」

仲望の捜索を諦めて逃げることは可能だ。その途中で妖に襲われる可能性を考慮するならば、楊秀か洪采を見つける必要がある。せめて、二人の持ち物でもあれば居場所を探ることができるのだが、と春蘭は唇を噛んだ。

「せめて、霧が晴れさえすれば……」

二人を見つけることもできるのだが、と春蘭が嘆息した時だった。

『――かぜ、おこせる』

なぜか、いるはずもない白雪の声が脳裏に響いた。弾かれるように顔をあげ周囲を見回せば、白桃の頭部に埋もれる白雪の姿があった。

いったい、いつ水筒から出たのか、なぜ胡古に会いにはいかず、春蘭についてきてしまったのか。疑問は多々あったが、今、優先すべきは白雪の言葉だ。

「風を起こせるのか？」

『ん。とくい』

なんの前触れもなく、強い風が辺り一帯に吹き荒れた。春蘭は掌で白雪を庇いながら、もう片方の手で白桃にしがみつく。

耐えるように閉じていた瞼を開ければ、厚い帳のようであった霧は跡形もなく吹き飛んでいた。

「すごいな……」

春蘭の目の前には、より巨大な大木の群生が広がっていた。気も遠くなるような年月をかけ、ここまで成長したのだろう。

大木の根元付近を一面の苔が覆い、板のような木皮に守られた幹には大量の蔦が絡みついていた。顔を上に向ければ、複雑に伸びた枝と無数の葉が、天井のように光を遮っていた。

これでは、自然にどれほどの強風が吹いたとしても、霧は容易に消えてはくれなかっただろう。

「助かった」

『おれ、えらい？』

「ああ。白雪はすごいな」

今の春蘭には、どう足掻いてもできない芸当だ。以前ならば、呼吸するような感覚で風を操ることもできたのに。

自由に使えていたものが、なにも使えなくなってしまう。その不便さと、己の無力さに春蘭は苦笑した。

改めて周囲を見回すが、敵と思しき妖や、楊秀と洪采の姿はどこにもなかった。さほど移動したようには思えなかったが、二人は見えない敵から攻撃を受けているうちに、春蘭と逆方向に移動してしまったのかもしれない。

「さて、どうしたものか」

腕を組み、眉を寄せた時だった。背後から伸びた手が春蘭の口を覆い、続いて強い力に引き寄せられる。

「――！」

声にならない悲鳴がのどの奥に消える。暴れようとするが、拘束され身動き一つ適わなかった。すっぽりと体を覆われているようだ。

しかし、困惑する脳裏で、なにかがおかしいと理性が告げる。現に、主が危機に瀕しているにもかかわらず、白桃はのんびりとした様子で欠伸をしている。白桃が警戒しない、それは――。

「……どうして、春蘭がここにいるんだ？」

懐かしい声が、春蘭の耳朶を打った。

慌てて振り返れば、すぐ傍に仲望の顔があった。頬や額は薄汚れ、だいぶ憔悴した様子ではあるが、動けるということは大きな怪我を負ってはいないようだ。

だが、口と同時に鼻までも塞がれた春蘭はそれどころではない。

「むむぐっ」

「白桃もいるし、本物みたいだな」

「むー、むーっ」

「ああ、ごめん」

口元を覆っていた手が外され、春蘭は新鮮な空気を胸一杯に吸い込んだ。

「鼻まで押さえるな。ぬしは私を殺す気か」

抗議するように睨みつけた春蘭だったが、すぐに仲望の右肩に広がる血の痕に気付き顔を顰めた。なにかに刺されたのか、一部分だけ服が破れている箇所もある。

「肩を怪我したのか？」

「刺された」

「毒を持っていたのではないのか？　なぜ動けているのだ？」

同じように刺された文重は、熱に浮かされ動くことができずにいた。にもかかわらず、なぜ仲望は動き回ることができるのか。

「早い段階で毒抜きしたから。血が足りなくてふらふらするけど」

確かに、顔色は今にも倒れそうなほど悪い。春蘭に触れている手も冷たく、動きの一つ一つが億劫そうであった。

「助けてもらったんだよ」

「助け？」

誰に、と春蘭が首を傾げた時、木々の奥から二人の男が姿を現した。片方は仲望よりも大柄で、もう片方は小柄な男だった。どちらも生気がなく、目は

虚ろだ。

「採石場で働いていた人足らしい」

「なぜ、自我を保っていられるのだ？」

春蘭は困惑げに呟いた。採石場で働いていた者たちが消えたのは、仲望たちが捜索隊として華安を出立するよりも先だ。それから、それなりの日数が経っている。

いつから山堺にいるのかわからないが、通常の人間ならばすでに地脈の乱れに影響を受け自我を失っているはずだ。

「地脈が乱れている場所を避け、木に空いた穴で休息を取っていたんだ。俺は、それが見えるからね」

そういえば、仲望には地脈を流れる気を視ることができるのだと、楊秀は言っていた。ならば、気が薄くなっている部分を見つけることも容易いだろう。

「な、なんでこんなとこに子供がいるんだ？　それに、虎まで……」

驚いた声をあげたのは、大柄な男の方だった。逃げる気力もないのか、唖然とした顔付きで春蘭と白桃を凝視している。

一方、小柄な方は猜疑心に満ちた眼差しを春蘭に向けていた。確かに、山堺に子供がいるのは、不自然を通り越して異常ですらある。

「私のことは気にするな。ぬしらに害は及ぼさぬよ」

説明が面倒だし、いつまでも余裕があるとも思えない。いつまた霧が立ち込め、姿の見えない敵が襲ってこないとも限らないのだ。

「とりあえず、山堺から出ることが重要だ。気の薄い部分を歩いているとはいえ、そちらの二人は限界が近そうだ」

げっそりとやつれた二人はそう長くは持たないだろう。せめて山堺を出れば、狂った気の影響からは逃れることができる。

「それに、楊秀と洪……もう一人が山堺で迷子になっているのだ。彼の者たちとも合流できればよいの

だが……」

二人一緒にいてくれればいいが、それはそれで別の問題が勃発していそうだ。制御役の春蘭がいなければ、本気で殺し合いをしていてもおかしくはない。

「こればかりは、白桃の鼻が頼りだな」

水神盤を使うことは難しいため、ここは嗅覚に優れた白桃に二人の捜索を頼むしかない。そう遠くに行かない限り、見つけ出すのは難しいことではないはずだ。

「それよりも、春蘭。なぜ、ここに――」

いるんだ、という仲望の声は、白桃の警戒するような唸り声によって阻まれた。周囲を警戒するように見回した白桃は、春蘭を守るように立ちはだかる。妖が近くにいるのだろうか。

「気をつけよ」

最悪なことに、戦力である楊秀と洪采はいない。仲望や男たちに、妖と戦う力が残っているとは思えなかった。

翰采の言葉が現実になりそうだ。目の前で見捨てたら、仲望は春蘭を恨むだろうか。それとも、「しかたない」の一言で済ませてしまうだろうか。

「……まずいな、この辺りはあいつの縄張りだ」

「どういう意味だ？」

「くるぞ！」

仲望の鋭い声が飛んだ。霧はない。だが、それは確実にこちらへと向かってきているようだ。枝が連続して折れるような音が響き、それは春蘭たちの前に姿を現した。

大きさにして、俥一つ分はあるだろうか。黒々とした巨体からは、似合いの固そうな八本の足が伸びていた。

それは、三つの目を赤々と輝かせた巨大な蜘蛛だった。

距離はまだある。しかし、ここに現れた時の敏

捷な動きから、距離はあってないようなものだということが知れた。

はたして、白桃が勝てるかどうか。体格もさることながら、硬質そうな外殻は、白桃の鋭い爪や牙を容易に弾き返してしまいそうだ。

つくづく、守り神としての力を使えないことが歯痒い。本来ならば、この程度の妖など一瞬で片をつけることができるのに。

「……白桃が時を稼ぐ。その間に逃げよ」

振り返らずに告げれば、慌てて走り去る気配がした。いざとなれば、春蘭も白桃に乗って逃げるつもりだ。そのあとのことは保証できない。無事に逃げ切れればいいが、と思った瞬間だった。

春蘭の体がひょいと持ち上げられた。

仲望に抱えられたのだと気付いた瞬間、春蘭は声をあげていた。

「なぜ逃げぬのだ！」

「春蘭を置いていけるわけないだろ」

淡々と口にした台詞が終わらないうちに、仲望は春蘭を抱えたまま走り出した。しかし、片足の自由が利かないため、逃げる速度は遅い。白桃は振り返ることなく蜘蛛と対峙している。

「私には白桃がいるっ」

「それでも、できるだけ遠ざかっていた方が賢明だ。あと、落ちないように、しがみついてもらえるとありがたい」

しかたなく、春蘭は仲望の首に両腕を回した。白桃にしがみつくのとは、また違った感覚だ。落とされては大変なので、春蘭はできるだけしっかりと仲望にしがみついた。

白桃と巨大蜘蛛は、すでに視界から消えていた。だが、いつ現れてもいいように、春蘭は後方に目を配る。

――しかし、あれは妖だろうか。

巨大な蜘蛛の姿を思い出し、春蘭は自問自答した。妖とて、はじめから強力な強さを持っているわけ



ではない。歳を経ることによって徐々に力を増していくものなのだ。その過程で、弱いものは強いものに淘汰される。

元々、強い力を持つ生き物ならば、生き残る可能性が高くなる。巨大化し妖となった昆虫類は見たことがなかった。

あれは、厳しい生存競争の中で、なぜ生き残り続けることができたのか。納得できずにいた春蘭は、玉に白桃が戻ってきた感触を得た。

怪我はしていないようだ。それでも、玉に戻ってきたということは、足止めを振り切られたのか。走って追いかけるよりは、玉に戻った方が早いと判断したのだろう。このまま蜘蛛がこちらに気付かずにいてくれればいいのだが……。

「ちゅ、ぼ、どこかっ、かくれた、ほうが」

相手は鼻の利く獣ではない。走り続けるよりも、適当な場所を見つけて身を隠した方が賢明である。こちらに向かって来ても、気付かずに通りすぎる可能性もある。

「わかった」

速度を緩めた仲望は、肩で荒い息を繰り返しながら周囲を見回した。しかし、体を隠せるような茂みも、洞窟もない。

「せめて、死角になるようなところでもあれば――！」

突然、春蘭は放り出された。地面に落下する寸前で、玉から現れた白桃が春蘭を体で受け止める。

「仲望！」

春蘭が叫んだと同時に、仲望の体が真っ白な糸で覆われた。あっという間に、仲望は糸に絡め取られてしまった。

そして、その奥には不気味に光る赤い眼。

逃げなければ、という本能に駆られ、春蘭は白桃の背に飛び乗った。しかし、駆け出すと同時に、巨大蜘蛛もまた動き出す。どうやら見逃すつもりはないらしい。

命懸けの追い掛けっこは、唐突な乱入者たちによって遮られた。
「春蘭、無事か！」
「お嬢ちゃん、まだ生きてるっ？」
木々の間から飛び出してきた楊秀と洪釆が、同時に得物を巨大蜘蛛の頭上から振りかぶる。渾身の一撃は、しかし、敏捷な動きによって回避されてしまった。
「ちっ。どっかの誰かと一緒で、逃げ足だけは早いようだな」
「ああん？　それって、自分のことー？」
「私がいつ逃げた」
「都合が悪くなると、〝逆賊〟の一言で誤魔化そうとすんじゃん」
悪口の応酬をしながらも、二人は攻撃の手を緩めることはない。さすがに不利だと悟ったのか、巨大蜘蛛は、糸でぐるぐる巻きにされた仲望を抱え込み逃げ出した。
「逃がすかっ」
そのあとに、楊秀と洪釆が続く。
春蘭は躊躇した末に、白桃に彼らを追うように指示を出した。危険であることはわかっている。だが、まだここが限界ではないと、春蘭は自分に言い聞かせた。
巨大蜘蛛は、仲望を伴っているせいか、それまでよりも動きに俊敏さがないように見えた。仲望を手放せば追跡から逃れられるのだが、そうする気配は微塵もない。
妖はけっして知能が低い生物ではない。むしろ、長い歳月を生きてきただけあって、時として本能を抑え込むだけの理性を見せることもある。先日戦った攫猿のように。
だが、巨大蜘蛛は本能のままに行動している。特に、獲物に対する執着が並々ならぬものがあるのだ。
突如として視界が開けた。
鬱蒼と生い茂る木々の間にできた広場は、巨大な

蜘蛛が自由に行き来できるほどに広い。そして、なによりも春蘭の視線をくぎづけにしたのは、巨大な蜘蛛の背後に広がる光景だった。

木の間に張られた蜘蛛の巣には、おそらく、行方不明の人足や役人たちが体を蜘蛛の糸で巻かれ、宙吊りにされていた。

中には、すでに白骨化しはじめている遺体もある。あまりにも凄惨な光景に、春蘭は唇を噛み締めた。

その視線がある一点で止まる。

巣の真ん中に置かれた仲望は、ぐったりとした様子で意識があるようには見えない。生気の抜けた頬は〝死〟を連想させ、春蘭は思わず息を呑んだ。

――大丈夫。仲望はまだ生きている。

「私は、仲望を助ける。そちらは頼んだぞ！」

戦闘に専念する二人を大きく迂回して、白桃は仲望が吊るされている場所へと春蘭を運んだ。

「白桃、蜘蛛の糸は切れぬか？」

「バウウッ」

春蘭を背から下ろした白桃は、跳躍すると鋭い前脚の爪で糸を切り裂いた。仲望の体をはじめ、ぶら下げられていた者たちの体が地面に落下する。

その大半がすでに息絶えていた。仲望の許へと駆け寄った春蘭は、体に巻かれていた蜘蛛の糸をむしるようにして剝ぎ取る。

首に手を当てて確認すれば、弱々しい脈拍がそれでもしっかりと感じられた。全身をくまなく見回せば、腕の部分に新しい血が滲んでいた。毒針に刺されたのだ。他に傷は見当たらない。

「よかった……」

春蘭が気を緩めた時だった。白桃が春蘭の襟首を銜え、素早く跳躍する。すると、今まで春蘭がいた場所に、巨大蜘蛛の姿があった。仲望は、その脚の下だ。

巣を壊されたことに憤っているのか、巨大蜘蛛の不気味に赤く光る目には明らかな殺意が宿っていた。

「春蘭！」

「逃げろ！」

楊秀と洪采の叫びが木霊する。白桃の背に移動した春蘭は、振り落とされないように渾身の力でしがみついた。

風のような速さで近付いてくる巨大蜘蛛に、白桃は木々の枝を飛び移りながら逃げ回る。楊秀と洪采は、あまりの速さに迂闊に手を出せないようだ。

春蘭は影春から告げられた言葉を、予め二人に告げていた。気術を使用するのは一度限り。それも、ごくわずかの間しか使ってはならぬ、と。

地脈の乱れが激しい中で、通常のように気術を使えば、供給される気の量は膨大となる。体にかかる負担も倍ではすまないだろう。使うなとは言わない。だが、できる限り短くすませろ、と。

春蘭は激しい揺れに耐えながら、二人の様子を窺った。二人も、春蘭がなにを言いたいのか察したのだろう。揃って頷く。

あとは、呼吸の問題だ。

巨大蜘蛛は木々を薙ぎ倒す勢いで、春蘭へと向かってくる。

不思議と恐ろしいという思いはなかった。

攫猿と対峙した時は、心の底から恐怖を感じたのに。

己の心に生じたその差に疑問を覚えつつも、春蘭は声に出さずに、白桃に向かって念じた。

ぴくり、と白桃の耳が動く。

感情が伝わっているのだ。白桃はすぐさま逃走する方角を変更した。一際高い木に向かって跳躍し、そのまま巨大蜘蛛の頭上すれすれを飛び越える。着地と同時に、楊秀に向かって走り出した。

巨大蜘蛛は、執拗なまでに春蘭を追い掛ける。少し考えれば、それが罠であると気付くはずだが、頭に血がのぼっているのか疑う様子はない。もしも、これが攫猿ならば、春蘭の意図に勘付き、追撃を控えるだろう。どれほど頭に血がのぼっていても、常に冷静な部分を残している妖であった。

しかし、こいつはどうだろう。

ただ相手を追い回すだけで、少しも頭を使おうとはしない。攫猿ならば、仲望を人質にするくらいのことはするのに。

――思い違いでなければ、これの知能は思っていたよりも遥かに低い。

単純な罠でも充分に勝機はある。春蘭を乗せた白桃は、強い力で大地を蹴った。

この時、春蘭は油断をしていた。

見えない力に絡め取られたように、白桃の体が動きを止める。

とっさにしがみつく手に力を込めたおかげで投げ出されずに済んだが、代わりに蜘蛛の前面で無防備な姿をさらす結果となってしまった。

白桃は、透明な糸のようなものに絡め取られていた。水滴が付着したそれは、光を反射してきらきらと輝いている。

楊秀の焦ったような声が響く。

突進してくる蜘蛛の姿を確認した瞬間、聞き覚えのある声が耳朶を打った。

使用人たちが、こちらを見て何事かを囁き合っていた。また兄と自分を比べているのだろう。よく飽きないものだ。少年は冷め切った眼差しを彼らに向けた。

父は家を兄に継がせたがっていた。一方、妾(めかけ)の子であり、異国の血を色濃く受け継いでいた兄は、正妻の子である弟を後継ぎに推した。

使用人たちは、優秀である兄が家を継いでくれたらと思っているのだろう。人望も、能力も、血筋以外のすべてにおいて他者から抜きん出ている兄を、誰もが当主にと望んでいた。それに否定的なのは、兄自身くらいなものだ。

弟はけっして不出来ではなかった。

むしろ、兄に似て優秀ですらあった。しかし、強

すぎる光は、周囲のすべてを覆い隠してしまう。いくら弟が実力を示そうとも、誰もそれには見向きもしなかった。

『馬鹿だなぁ。普通、倒れるまで稽古するか？』

疲労のために稽古中に倒れた自分を見舞った兄は、しきりに馬鹿だと繰り返す。言われなくてもわかりきっていることだったが、面と向かって言われれば腹立たしいものがあった。

『自分に合った歩調でやりゃあいいんだよ。まったく、なにをそんなに焦ってるんだ？』

呆れたような口調。それもそうだろう。似たようなやり取りを、嫌というほど繰り返してきたのだから。

だって、あなただって倒れるほど練習したのだろう。周囲はあなたを天才だと持て囃すが、兄が人目から隠れるようにして鍛錬を行っていたことを知っている。

異国の血が入っていることを揶揄した奴らを見返すために、それこそ血反吐を吐くような努力をしたのだと知っている。誰にもなにも言わせないために、ずっと力を求め続けてきたことも全部。

自分はこの人の弟だから。

もっとも近い場所で、すべて見てきたのだから。

『まだ、周りの言葉を気にしてんのか？』

困ったように彼は笑う。

違う。自分はあなたの背を追い掛けていただけなのだ。周囲の言葉など、気にしなくなって久しい。だが唯一、気になった噂がある。

兄が、自分のことを心配するのは、いつか追い抜かれてしまうことを危惧しているからだ。だから、ほどほどにしろと優しい言葉をかけ、才能の成長を妨げているのだ、と。

むろん、それを信じたことなど一度としてなかった。心優しい兄が、そんなことを思うはずがないと知っていたから。

でも、一瞬だけ考えてしまった。

もしもそれが本当だったならば、自分はもっと楽になれただろう、と。完璧な兄にも欠点があったのだと、仄暗い喜びに打ち震えることができたのに。

『あんま無茶すんなよ』

お願いだから優しい言葉をかけないでほしい。

その度に、惨めになる自分がいる。ただ純粋に兄を慕っていた頃が懐かしい。ああ、自分はどうしてここまで浅ましくなってしまったのかと、嘆かずにいられなかった。

それは、忘れようと努めていた過去の話。

忘れられずに、むりやり記憶の奥底に押し込めていた懐かしくも残酷な思い出。

醜い自分を見たくなかった。

だから、なにも知らない振りをした。なによりも過去に煩わされたくなかったから。

ゆっくりと重い瞼を開ける。

眩しい光に、反射的に瞼を閉じそうになる。だが、なぜか開けなければならないような気がした。

徐々に色を映す視界。

その先に、見覚えのある少女の姿が映った。

蜘蛛の鋭い前脚による攻撃は、宙吊りにされていた白桃の体が落下したことにより辛うじて免れることができた。

それでも、依然として危険なことに変わりはない。今までは自由に動いていたが、また同じ目に遭わないとも限らなかった。白桃が動けなくなってしまえばそれまでだ。

どうする、と唇を噛んだ時だった。

「春蘭、右だ！　そこにはなにもない！」

掠れた声。

聞き覚えのある声に、春蘭は即座に反応した。主の意思が固まったことを察したのか、白桃は指示を出さなくても右に向かって跳躍する。

「仲望……？」

茫然としながらも視線を巡らせれば、いつもは前髪の下に隠している右目を晒し、こちらを凝視している仲望の姿があった。

ただ毒のせいで体が麻痺しているのか、体勢はうつぶせのままである。

「指示を出す！　言う通りに動いてくれ！」

どうやら、仲望には春蘭たちには見えないなにかが見えているようだ。

仲望の右目は、大地を走る気を視ることができるという。もしかすると、その影響を受けている蜘蛛が吐き出した透明な体液を、直接視認できるのかもしれない。

「そのまま上体を低くして、地面すれすれを行くんだ！」

白桃は身を翻し、身を屈めるようにして走り抜ける。その背後に、巨大な蜘蛛が続いた。「一直線に向かえ！」という仲望の言葉に顔をあげれば、目前に楊秀の姿があった。

白桃は楊秀目掛け、まっすぐ走り続ける。春蘭たちだけに注目を向けている巨大蜘蛛は、楊秀の存在に気付いていない。

楊秀が気術を発動させた。

全身を、淡い光が包み込む。だが、気を抜けば爆発してしまいそうなほど、激しく脈打っているのが見て取れた。

「今だ！」

仲望の声が響く。

白桃は、楊秀にぶつかる直前でその体を飛び越えた。巨大蜘蛛の足は止まらない。春蘭が振り返った時、楊秀は素手で巨大蜘蛛の突進を押さえ込んでいた。

そして、天から巨大蜘蛛目掛けて降ってくる影が一つ。楊秀と同じ、全身に気を巡らせた渾身の一撃を巨体に叩きこむ。

激しい轟音と共に、巨大蜘蛛の体が真横に断ち切られた。あまりにも強い衝撃だったのか、洪采の剣

は柄のすぐ根元から粉々に砕けていた。
「やった、のか？」
あまりにもあっけない結末に、春蘭は茫然とした。気術を使用した二人はへたり込んでいる。
――なにか納得がいかない。
巨大蜘蛛の死骸に近付いた春蘭は、ようやくその違和感の正体に気付くことができた。
「……これは、妖ではない」
いや、正確には妖で間違いはないだろう。長い年月を経て妖となり、また同じくらいの年月を経て育つのが通常だが、この巨大蜘蛛は、成長の速度が異常に速かった。
「なぜ……」
生まれたばかりの妖が、こんな短期間でここまで巨大化することができたのか。はっとして振り返れば、蜘蛛の巣が張られた奥には山積みになった白骨遺体があった。
「人を食ったせいで変容したのか」
通常、人の遺体は邑に降りなければ手に入れることはできない。妖は山堺から出ることを厭うが、自分の縄張りの近くに良質な餌場があったとすれば話は別だ。
はじめは、山に捨てられていた遺体でも見つけたのか。味をしめた妖は、霧に紛れ人足たちを攫った。だが、ここへ送られた者の大半は罪人である。役人たちも真剣に捜さないだろう。
だから、誰も異常な事態には気付かなかった。
巨大化した蜘蛛は、より大量の餌を求め、ついには採石場の人を襲うに至った。
森に動物たちを見なかったのも、すべてこの巨大蜘蛛のせいだろう。食べられたか、その前に逃げ出したか――。
巨大蜘蛛にとって、己の体を維持するために餌はなによりも重要だった。だから、餌を奪おうとした春蘭に対し大激怒したのだ。理性よりも本能が勝っている証拠である。

巨大蜘蛛にとって、春蘭たちは手強いがしょせんは餌である。まさか逆に自身がやられるとは思ってもみなかったに違いない。

「仲望はどうだ？」

仲望の容体を確認していた楊秀は、「毒にやられているようだが大丈夫だ」と告げた。

楊秀に抱き起こされた仲望は、疲労している様子はあったが、春蘭に向かって片手をあげるくらいの元気は残っていたようだ。思わずほっと安堵の息をつく。

「そうだ、白雪は」

あれだけ激しく動き回ったのだから、放り出されていてもおかしくはない。焦ったように周囲を見回していると、白桃が口を開けた。

『くらいー、せまいー、こわいー』

「……白雪」

そこには、べそべそと泣いている蛙の姿があった。安全ではあるが、想像すると確かに怖い。いったい、いつの間にそんなところに入ったんだ、と春蘭は思わず呆れてしまった。

そういえば洪采は、と今一度辺りを見回せば、疲れたように地面に座り込む洪采の傍に、いつの間にか、小柄な男と大柄な男の姿もあった。どうやら、彼らも無事であったらしい。なぜ、洪采と親しげに話しているのだろうか。

「洪采？」

声をかければ、小柄な男に支えられながら洪采が立ち上がっているところであった。それに、春蘭は目を眇める。

「ぬしの捜し人は見つかったのか？」

「ああ。悪運が強いみたいで、この通り無事だったよ。そっちの兄さんには世話になったみたいだから、礼を言わないとだな」

「……ということは、貴様らの仲間か」

楊秀が獰猛な声をあげる。小柄な男は引き攣ったような表情を浮かべ、「なに馬鹿正直に言ってるん

ですかっ」と、洪釆を責めた。
しかし、洪釆は素知らぬ顔で答える。
「そう。こいつは人足に紛れて、体格のいい奴らを猩猩緋に引き抜いてたんだよ」
告げられた事実に、楊秀が唖然とした表情を浮かべた。まさか、そんな場所から猩猩緋の人員を補充しているとは思ってもみなかったのだろう。春蘭も驚きに目を瞠った。
小柄な男は諦めたように天を仰ぎ、大柄な男は意味がわからないのか困惑するようにきょろきょろと目を動かしていた。
「罪人を使うのはいいけどさ、中には騙されてむりやり連れて来られた邑人もいたんだ。払われる給金もほんのわずか。それすら、役人たちが群がって懐に収めちまう。異を唱えれば、見せしめとして殺されたそうだ」
洪釆は愉快げに笑う。
その視線の先には、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる楊秀の姿があった。
「それも、すべて皇帝の遊行のため。なあ、禁軍の将軍様はなんのためにあんな男を守ってんの？　あんたが守るべきなのは、無慈悲に民を犠牲にするような人間なのかよ」
「黙れ」
「はっ、だから皇帝の狗って言われてんだよ。飼い主がどんな男でも、餌さえもらえれば喜んで尻尾を振るわけだ。そんな奴らの忠誠心とやらも、たかがしれてるな」
「貴様っ！」
楊秀が剣を振りかぶるが、洪釆は振り下ろす暇を与えずに二人を連れて茂みへと姿を消してしまった。
それを、楊秀は憎々しげな眼差しで睨んでいる。
「楊秀。挑発とわかる言葉にいちいち踊らされるな。それよりも、仲望を影春たちの許へと運ぶぞ」
「ああ……」
やりきれなさを滲ませながらも、楊秀はぐったり

としている仲望を担ぎ上げた。
仲望以外に生存者はいない。
巨大蜘蛛の餌になったか、衰弱して死んだか。人足として連れて来られた罪人も、邑人も、役人たちまでも、みな等しく命を奪われた。
直接、手を下したのは妖。
でも、きっかけを作ったのは――。



仲望の診察結果は、毒を受けて衰弱しているが命に別状はないというものだった。

右肩の傷はすでに塞がりかけているらしい。化膿もしていないことから、運がいいな、と影春は笑っていた。

無事に華安へと戻ったあとは大変だった。

啓璋と友寧は怪我を負った仲望を前に号泣し、春蘭は約束の期日中に黄海楼に行くことができず、一日ほど約束を反故にしてしまった。それに対し、満面の笑みを浮かべた蟬英は、容赦なくただ働きを提示してきた。

どれほど言い訳しようが、約束を破ってしまったのは事実。春蘭は反論せずに頷いたのだった。

「疲れた。蟬英は人遣いが荒い」

寝台に横たわる仲望に向かい、春蘭はつい愚痴を零した。

「お疲れ様」

「うむ」

仲望の一回りほど細くなってしまった腕が、春蘭の視界に映る。頭に感じる感触に撫でられているのだということがわかった。

「体調はどうだ？」

華安に戻ってきてから、三日が経った。衰弱の激しい仲望は、影春から最低でも六日は絶対安静を言い渡されている。

仲望は不本意そうだったが、そこは過保護な家人たちが常に目を光らせているせいで、寝台から出ることは叶わないようだった。以前、春蘭自身も似たような目に遭ったため、その気持ちはとてもよく理

解できた。
「だいぶいいよ。まだ眩暈はあるけどね」
「二回も毒を受けたのだ。それくらいで済んでよかったと思うのだな」
「宋先生にも言われたよ」
そうか、と春蘭は頷くと、手に持っていたものを仲望の傍に置いた。
「……これは」
「ぬしから預かった髪紐だ。無事とは言い難いが、ちゃんと帰ってきたのだ、ぬしに返そうと思ってな」
仲望は髪紐を手にとってじっと眺める。
「しかし、結局、ぬしの帰りがあまりにも遅いから迎えに行ってしまったな」
「無謀だと思わなかったのかい？」
真っ直ぐな視線を向けられ、春蘭は苦笑した。
無謀であるという自覚がなかったわけではない。だが、その度に胸に響く声があった。
〝――春蘭がいる場所が限界なのかい？〟
あの後押しがあったからこそ、仲望を助けることができたのだと思う。不本意ではあるが、あとで顔を合わせた時に礼を言っておこう。
「無謀でもなんでも、ぬしに死なれては困るのだ。それに、まだ玄楽のことをなにも聞いていないしな」
「……ああ、それでか」
青白い顔色に、仲望はどこか納得したような表情を浮かべながら頷いた。意味がわからずに、春蘭は訝しげに眉を寄せる。
「なにがだ？」
「道中によく昔の夢を見るようになったんだよ。春蘭に言われ続けたせいで、つい意識してしまったのかもね」
「都合がよいではないか」

知らない、どうでもいい、と拒否ばかりされていたのだ、これで玄楽についての情報が手に入る。嬉々として身を乗り出した春蘭だったが、続く仲望の言葉に体を強張らせることになる。

「春蘭から真名を奪ったのは、本当に兄だったのだろうか？」

「……どういう意味だ」

「兄は、理由もなくそんなことをするような人ではない」

頭を鈍器で殴られたような衝撃が襲った。

わけもなく手が震える。

息苦しさに、のどが掠れたような声をあげた。

――これは、なんだ？

今までに感じたことのないはじめての感情に、春蘭は戸惑った。ただわかるのは、どす黒い負の感情が胸中に渦巻いているということだけ。

だが、仲望は春蘭の変化には気付かずに言葉を続けた。

「困っているような人がいれば、必ず手を差し伸べるような人だった。誰からも慕われ、敬われていた。だから、俺には――」

「そうか」

唇から漏れた声は、思った以上に大きく響いた。感情の籠もらぬ声に、仲望がわずかに眉を寄せたのが見えた。

心が痛かった。

そこで春蘭はようやく、なぜ自分がむりやりにでも仲望から玄楽のことを聞き出そうとしていたのか、その理由に気付いた。

楊秀や啓璋たちからは聞きたくなかったのだ。

彼らは玄楽に対して、尊敬の念を抱いている。春蘭にとってみれば、あの男は大罪人であった。憎き相手を敬われるなど吐き気がする。

おそらく、自分は無意識に仲望が兄に抱く複雑な

感情に気付いていた。だから、仲望ならば春蘭を不快にせず、玄楽にかんする情報をくれるはずだと思った。

しかし、いざ聞いてみると、それは単なる勘違いだとわかった。

春蘭から無慈悲にも真名を奪った男は、鄭玄楽である。どのような理由があったとしても、それに間違いはない。

だが、仲望は春蘭を疑った。

そのことが、予想以上に衝撃だったらしい。仲望は自分の言葉を信じてくれた——そう思っていたのは間違いだったようだ。

「結局は兄弟ということか」

自嘲気味に呟く。

なぜだろうか、手酷く裏切られたような気分だ。はじめから味方だったわけでもないのに。そう思えば思うほど、衝撃を受けている自分が滑稽でしかたなかった。

「春蘭？」

「私の名を呼ぶな！」

苛立ちに駆られるまま、春蘭は叫んだ。

仲望が寝台から体を起こそうとしたが、その前に春蘭は寝室から飛び出した。

回廊を風のように駆け、自分の房室に入ると勢いよく扉を閉めた。そして、その場にずるずると座り込む。

「……白桃」

唯一、心から信頼する神獣の名を呼べば、真っ白な虎が光と共に姿を現した。白桃は気遣うように、春蘭に寄り添う。

『みずでてる。ふしぎ』

「白雪？」

卓の上に置かれた平たい椀から、真っ白い蛙がひょっこりと頭を覗かせる。

冷たい水が張られたそこは、玉に入ることのできない白雪のために春蘭が用意した小さな棲み家だっ

た。

『めからでてる。みず。なんで？』

不思議そうな声に、春蘭は己が泣いていることに気付いた。悲しくもなんともないはずなのに涙は止まらない。

衝撃を受けるほど、自分は無意識に仲望に依存していたというのか。ならば、なんと滑稽なことだろう。

兄に対し反発心を持っていたところで、尊敬していることに変わりはないのだ。いざとなれば、仲望は玄楽の味方となるだろう。

ただ、そう考えるだけで、胸に引き攣ったような痛みが走った。

「なぜ、だろうな……」

人に戻ってからは、わからないことばかりだ。

春蘭は白桃の背に顔を押しつけ、声にならない嗚咽を零した。

薄闇の中、女は震えていた。

なぜ、と声にならない音が漏れる。

手にあるのは、一枚の紙。厳重な管理が敷かれている後宮、それも寵妃である自分が暮らす西離宮は希代の盗賊であってもおいそれと忍び込むことはできない。

特に皇帝の後継者問題が取り沙汰されるようになってからは、警備の者を増やすようにと宦官たちに命じてある。

特別に禁軍の中でも腕に自信のある者たちを配置してもらえるようにと、閨で皇帝にも願い出ておいた。

「なのに、どうして……」

黎貴妃は唇を噛んだ。

朝まではこのようなものはなかった。お付きの女官を連れて庭園を散策した黎貴妃は、いつものように気に入りの東屋へと向かった。そこから眺める

庭園の美しさは、何度見ても飽きることはない。後宮での陰湿な争いに疲れた黎貴妃の心が休まる、唯一の場所でもあった。

一人きりになりたいからと人払いをしたあとで、卓の上に折り畳まれるようにして置かれていた紙に気付いた。

訝しく思いながら開いたそこには、見覚えのある文字が躍っていた。

〝――皇帝の玉を壊せ。さもなくば、公子の出生の秘密を公表する〟

そこから、どうやって寝室に戻ったのか覚えていない。黎貴妃に従順である女官や宦官たちは、気分が優れないとでも思っただろう。余計な口は利かないようにと、普段から命じてある。

寝台で自身の体を抱き締めながら、黎貴妃は必死で頭を巡らせた。

真実を知る者は、自分と、あの不思議な少女以外にいなかったはずだ。言葉を交わしたのは一度きり。それでも、不思議とあの少女が他者に漏らすはずがないという確信があった。

重要なのは、どこから情報が漏れたのかではない。あの男に見つかってしまったという事実だ。主のためならば、どこまでも残酷になれる、悪鬼のような男。

「どうすれば……」

玉を壊すことなどできるはずがない。

寵妃ではあるが、閨を共にする際は沸儀（ふつぎ）に忠実な宦官たちが、黎貴妃の体をくまなく調べる。凶器を隠し持っていないかどうか確認するためだ。それは子を産んだ今でも変わらずに行われている。つまり、沸儀は未だ自分に心を許してはいないのだ。あくまでも、後宮の女たちの中で寵愛を受けているにすぎない。

皇帝がもっとも無防備になる場所ではあるが、得

物を隠せない以上、素手で玉を壊すことなどできなかった。

だが、やらねば、この身はお終いだ。自分だけではなく、我が子の命すらも――。

異形の血を引く子ではある。しかし、それでも自分が腹を痛めて産み落とした子でもあるのだ。

噛み締めた唇から、血の味が広がった。

なぜ、解放してくれないのだろうか。

すべてを捨てて、忘れて、ようやく新しい生活を手に入れたのに。

黎貴妃は、震える体を抱き締めて欄干へと出た。

いつの間にか陽が落ちていたらしい。淡い月の光が、自分のために造られた見事な庭園を照らし出している。

――ここから飛び下りれば、楽になれるだろうか。

痛みは一瞬に違いない。

それですべてを忘れられる。

手をかけた欄干は、驚くほど冷たい。それが、霞みがかった頭に、わずかながら冷静さを取り戻させた。

「そうよ……」

万が一、この事実が公表されようとも、証拠はもう残っていない。真実を知る女は、刺客を放って殺させた。それが攫猿(かくえん)を華安に招き寄せる結果となってしまったが、そちらの方も上手く処分することができた。

いざとなれば、皇帝の寵愛を独占する自分に対する嫉妬だと、鼻先で笑って流せばいい。それに似たような中傷は今までにもあったではないか。今回だって同じように潰せばいい。そうできるだけの権力はあるのだから。

大丈夫だ、と黎貴妃は何度も呟く。

しかし、脳裏からは、不気味な鬼面を被った男の姿が離れなかった。

了

あとがき

華国神記も二冊目となりました。一巻よりも華国が置かれた状況がわかってくるかと思います。春蘭も一巻以上に、三百年の差に戸惑いを隠せません。三百年前といいますと、日本は江戸時代ですからね。さすがにそこまで発展に差はありませんが、真新しいものや、すでに廃れてしまったものが数多くあるかと思います。

人として生きている時には当然のようにあったそれも、三百年後には過去の遺物となっている。きっと、悲しみや寂しさだけでなく、複雑な気持ちに駆られるはずです。春蘭の目的は真名を取り戻すことですが、それ以外の困惑や葛藤にも目を留めていただければ幸いです。

そして、前回はダメ人間っぷりが激しかった仲望ですが、二巻でちょっと名誉挽回できたでしょうか？　できてない？　閑職に回された挙句、滅多に出仕しませんからね……。家でも一日中ごろごろしてるわけですから、ちょっと働いたところで見直してはもらえないかもしれません（笑）。

さてさて、今回もご迷惑をかけてしまった担当さん。締め切り破りの常習ですみません。あとがきは謝罪の場ではないと思いますが、土下座しておきます。校正者さんもありがとうござ

います。イラストレーターの由貴さんも、前回にも増して素敵なイラストをありがとうございます。表紙の春蘭がとっても可愛いです。

そして、本書の完成に関わった方々と、本書を手にとって下さった読者の皆様にも、心からのお礼と感謝を。

次回、嫁（？）に愛想をつかされた仲望は、無事復縁できるのか。

三巻目こそ、仲望のかっこよさをアピールする機会はくるのか。

ご期待ください。

九条　菜月

ご感想・ご意見をお寄せください。
イラストの投稿も受け付けております。
なお、投稿作品をお送りいただく際には、編集部
(tel:03-3563-3692、e-mail:mail@c-novels.com)
まで、事前に必ずご連絡ください。

C・NOVELS Fantasia

妖霧に惑いし者
——華国神記

2011年10月25日　初版発行

著　者　九条菜月
発行者　小林敬和
発行所　中央公論新社
〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
電話　販売 03-3563-1431　編集 03-3563-3692
URL http://www.chuko.co.jp/

ＤＴＰ　ハンズ・ミケ
印　刷　三晃印刷（本文）
大熊整美堂（カバー・表紙）
製　本　小泉製本

©2011 Natsuki KUJO
Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Printed in Japan　ISBN978-4-12-501173-8 C0293

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ
個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

第9回 C★NOVELS大賞 募集中！

あなたの作品がC★NOVELSを変える！

みずみずしいキャラクター、
はじけるストーリー、
夢中になれる小説をお待ちしています。

賞

大賞作品には賞金100万円

刊行時には別途当社規定印税をお支払いいたします。

出版

大賞及び優秀作品は当社から出版されます。

第1回	大賞	藤原瑞記	光降る精霊の森
	特別賞	内田響子	聖者の異端書
第2回	大賞	多崎 礼	煌夜祭（こうやさい）
	特別賞	九条菜月	ヴェアヴォルフ　オルデンベルク探偵事務所録
第3回	特別賞	海原育人	ドラゴンキラーあります
	特別賞	篠月美弥	契火（けいか）の末裔（まつえい）
第4回	大賞	夏目 翠	翡翠の封印
	特別賞	木下 祥	マルゴの調停人
	特別賞	天堂里砂	紺碧のサリフィーラ
第5回	大賞	葦原 青	遙かなる虹の大地　架橋技師伝
	特別賞	涼原みなと	赤の円環（トーラス）
第6回	大賞	黒川裕子	四界物語1　金翅のファティオータ
	特別賞	片倉 一	風の島の竜使い
第7回	特別賞	あやめゆう	RINGADAWN〈リンガドン〉　妖精姫と灰色狼
	特別賞	尾白未果	災獣たちの楽土1　雷獅子の守り

応募規定

❶プリントアウトした原稿、❷表紙＋あらすじ、❸エントリーシート、❹テキストデータを同封し、お送りください。

❶プリントアウトした原稿

「原稿」は必ずワープロ原稿で、40字×40行を1枚とし、90枚以上120枚まで。

※プリントアウトには通しナンバーを付け、縦書き、A4普通紙に印字のこと。感熱紙での印字、手書きの原稿はお断りいたします。

❷表紙＋あらすじ（各1枚）

表紙には「作品タイトル」と「ペンネーム」を記し、あらすじは800字以内でご記入ください。

❸エントリーシート

C★NOVELSドットコム[http://www.c-novels.com/]内の「C★NOVELS大賞」ページよりダウンロードし、必要事項を記入のこと。

※❶❷❸は、右肩をダブルクリップで綴じてください。

❹テキストデータ

メディアは、FDまたはCD-ROM。ラベルにペンネーム・本名・作品タイトルを明記すること。必ず「テキスト形式」で、以下のデータを揃えてください。

ⓐ原稿、あらすじ等、❶❷でプリントアウトしたものすべて

ⓑエントリーシートに記入した要素

応募資格

性別、年齢、プロ・アマを問いません。

選考及び発表

C★NOVELSファンタジア編集部で選考を行ない、大賞及び優秀作品を決定。2013年2月中旬に、C★NOVELS公式サイト、メールマガジン、折り込みチラシ等で発表する予定です（一次選考通過者には短い選評をお送りします）。

注意事項

- 複数作品での応募可。ただし、1作品ずつ別送のこと。
- 応募作品は返却しません。選考に関する問い合わせには応じられません。
- 同じ作品の他の小説賞への二重応募は認めません。
- 未発表作品に限ります。ただし、営利を目的とせず運営される個人のウェブサイトやメールマガジン、同人誌等での作品掲載は、未発表とみなし、応募を受け付けます（掲載したサイト名、同人誌名等を明記のこと）。
- 入選作の出版権、映像化権、電子出版権、および二次使用権など、発生する全ての権利は中央公論新社に帰属します。
- ご提供いただいた個人情報は、賞選考に関わる業務以外には使用いたしません。

締切

2012年9月30日（当日消印有効）

あて先

〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
中央公論新社「第9回C★NOVELS大賞」係

（2011年9月改訂）

主催・C★NOVELSファンタジア編集部

九条菜月の本

翼を継ぐ者

1 契約の紋章
シュルベル王国の小さな農村で育った少女リディア。ある日、村に他領の騎士が乗り込んでくる。リディアは主家の継承者の証を持っていて、自分たちは迎えにきたというのだが……。

2 紋章の騎士
紋章貴族として生きる決意をしたリディアの前に立ちふさがる難問。
――戦争か？　和平か？
自身の判断で人々の未来が決まる。
究極の決断を迫られ惑う彼女の命を狙い、刺客が放たれた！

3 封印の紋章
シュルベル、カーランド両国で高まる戦争の機運。二つの国に生きる、二人の少女は、争いを避けるため、それぞれの戦いに挑む！
一方、国内では教会を巡り、不穏な動きが加速していた。

4 紋章の覇者
国境で戦の火蓋が切られた。
命を狙われた一連の出来事の裏に義兄がいたことを知り傷つくリディアだったが、紋章に秘められた力を使い、起死回生の手に打って出る！
シリーズ完結巻



イラスト／キヲー

九条菜月の本

魂葬屋奇談

空の欠片

平凡を自認する高校生・深波。学校に紛れこむ自分にしか見えない少年の存在に気付いたことで、平凡な人生に別れを告げることに！

淡月の夢

助人となった深波。見知らぬ少女に喧嘩を売られ、ユキからは呼び出され休む暇がない。今回は警察から欠片を盗み出せって……⁉

黄昏の異邦人

三日間だけだからとユキに拝み倒され、魂葬屋見習い・千早の最終試験に駆り出された深波。どうやら彼は訳ありのようで……。

追憶の詩

通り魔が頻発する地区で、使い魔を連れた男女に出会った深波。時雨からは「死にたくなければ近付くな」と警告されるが……。

螺旋の闇

ユキの失った生前の記憶に繋がる日記帳を手にした深波。意を決して、調査を始めようとした矢先に生意気な魂葬屋に捕まって……⁉

蒼天の翼

ユキの記憶をたぐる手がかりを僅差で失った深波。一度は落ち込むが、再び立ち上がったその身に危機が迫る！　シリーズ、完結！



イラスト／如月水

九条菜月の本

オルデンベルク探偵事務所録

ヴェアヴォルフ

20世紀初頭ベルリン。探偵ジークは、長い任務から帰還した途端、人狼の少年エルの世話のみならず、新たな依頼を押し付けられる。そこに見え隠れする人狼の影……。第2回C★NOVELS大賞特別賞受賞作！

ヴァンピーア

不可解な状況で消えた女性の遺体探索依頼が探偵事務所に舞いこむ。探偵フェルが派遣されるが、到着直後から相次ぐ殺人事件。お転婆な少女に邪魔されながらも、地精の協力を得て謎に挑むが――。

ヘクセ 上

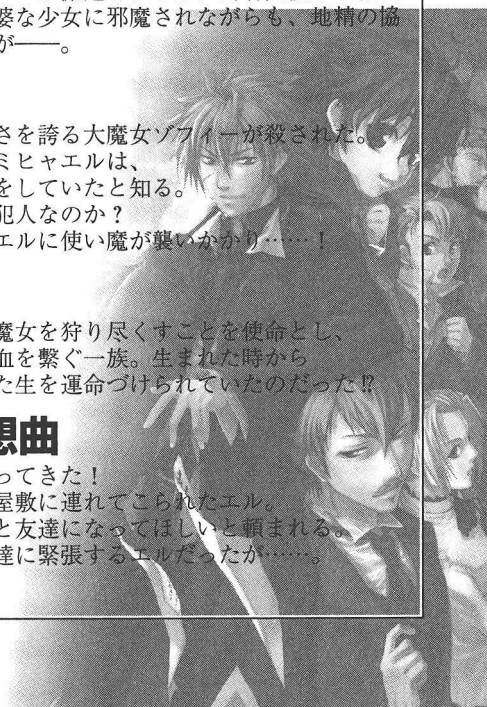
凄艶な美しさと強さを誇る大魔女ゾフィーが殺された。
調査に乗り出したミヒャエルは、
彼女が後継者選びをしていたと知る。
弟子たちの誰かが犯人なのか？
核心に迫るミヒャエルに使い魔が襲いかかり……！

ヘクセ 下

人の世の理を乱す魔女を狩り尽くすことを使命とし、
歴史の陰で連綿と血を繋ぐ一族。生まれた時から
彼らは血にまみれた生を運命づけられていたのだった⁉

エルの幻想曲

エル＆ジークが帰ってきた！
兄貴分クリスにお屋敷に連れてこられたエル。
そこに住む女の子と友達になってほしいと頼まれる。
初めての人間の友達に緊張するエルだったが……。
五篇収録。



イラスト／伊藤明十

夏目 翠の本

赦状のザハト

1 精霊の枷鎖

育ての親を殺したと、無実の罪を着せられ逃げ出した青年ザハト。ツイてるのが自慢だったのに、一転不運に見舞われる。守銭奴の精霊に呪いをかけられ、解呪の旅に出る羽目に！

2 番人の魔女

刻々と進行する呪いに苦しめられるザハト。
ケチな精霊と縁を切るためには、精霊石を手に入れる必要があると知り、〈黒犬〉の頭アジードから奪う決意をする！

3 邪眼の魔術士

かわいがっていた弟分アルの裏切りに衝撃を受けるザハト。
同時に〈黒犬〉が国家転覆を狙っていること、〈番人の魔女〉の狙う相手がトカロアにいることを知る。
呪いの成就まで猶予は数日。
ザハトの運命は⁉



イラスト／萩谷薫

黒川裕子の本

四界物語

1 金翅(きんし)のファティオータ

トゲウオ退治を任とする波頭馬の騎士シルッカ。第一皇子の相棒に指名されるが、その生まれを蔑まれていた。初陣の夜、トゲウオの幼生を拾い……。第6回C★NOVELS大賞受賞作。

2 異玉の騎士

竜騎士として帝国と戦うことを求められるシルッカと、父に裏切られたことを知り傷つくリンゼイ・ヴォー。全面戦争を目前に惑う二人のくだす結論とは？

3 大陸の王

混乱の中、シルッカ、リンゼイ・ヴォーそしてファティオータの二人と一匹は、離ればなれになった。シルッカは墜ちたファティオータを救えるのか？　世界の行方は!?　シリーズ完結！



イラスト／黒葉.K

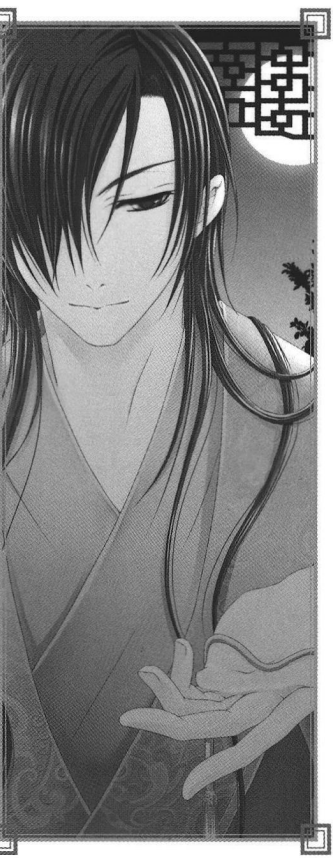
9784125011738

ISBN978-4-12-501173-8

C0293 ¥900E

1920293009001

定価 本体900円+税



守護を欠く邑に水害を避ける術はない——近づく雨期に焦る元神様・春蘭は、真名盗人と出会えぬまま鄭家に居候中。特技を生かし妓楼で占師として働きはじめたが、疫発生の卦を得て、都の護りの弱体化を疑う。それを裏づけるように賦役で山に送られた罪人、さらに官吏までもが忽然と消える事件が起こる。家主の仲望は〈気〉を視る能力を買われ、街の守備兵〈龍乎〉と共に捜索隊に駆り出されてしまうが……。